

山岳

第二十四年
第二號

山岳

第二十四年
第二號

黑部號

第三

目次

本欄

黒部源流地の日	冠松次郎	一頁
黒部川	渡邊漸	一〇
岩苔小谷湖行記	角田吉夫	九一
附録		

紅葉と新雪の黒部流域	冠松次郎	一〇一
雑録		

毛勝岳	冠松次郎	一四三
五月の早月尾根と八峰	高橋健治	一五〇
黒部川の發電所	S. B. 生	一六〇
雑報		
○山小屋		自一六五至一七五

○各學校山岳部消息
○會員通信

會 報

自一七六
至一七九

○本會集會室兼圖書室に就て○會員の計報○新入會員紹介○退會者○會務報告○本會規則拔萃○投稿規定

圖 版

對頁

○樹 氷(グラビヤ).....(卷頭)

○祖父谷落口附近より見たる黒部五郎岳(コロタイプ)..... 四

○金作谷○アカギ澤落口附近の黒部川(コロタイプ)..... 八

○新越澤落口下の奔湍..... 二四

○クロピンカ○クロピンカ下の惡場(コロタイプ)..... 三六

○口元タル澤上手の廊下○數河谷と金作谷との間の絶嶮(コロタイプ)..... 四〇

○數河谷と金作谷との間への入口の清淀○數河谷と金作谷との間の絶嶮(コロタイプ)..... 四四

○數河谷と金作谷との間の絶嶮(コロタイプ)..... 四八

○數河谷と金作谷との間の立壁○數河谷と金作谷との間の徒涉(コロタイプ)..... 五二

○數河谷と金作谷との間..... 五六

○數河谷と金作谷との間..... 六〇

○數河谷と金作谷との間○立石附近の岩壁と澗..... 七二

○數河谷と金作谷との間○有峰(コロタイプ)..... 八〇

○岩苔小谷第一の瀧○湯俣谷	九二
○岩苔小谷より薬師岳を望む○岩苔小谷より雲ノ平を望む	九六
○冷澤上の尾根より劔岳方面を望む	一〇八
○鳴澤附近よりオホタテガビン・内藏之助平・劔岳を望む○東信歩道より劔澤の大瀑布を望む	一一二
○新越二俣野營地より黒部別山を望む○御山谷小屋場より新雪に輝ける立山全峯を望む	一一六
○東信歩道より丸山を隔て、新雪に輝ける立山東面を望む	一二〇
○東信歩道よりハンノキ平下流の本流○ハンノキ平手前の岩壁と清流	一二四
○赤澤岳猫の耳の岩峯(グラビヤ)	一二八
○落葉松と立山本峯○小スバリ澤上手の廣河原より赤澤岳を望む	一三六
○源治郎尾根第一峯より第二峯及び劔岳頂上を望む○五月の早月尾根(コロタイプ)	一五二
○源治郎尾根より望める劔の八ッ峯(コロタイプ)	一五六
○大日岳より劔岳を望む○五月の劔の八ッ峯	一六〇

地 圖

○黒部川上廊下(石版)	巻尾
-------------	----

附 録

○會員名簿(會員のみに頒つ)

樹 氷

岩永信雄氏撮影

新越澤二袋野替地上の東信歩道より樹氷にて新装せられたる岩小屋澤岳に朝暾を浴せるものを撮影したるものにして樹枝は光影を放つて居る。

昭和二年十月十八日撮影

昭和二年十月十八日附録

かみ繰りなどして置く。

符せりものも最遅に作るものにして樹幹
にて薄葉せり作る樹小風斬り器にて樹幹を
薄葉斬二葉程を削り土の東部を削りしり樹米

岸木計数尺葉邊

樹米



黒部源流地の一

冠 松 次 郎

今夏（昭和四年八月）双六谷を中心としてその山溪を探勝して、双六池から鷲羽乗越の蓮華小屋に辿りついて、そこで落ち會ふ管の渡邊漸君を待つてゐたが會はず、丁度一日の餘暇が出来たので、黒部の源流をアカギ澤路口まで降り、歸途には、祖父谷を雲の平に出て、祖父岳に上り、鷲羽岳の南側から出る源流に降り、蓮華小屋に歸つた。これはそのときの日記で、双六谷紀行の中の抄録である。

今日も又曇り加減である。朝方暫くの間東方の空が樺色に光つて、小屋の前の偃松の丘の上から大槍の頭と、大天井とが高く聳えてゐたが、やがて霧雲は綾の如く繞つて、黒部谷の方から騰つて來た。そして山雨はばら／＼と小屋の板屋根を叩いて行つた。何となく暗い、そして寒い氣持である。

昨日双六池で一所になつた松本驛の某君は、夜の明けるを待ちかねて、小屋を後に鷲羽の山稜をボツ／＼と登つて行つた。丁度一時間ばかりたつて、その姿が頂上の岩の間にかくれる時分、濃霧の幕は山上を閉して、雨にひとしきり強風を伴つて吹き荒れて來た。

三四人の泊り客が出發した後、暫く天氣模様を見てゐたが、大分穩かになつたので、午前八時、寫眞器と辨當、釣竿とを携へ、人夫をつれて黒部谷の方へ降つて行つた。

細徑を、岩魚釣の通ふ路を小谷について下つて行くと、やがて鷲羽岳と祖父岳との間からくる本流と合した、もうその邊は可なり大きな谷となつてゐる。

蓮華岳の方から一溪が落ち合ふ。暫く石傳ひに降つて行くと、右岸に小さな岩屋がある。小屋の主がそこまでは魚がゐないと云つてゐた處である。降るに従つて谷は漸次に整ひ周圍の山々や高原は大きくゆるやかに、ミヤマハシノキ、ミヤマナ、カマド、白樺それから白檜の森林は美しくなる。

溪側には草地や小笹原が現はれてきた。水芭蕉シ、ノハバキの一面に蔓つてゐる草地を横ぎつて行くと、白檜の疎林、鮮麗なその葉影を前景にして、黒部五郎岳が崔嵬たる雄姿を現はした。私は思はずも立止まつた。そして水芭蕉をいたはりながら草地に三脚を立て、額をけづるその山の雄姿をカメラに収めた。

辨二は糸を垂れながら、川瀬ばかりを右から右へと降つて行く。

路が谷に降ると流を縫ひ、又崖側を上つて細徑を行く中、谷筋は益々開けてくる。

私等はやがて美しい丘の起伏した原に出た。

一面の小笹原には、偃松やミヤマナ、カマドの叢園が、庭木のやうに美しく、こすんだ白檜の森は、この原をとり圍んで、幽靜なこの小天地と、圍繞の山谷とのグラデーションをきづけないやうに保護してゐるやうだ。實際、原を横ぎり小笹や山草をふみしただくのでさへ、氣がひけるやうに奇麗な高原である。

原を抜けて森の中を溪に下ると、祖父谷の流に入る。黒部の落口で僅に數十間で、落口から黒部へ出ると、間もなく一溪が同じく右手から入つてゐる。祖母谷と云ふのがそれである。

祖父谷が雲の平の東南から流れ出てゐるのに、これは西南から黒部へ瀉いでゐる。どちらも穩かな谷で、その間には小尾根が、この二つの溪の流れを分けてゐる。

降るに従つて川瀬は闊く、長大な礫は幾つにも流を分けて、その上には楊や榛の大き木が林叢を爲してゐる。

もう左上を仰ぐと、黒部乗越の高原がすんなりとした山のつるを延べて、その空線は黒部五郎岳の頂點に向つて高く走つてゐる。岨々たるその岩骨は、この附近の谷筋に唯一の岩の王座を占めてゐるのである。

堤のやうな低い尾根先がつくるあたりから、五郎澤の水は随分大きな礫の中を、本流に向つて斜に走つてくる。

五郎澤の落口まで、葦華の小屋から一時間半であつて、私等は川中の石洲に茂つてゐる楊の下に腰を下して、谷通し釣りながら降つてくる辨二を待つてゐた。

暫く休んでゐたが、中々降りて來ないので、又ゆる／＼下り始める。

五郎澤落口附近へくると、川瀬は又非常に廣闊となり、一二丁下ると川中に花野がつゞいてゐる。

もう季節が遅れてゐるので、丈は大分のびてゐるが、ヲミナヘン、トラノヲ、山トリカブト、カラマツサウ、シンノハバキなどの花が一杯に咲き亂れてゐる。

今はないが、この花野の中に魚釣小屋がかけられてあつて、それを出水平の小屋と云つてゐた。この附近一帯の川瀬に沿つた平地は、大雨の時には四方の山溪から水が集つて、闊い瀬になつてしまふので出水平と云ふ名をつけたい。

五郎澤の方へ入つても、闊い高原はつゞいて、白檜はその隈を美しく集團して、草地の中に魚釣の小屋のあつた

○黒部源流地の一日記

のを私は覚えてゐる。

四

兎に角、この邊からヤクシ澤の都合に到る間程、暢氣な溪趣を以てゐる處は、黒部流域にも多くはない。五郎澤落口の高原と黒部乗越の平、祖父谷落口の廣場と雲の平、薬師澤落口近くのカベケ原と太郎兵衛平の高原など、皆山上と溪底とに相應して、黒部源流地を優美な鮮麗な仙境とせずにはおかない。

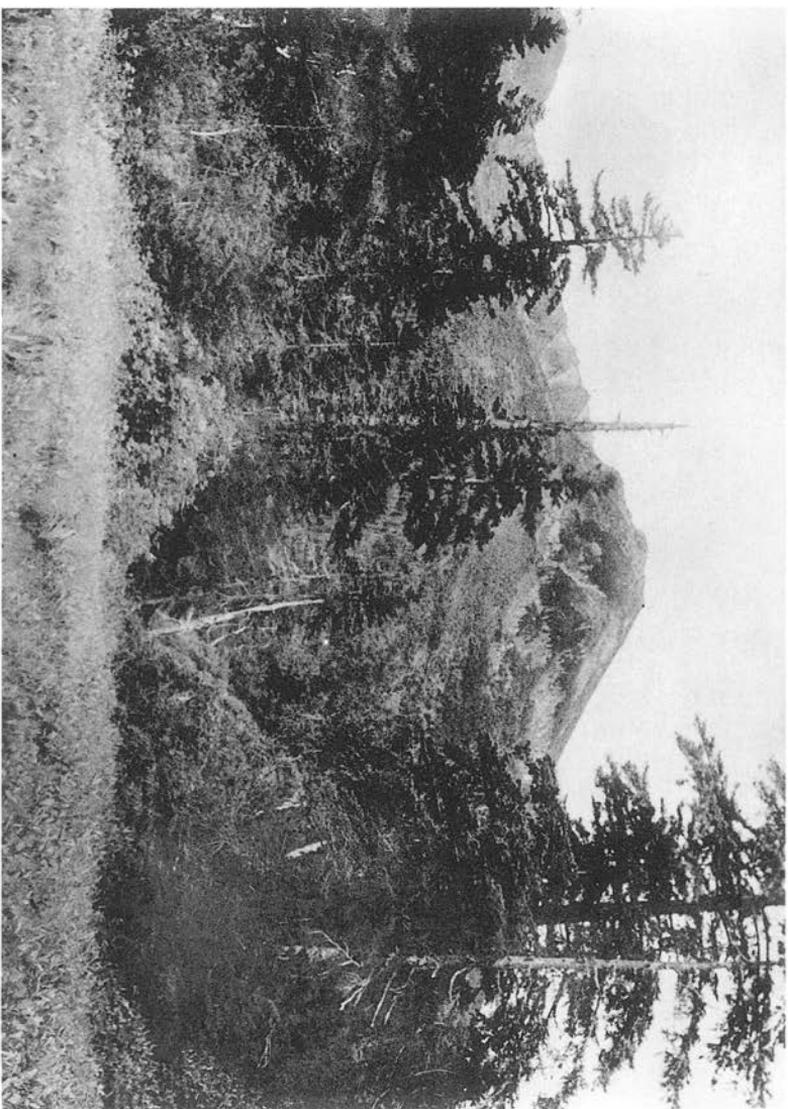
これが奥廊下や中廊下の嶮を形造つてゐる黒部川、更に雄大な下廊下の絶嶮を、豪快壯麗なその峽間を奔放する深流の水上を爲してゐるかと思ふと、實際不思議な位である。

それだけ我が黒部川は變化が豊であるのだ。それであるから單に黒部峽谷と稱して満足してゐる人達は、僅にこの雄溪の片影を彷彿したのに過ぎないのであると云へる。

私はこの幾日かの間を、深遠幽邃なる双六谷の溪川に過した、そして今、なじみ深い黒部川の源流地の開豁優大な景趣に接したとき、矢張り黒部はよいなあと思つた。何だかこの谷へ降つてからと云ふものは、私は自分の故郷へでも歸つて、打くつろいでゐるやうな感がしてならないのである。

それにこの谷筋の傾斜が又素的である。

闊い流域、大きな川瀬、延々とした傾斜をもつてゐる川原を下つて行く私等の身體は、身體の調子は、氣分は、圍繞の自然にびつたりと融合して、面白く忻舞して行く水の流れに誘惑されて、私は知らず知らずに川下へと降らない譯には行かない。



祖父谷落口附近より見たる黒部五郎岳

冠松次郎氏撮影

四周の優大な山岳や高原を觀賞しながら、森林や溪流の美しさに恍惚として、下流に引き込まれて行くその私の氣持を、極端に緊張せしむるものは、奥廊下入口の赭黒色の岩壁の門口である。もうそこからは、今迄のやうに暢氣な譯には行かないので、私等は我に歸る、そして禪をしめなほさなければならぬのである。

然しこの附近、ヤクシ澤の落口から下流、奥廊下の入口附近の溪觀も、今日ではいたく荒されてしまつたやうである。

廊下の入口にはシキが出来て、その岩壁の上を東信歩道はつけられてある。そこにも幾つかのシキは穿たれ、ワレ谷の奥には小屋が見えてゐる。上流の岸邊や森林の間に飯場だの倉庫だのが幾棟か建られ、役にも立たなかつた選鑛植などが、この始まると間もなく廢坑になつた、鑛山の見苦しい記念を所々に残してゐる。

お蔭でヤクシ澤から眞川へ出る道はよくなつたやうなものゝ、あの美しいヤクシ澤の落口、その右岸の丘の上に繁茂してゐた白檜の大木が伐り仆され、蓬萊の島のやうな雅趣のあつた、岩の丘をだいなしにしてしまつた。

思はず話が岐路に入つてしまつたが、元へ戻つて、出水平の廣い川瀬を下つて行くと、谷の上一杯に太郎兵衛平の毛氈を敷つめたやうな高原が悠々と擴がつてゐる。

黒部乗越のスロープは既にかくれ、黒部五郎岳の岩稜は左側面に森林の上から見えるやうになつた。一しきり低い壁が兩岸から現はれ、美しく光つてゐるトロは右曲して森林の影に隠れてしまふ。

崖側を上り、だらだらに降つて草地へ出ると、對岸から小瀧の連続となつてアカギ澤が落ち込んでゐる。落口の

○黒部源流の地一日 冠

六

森林と壁の美しさ、そこで深淀を爲してかけるふのやうなうねりを以て蕩漾してゐる黒部の水は、瑠璃のやうな光澤を流して澄みきつてゐる岩魚が見える。水に沈んでゐる美しい轉石の間を二匹三匹と水を切つて遊び廻つてゐる。アカギ澤の落口から一町程下手で、黒部本流は二間程の瀧となつて斷落してゐる。黒部源流の魚止の瀧、そこから上へは岩魚は登れないので、川を溯らんと集まつてくるあまたの魚は、その瀧淵の處へ群れ迫つて美事であると云ふ。

もうそこからヤクシ澤の合流迄は、僅かの距離ではあるが、私等は歸りの遅くなるのを考へて、アカギ澤の落口から又上流へと引返した。そして五郎澤の都合の磧で焚火をして茶を煮、釣り上げた岩魚を鹽焼にして中食を認めた。驟雨模様天候は、谷上に雲が流れてくると、時雨のやうな雨を落しては又晴れ間から薄日が射し込んで来る。谷風は涼しく、楊の森林を通し磧や川面を照す日の光はもう秋らしい感をそよるのであつた。

歸途は私等は、祖父谷を溯つて雲の平に出ることにした。

午後一時に五郎澤の都合を後にして、本流を暫く溯り、左にきれて森林の間を祖父谷の流れに入り、少し上つて下流を顧ると、黒部五郎岳は溪谷を壓して超然として延び上つてゐる。その胸のあたりから一筋の飛瀑は、幾段もに曲折して、深谷を目がけて落下してゐる。これこそ二千尺以上の高さはあるであらうと思つた。

黒部の水が非常に小さくなつた今頃でも、あの位の水があるのでは、この瀑布は或は年中水が枯れずに常在してゐるのかもしれない。兎に角素晴しく高いものだ。

祖父谷の落口は高原になつてゐて美しいが、谷筋は左程の景趣をもつてゐない、水は奔流と淵の連続になつてゐる

るが、水量は五郎澤よりも遙に少ない。

辨二は又釣竿を出した。石を飛びながら淵に魚を漁つて行く。

祖父谷には魚釣が殆ど入らない爲に、岩魚は随分ある。

黒部では半日がよりで十數匹釣つたのが、こゝでは一時間足らずで三十匹餘もとつた。瀧津瀬の下の小さな淵に糸を投げると、一匹位は必ずかゝる。その魚を枝に差すのでさへ間に合はないやうだ。淵が小さく浅いので、魚の游いでるのも、釣にかゝるのもよく見える。

谷を八分目程登つた處に一寸した瀧がある。それが魚止になつてそれから上に魚は見られなくなる。

谷筋が右へ右へと曲り、水がだんだん小さくなると、美しい偃松の間をせうらく小溪になる。小谷は石溪となりやがて草地にかくれて、私等は雲の平の一部へ出た。

偃松や草地に彩られた大まかなスロープの上に、ゴツゴツした岩頭が異様に神経をそよる。小鷲だらうと思つてゐると、素晴らしい根張を見せて黒岳の全容が現はれた。それと向ひ合ひに黒部谷を隔てた薬師の大きな塊が悠然として延び横がつてゐる。

薄曇りの空の下に越中澤岳、木挽山、五色原が霧の波に煽られてゐる、浄土龍王の瘤のやうな凸起の右から、劍も立山も陰鬱な顔を差し出してゐる。

霧が深い爲に、午後三時だと云ふのに四邊は何となく蒼茫としてゐる。

やがて薬師岳の上に雲の幕が西方常願寺の谷から引き廻された。それが靜かに動いてゐる中に、黒岳の頭にも何

○黒部源流地の一日記

八

時の間にか煙のやうな霧がからんで、そこも亦頂點から胸へかけて厚い霧の幕に閉されてしまつた。

三脚を立て、暫く休んでゐたが、容易に晴れさうもないので、東方に向つて祖父岳の登りにかゝつた。草地やガレを縫つて約三十分でその頂上についたが、同じやうに遠望は全くきかない。

大きな雲の平の斜原の上に、丁度供へ餅でも重ねたやうに、頭の平な丸い祖父岳の頂上は、一町四方程の廣さをもつて、火山礫がローラーで押し均されたやうに水平になつて、丸い盆を伏せておいたやうな形をしてゐる。

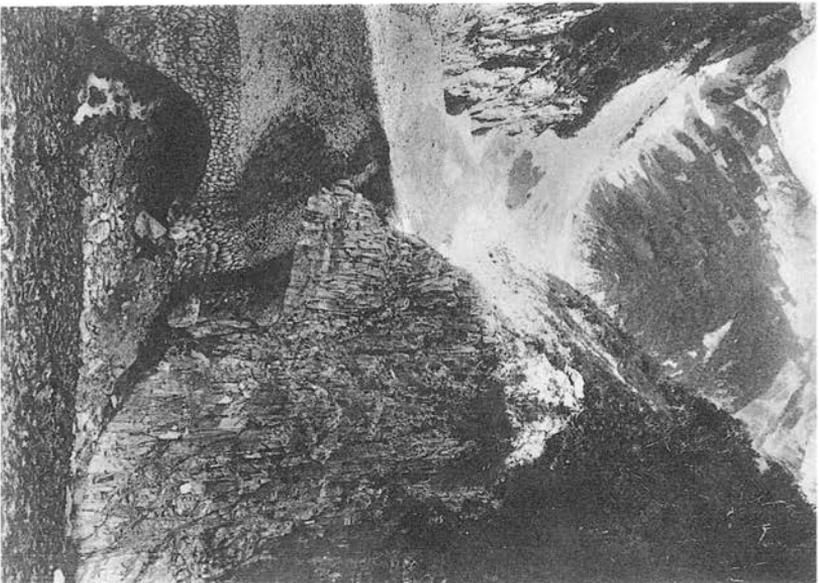
この山は低けれども特立してゐる爲、周囲の高山の眺めは實によい。それに黒部の源流地、本流の水上や、黒岳の西の側面、オクノタル澤の源頭の高原のやうな緩斜地などを見るのにもよい。もう季節が後れてゐる爲に、黒岳の池は涸渇して草地の間に丸くはげて見えた。

流水は見えないが黒部の谷筋、その兩岸の山勢、支流などの模様もよく指摘することが出来る。中廊下への曲り目から上流の左岸の崩れ、金作谷の壁やガレ、立石の上手に下りてゐる屏風のやうな瘦尾根など、幾度かこの谷底をさまよつた私等には、かうした山上から見るのでさへ随分興味が深い。

霧がずんずん濃厚になつて來たので、私等は祖父岳の頂上を辭して、東南の斜面を黒部の本流に向つて、崩れ易い噴出岩と砂礫の上を降つて行つた。

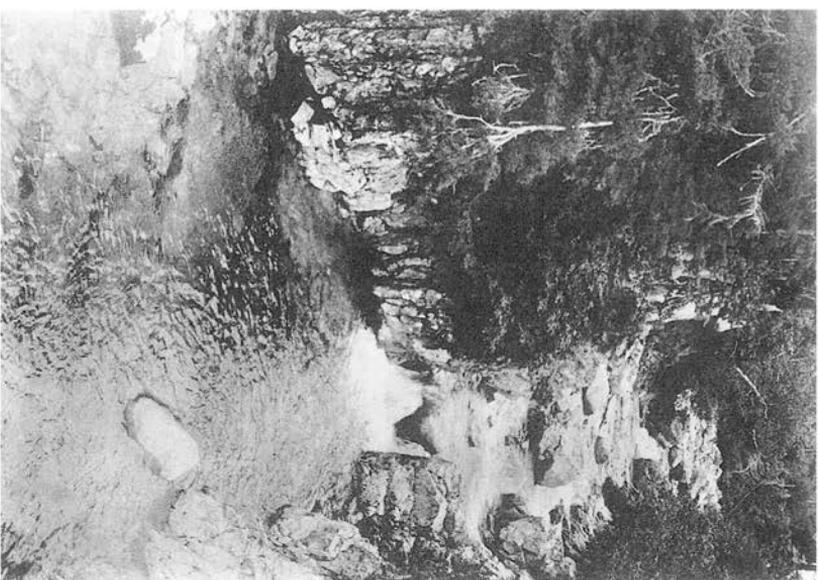
やがて草地に出たが、傾斜が急激の爲、ちるので小谷に下ると、緒く焼けたよれた火山岩の巨岩と崩土によつてなつてゐる谷は形をなしてゐない程不安定で、私等は頗る歩き悪い處を下つたのである。

漸く緩傾斜の草地に下ると、そこには水が縦横に流れ、硫黄の臭氣は鼻をついて、草は青苔の如く、出湯のある



金 作 谷

別宮貞俊氏撮影



アカギ澤落口附近の黒部川

冠 松次郎氏撮影

附近のものに似て、處々黒くすんでゐる。

残雪の上を横ぎり、谷筋を本流に下り、鶯羽の兩側を赤岳から蓮華小屋に通ずる細徑に出て、乗越の小屋へ歸つたのは、午後五時半であつた。

小屋の中を覗いて見ると、渡邊君はまだ來てゐない。今日は泊り客は一人も見えないので、小屋はガランとして奇麗に片附いてゐる。

寒い、霧の深い、黄昏るゝ山上の小屋に、爐をとり圍んで私等は暖をとつてゐた。

もう今時分迄來なくつては、と小屋の主人が云ふので、あきらめてゐると、午後六時半になつて、戸口に荷を負つた人夫が近づいて來た。それは蒲田の者で、その後から渡邊君も、草地を小屋の方へ降つて來るのが見えた。まあよかつたと思つた。

昨日穂高の小屋からシラダシの谷を蒲田に降り、今朝蒲田温泉を發つて、左俣を大ノマの谷について双六池に出てこゝまでこられたと云ふことを聞いて、その強行であつたのに驚いた。流石に顔色憔悴の模様で、人夫も疲勞の極に達してゐたやうである。

その夜は私等の仲間だけで、廣い座敷を占領して、ゆつくりと四肢を延ばした。

翌日は又霧が深く、午後から豪雨は山溪を埋めて、夜に入つてもなか／＼歇まなかつた。

私等はたうとうオクノタル澤を降ることを斷念して、そして雨間を見て霧中を蓮華岳を越えて、黒部乗越の小屋について旅装を解いた。雨はその翌日も亦降りつゞいた。

黒部川

(新越澤落口より薬師澤落口まで)

渡邊 漸

一 立山温泉まで

久し振りの谷旅、そして黒部の未知境へ入らうといふので徒らに目が冴えるばかりで昨夜はよく眠れずに、とう／＼糸魚川の手前で起きて仕舞つた。夜明け前の日本海はどんよりとした鈍い鉛色を其の面に溶かして、山へと憧れを以て入り行く旅人の心をいつもの様に深く搏つのであつた。左手の窓際からは火打、焼山の突兀たる連峯が朝まだき空に眞黒にそより立つてその上には淺黄色の薄明るい空が掛つて居るのが望まれた。こうしてもう心もそよ／＼に、移り行く山々の姿に見入つて居る中に、冠さんも目を覺まされて自分と同じ様に左手の連嶺を頻りと眺めて居られる。二人が大聲に話し合ふのでよく眠つて居られた別宮さんもその中に起き上られた。昨日一緒に立つ筈だつた岩永さんが急用があつて一日後れ、上野の驛で「新越で待つてますよ」と言ひ残して三人は出掛けて來ただが、あの元氣な聲が此の列車の中で聞けないのは何となく物足らなかつた。白馬の續きであらう、その連峯の東面には八月も半ば過ぎた今日、尙相當の残雪を認めた。

空は晴れ五つては居るが、朝焼けが馬鹿に強いので、天候に對する懸念も無いでは無かつた。先刻までその東面を見せて居た白馬連峯がもう裏返へしになつて、その西面を見せるに至つたが、白馬の頂上と覺しき邊りは雲が纏

ひ付いて次第に濃くなつて来る様な氣がした。然かもそれも東の間、やがて五龍、鹿島槍、と後立山の雄峯が黒部の谷の奥深く現れ、續いて大黒、唐松、奥不歸、鎗、と展開されて來た。劍の頂きが見えたと思ふ中に、列車は黒部川に架した鐵橋へと差掛つた。三人は目尻を吊上げて、その水に見入つて居る。「少い。」「今年は少い。」「これなら大丈夫だ！」傍で聞いて居たら随分滑稽だらう。大の男が三人、窓の外へ首を突き出して、少いとか何とか譯の分らぬ事を大聲で夢中になつて吐鳴つて居る圖は珍妙なものだ。

滑川から岩峯寺へのあのゆっくりした汽車では、近在の魚屋連と同車して、傍で聞いてもまるで分らぬ越中言葉に、「何の事やら分りませんちや」と此方もそろ／＼本性を現はし初める。

もう登山者はそんなに無いのに、千垣への電車は仲々混んで居た。九時七分に千垣に着いたが、冠さんや別宮さんは出迎への人夫の誰彼と舊交を暖めて居るに反して、自分は知らぬ者ばかりなので、仕方なく物も言はずに一同に従つて茶店へと行く。一休みして居る中に、長次郎も遣つた來た。まだ大きな天幕や食料品が到着して居ないので米谷と野口と、もう一人に残つて貰つて、明日、岩永さんと一緒に來て貰ふ事にして、吾々三人と他の人夫七人は、赤澤對岸の泊り場で待ち合はせるに話が決まつて、ガソリン機關車に引かれたトロで常願寺川の左岸を藤橋へと向ふ。千垣を出發したのは十時十五分で一時間で藤橋發電所の工事をして居る所まで來た。鮮人の土工や何かと澤山に入り込んで、左岸の山際を削り取つて、やがてあの眞黒ろな鐵管が置かれるのだ。一寸した籠渡しで右岸へと移り、立山温泉道に出る。此處にも會つては無かつたトロのレールが敷かれて、破壊への第一歩をなして居るのだつた。暫らく行つて小澤のある處で晝食を採る事にした。空は段々に曇つて來て、やがては一雨來さうになつた。

一時少し前、晝食を終へて出發したが自分は、汽車の中からその儘、ツリコニーを打つた靴を穿つて居たので、鐵で出來た枕木と觸れ合つて、甚だ歩き辛い。枕木が鐵でなしに、本當の木であつた部分もあるが、これでも大差はない。一時間近く歩いて、道傍で少憩して居るとバラ／＼と降り出して來た。スイッチバックを繰返へしては、此のトコロ道は河身に沿つて溯つて行く。雨はまだ止まないが、大した事は無い。二時に「妙壽トンネル」の入口に着く、此處には「藤橋一里十八丁、立山温泉二里十八丁」とした札があつた。此のトンネルから三十分ばかりで「鬼ヶ城」のトンネルの東口に達した。十九日の大雨で、がれが崩れ、トンネルは泥土で埋つて仕舞つたので、頻りとその泥を運び出して居る。火を灯して、トンネルの中へ入ると、邊りは一體にぬかるみで、時々は足首の邊りまでずぶりと入つたりする。アセチレンランプを携へた人夫達が泥を満載したトロを押して來るのに出合ひつゝ、奥へ／＼と行くと、まだ完全に掘り出して居ないので、トンネルの底が次第に高くなつて、頭を傾け、腰を屈し、やがてはそれでもまだ足らないで、膝を地につけて匍はんばかりになる。幸に此の難行の部分は短かくて、直きに西口に出る。雨は何時の間にか止んで仕舞つた。これからレールが敷いて無いので歩きいゝが、やがて敷かれる準備は整つて居る。眞川の落口の對岸附近までは道がすっかり出來て居る。對岸、左岸には、水面から一〇〇—一五〇米隔つた邊りに、略々水平に、山の鼻を克明に一つ／＼廻つて行く立派な道が通じて、やがて眞川の左岸に沿うて、數河の取入れ口まで達して居る。此の道には、矢張り、ガソリン機關車が通つて居るとか言ふ話である。眞川出合の對岸で三十分ばかり休んで居る頃には稍々天氣がよくなつて、晴れると見えたが、これから水谷平へと登つて行く頃には又もや曇つて來た。水谷平の可成りの登りには、初日で肩が慣れず、昨夜は睡眠不足だったので、相當に苦しかった。

此の邊では人夫が、ト口道を拵へるのに忙がしく働いて居た。水谷の瀧を左に見て、水谷平に出ると、道の兩側には可成澤山の小屋がある。これからまた登り氣味に山腹を絡んで行くが、もう可成疲れて來たので、時々休んだりして、仲々抄が行かない。やがて雲が次第に濃くなつて、遂には霧の中に入つて仕舞ふと、次第に道は降り氣味となつて、吊橋を渡り、温泉の建物が次ぎ／＼に霧の中から浮び出て來る。人夫達は下に、自分達三人は階上の一室に落付いた。三年前の三月、まだ冬の領域に深く閉された此の温泉を訪れた時の事を憶ひ起して見る。雪に埋れ盡して、高みにある藥師堂の上半だけが辛うじて雪の上に出て居たあの時に、自分達が三日間吹雪に閉込められた部屋はどの邊か一寸見當が付き兼ねたが温泉事務所の右手の部屋がそれである事に氣付いた。そしてその玄關に相當した土間で焚火したので、煙にさん／＼悩まされ、半日掛りで風抜きを掘り下げた事は今でも忘れられない。丁度今、自分達が泊つて居る此の二階の一室の上は僅かに棟木を雪面に現すに過ぎなかつた。あの時此處から初まつた山旅は自分達に大きな收穫を興へて呉れたので、時節こそ違へ同じく此の温泉から今將に初まらうとして居る、此の谷旅も必つと類ない喜びを、充されたる快さから味はふ事が出来るに違ひないと獨りで心の中に定めてその思ひ出深い棟木の下で一夜を明かす事になつた。初日の疲労と夜行での睡眠不足とが一緒になつて、風呂から上つて夕食を済ますと直きに床に就いて仕舞つた。

昭和三年八月二十二日。千垣着(前九、〇七)(晴)——千垣發(一〇、一五)(晴)——藤橋着(一一、一五)(曇)——晝食後(一二、一五)——(一二、一五)(曇)——妙壽トンネル(二二、〇〇)(小雨)——鬼ヶ城トンネル(二二、三五)(曇)——真川合流點對岸(三三、一一)(〇)——(三三、四〇)(晴)——水谷平(四二、二〇)(曇)——立山温泉着(五、四〇)(霧)

○黒部川 渡邊

二 御山谷落口まで

起きて見ると一面の霧、障子を押開いてその滑かな肌觸りを味はつて居る中に何時の間にかすっかり暗れ渡つて碧空を頭上に仰ぎ見たが、暫らくすると又何も見えない様になつた。荷物の整理をして居る中に、不圖、東京からわざわざ提げて來た醤油の瓶の見當らない事に氣付いた。そしてそれと同時に目慣れない大きな油紙包みに目が留まつた。よくよく人夫を問ひ訊して見ると、千垣でトロに間に合はぬと言ふので大急ぎで仕度をして出て來たのが間違ひの因で、山から降つてあの茶店で一休みでもして居たらしい登山客の荷物も一緒に擔ぎ出して、御苦勞にも重い思ひをして此處まで持ち上げたので、その代りに貴重なる醤油を忘れたと言ふ始末だつた。然かし此處で氣付いたのが幸で、若し黒部の廊下の奥深く入つた頃に氣付いたら、随分、持て餘ます事だらうと、一場の笑ひ話となり、千垣に返送する事になつたが、醤油は岩永さんが氣付いて持つて來て呉れればと果かない望みを掛けるに過ぎなかつた。

八時十分に出發する頃にはまだ薄い霧が掛つて居たが、暫らくすると、また青空の世界となつて、顧ると、鍛崎山が富山平原への障壁をなして、大きな肩を張つて居る。然かし、今は残雪も無いので稍々見劣りするのは免れ得なかつた。淨土に至る「立山登山道」と言ふ標木を左に見て、だら／＼登りに進んで行くと、對岸、左岸から新湯が濛々たる煙を上げ邊になつてぼとぼとして居るが目をひく。徒渉して左岸に移つて、河岸傳ひに行く中に、所々に残雪が現れ初めた。前方を仰ぐと龍王と獅子との間の窓が弦状をなして空を眼つて居る。日射が強くなつたので、

相當に暑い。天狗平の上の方にはアルトキウムラスが漂つて居るので、午後にもなつて天氣が悪くなるのでは無からうか。右岸に取付いて、尾根先に取付いて電光形に登り初めると、空は曇つて來たので暑さの責苦を免れる事が出來た。今日は例のアサヒ足袋に代へたので樂に歩ける。それに三人共、非常にコンディションがよくて、一時間間の間に四百米登つて仕舞つた。もう鉢崎山も眼下になり、峠近くになつた事を思はせる。正面には五色ヶ原の斷側が赤ちやけて、横に幾條となく、平行して層が走つて居る。カナデアアンロックキーの山々の側面は此んなものでもあらうかと言ふので話はとう／＼その方面に轉じて、ぶら／＼歩いて行くと、大きな鐵の齒車を背負つた、ポツカが二人道傍で一本立てて居るのに出會ふ。此れはボーリングの機械の部分品で、御山谷の小屋まで行くのだと言ふ。試みに目方を聞けば二十四貫との事。幾ら高い賃金を呉れても、此れではとても吾々には不可能だ。一步でもつまづいたり、滑つたりとすると忽ちその重荷の下敷きとなるのは必定だが、慣れて居るとは言へ普通人の行程を平氣で行くのだから、全く驚く。然かし、黒部川の人爲化の手助けをして居るのだから、餘り感心ばかりもして居られ無い。

ザラ峠に着いたのは、十一時過ぎで雲は山々の頂きまでは降つて來て居ないが、西北の風が相當に吹き初め、うすら寒い天氣だ。季節が早ければ、此處等は、ヒイルムバックの引札や、キャラメルのみ紙や、空かんやらが邊り一面散亂して居るに違ひ無いのに、今は、人聲も聞えず、しんと靜まり返つて居る。烏帽子や南澤の方はよく見えて居るが、龍王、淨土の方には間も無く霧が掛り初めた。少し降りて晝食を探る事にして中ノ谷に降り初めると、此の方には、まだ雪溪が連続したまゝで可成下まで展びて居た。雪溪の端から水の得られる處を選んでその近くの

○黒部川 渡邊

一六

路傍に腰を下ろす。人夫達も一緒になつて晝食を終ると、少し晴れて來たので、仰のけになつて帽子を顔の上に當て、暫しの午睡を食ふ。

一時五分に其處を出て、稍々下手で右岸に移つて刈安峠への道を行く。峠の少し手前、イタヤ峠へと通じて居る荒廢した切開きを左手に見る。刈安峠に着いて前方を見ると赤牛があの特有な地肌を見せて、その中央に、口元のタル澤が大きく割れ込んで居るのがはつきり分る。こうして見ると地圖で見たよりすつと立派な澤だ。左手に續いて東澤乗越、烏帽子連嶺と、又しても思ひは春の東澤の奥深く馳せる。顧ると、雄山、五ノ越邊りには雲行きが繁くて、その途切れ／＼にその姿を見る。五色から直接、尾根傳ひに平へと通じて居る切開きは新しい故もあらう、はつきりとして居る。

峠から平へと降つて行くと、段々森が美しくなつて、黒部の流域に入つたのだと言ふ感じが深くなる。温谷の谷間に生ひ茂つた美しい榎の林を抜けて行くと、もう黒部の水音も近い。路傍の濕つた所には小さい黒い蛙が無數に飛びまはつて居るので、黒部は蝮が多いと言ふ話だつたが、これは蛙が多いに改むべきだらう等と語り合ひつゝ、「平」に着いた。直ちに日電の小屋を訪れ、下流の状況を聞く。今年は平から下は、御山谷とハンノ木平に小屋を建てるだけで、道は造らぬとの事。下流の方は劍澤落口から一氣に千二百尺登つて、それから左岸に水平に道をつけるのだが、工事は仲々捗らず、黒部別山澤の下手までも達して居らぬだらうとの事であつたので、自分達が通つて居る眞上でハツバでもやられたらと言ふ懸念は、兎に角下に降つて見なくてははつきりしないので、行ける處まで降る事にして、食料の補給を得て出發したのが四時だつた。小屋に居る間に一雨さつと來たがそれもすつかり上つ

たがからりと晴れるには至らなかつた。久し振りで黒部のその懐しい水を見るので一同大喜び、先刻の疲れも忘れて、中ノ谷の釣橋を越え、右岸に移り、大きな礫を抱いて悠々と流れ行く、此の穏かな水の動きと共に、下流へくくと進むのだつた。元ザクボ澤の下手で大きく突き出した山鼻を廻はつて行くと、空は次第に曇つて来て、一雨降られる事を覺悟せねばならぬ様になる。それでもまだ仲々落ちて來ないで、茂みを縫つて居た道が小スバリ澤を横切る頃になつて、今まで眞白ろだつた石の面が點々と黒く雨滴に描き出されるのを見た。此の澤の出合の押出しは實に大きくて、流れの半ばまで擴がつて居る。此の様に激しく土砂が押出される故であらう、水はその下を潜つて伏水となるらしく、表面に露れた水量は案外な程少い。

御山谷の落口も近付いて眼前に最早、吊橋が見えるので歩を早めて行く。それでも吊橋に掛ると眼下にあのあくまで透徹した黒部の水が、その面には折柄の雨に小さい波紋を幾百となく搖がせつゝ滑り行くのを見て、思はず見とれるのであつた。渡り終つて、あの幽邃な森の中から走り出て來る類ない優雅さを持つた御山谷を豫期した自分達は先づその幻影を無残にも破られ終つた。谷の落口の右岸には白木の生々しい二階建の事務所が建てられつゝある。仕事の終りを急ぐのであらう、あはたゞしい鉤の響き、鋸の音が岩の底を漕ぐる水音に代はり、小屋の周にははまだその創癒新たなる幾多の幹が倒れ合つて居る。流れを横切つて暫らく行くと、本流の左岸に、ボーリングの小屋がある。小屋のつい下手には、ボーリングの機械も見えると云ふ具合だ。これは昨年ボーリングをやつて居た所よりはずつと上に移つたのだ。

小屋に着いたのは六時だつたが、雨は次第に強くなつて、此の假小屋は漏るのではなからうかと思ふ位にひどく

なつて来た。風呂に入つて居ると、しぶきが掛つて来るので、止むを得ず風呂桶の中から首だけを浮べて居る。もう透りはすっかり闇になつて、ざあ／＼と言ふ水音のする方を向いても黒部は姿も見せず、暗い夜を通して流れ行くばかりだ。自分達と長次郎とは小屋の人達と同じ部屋に泊めて貰つたが人夫達は少し離れた物置らしい所に入れて貰ふ。此の夏に下に降つた者があるか無いか問ふた處、大町から人夫を一人だけ連れて降つた人があるさうだが、大ヘツリの手前で行詰つて引返へし立山から劍を経て小黒部から宇奈月の方に行つたとの事、そしてその人は素敵に山に詳しい人で、あんな人は知らないと頻りに感心して居たが、冠さんがそんなに大廻りしなくてもクラノスケ谷を溯つてハシゴ谷を降つて行けばずつと早く行けるのにと一々地圖の上で説明すると、成程、あの人は詳しいと思つたが、まだそれより詳しいのだから此の人は餘程、えらいに逸ひないと極めをつけられる。長次郎が自分なら此處から宇奈月まで一日で行けると言ひ出したが、考へて見ればさう不思議も無いのであるが、小屋の人達は大いに驚いて居る。劍には二日あれば行つて來られるのだと教へて遣ると、どうもさう簡單には行ける處と思つて無い面持だ。雨は仲々強くてまだ止まない。今頃は岩永さんは立山温泉だらうと言ひながら、そろ／＼寝る用意に取掛る。

- 二十三日。立山温泉發(前八、一〇)(薄霧)——新湯對岸(九、一五)(晴)——一六七〇米(九、四五)(曇)——二〇八〇米(一〇、四五)(曇)——ザラ峠(一一、一七)——三五(曇)——葦倉(後一二、〇二)——一、〇五(曇、晴)——刈安峠(一、四五)——二、一〇(曇)——平(二、五五)——四、〇五(曇、驟雨アリ)——小スバリ澤出合(五、三〇)(小雨)——御山谷日電小屋(六、〇〇)(雨)

三 赤澤落口對岸泊場まで

昨夜のあの激しい雨が谷中の雲を拂落したのであらう、今朝は氣持好く晴れ渡つて木々の葉は朝日を受けて輝いて居る。小屋を出て御山谷落口まで戻る。谷の落口近くの河原から、谷の方を見上げると、立山の連峰が雲の途切〜に残雪ももう少くなつた其の東面を持上げて、遙かに遠い感じを抱かせる。何時の間に對岸に移つたのやら、竹次郎は雄山から見えると言ふ落口の大きな淵へと、岩角から絲を垂れて居る。再び小屋に戻り荷物を纏めて出發する。ガチャン〜と音を立て始めたボーリングの傍を逃げるが如くに去つて本流に沿うた道を急ぐ。もうその物音も大分遠ざかる頃、大スバリ澤が對岸に落込んで居るのが木の間に見える。その水量は左まで多く無いのは小スバリ澤と同じく、伏水となつて居るものであらう。道はやゝ登り加減となり、行手には大タテガビンの障壁が雲を纏つはらせて聳え立つて居るのが見え初めた。御山谷の落口附近では稍々流れが激しい本流は此處ではまた悠々たる姿に立歸つて、兩岸の檜、榊の林を洗ひつゝきら〜と小波を立てゝ音もなく滑り行く。四十分ばかりすると、路傍に小屋があり、その前面の河原には製材した跡もある。此の邊から大タテガビンは益々其の壯大さを眼前に展開させる。河岸をやゝ離れてデク〜した濕地を過ぎて行くと、御前谷のボーリング小屋跡に出る。此處には對岸東信歩道からの籠渡しがあるが、今はその籠はなくて、只、ケーブルのみが残つて居る。少し行くと、御前谷の落口だ。御山谷のあの優雅な姿に引換へ、此の谷は荒涼たる感じを抱かせる。大きな岩が重なり合つた其の間を水が勢込んで落ちて居るのは、立山東面の千古不磨の雪を溶かし來たつた故だと合點が行く。前途には右岸に赤澤岳終

端の壁がそゞり立ち、左岸の大きく突出た尾根の尖端を廻つて行くと、丸山の壁が眞直ぐに前面を壓して居る。右岸からは赤澤が注ぎ込んで、此の邊りで谷幅はぐつと廣くなる。それと同時に巨石累々として中流に堆積し、落差は漸く激しからんとする。赤澤の出合の邊りにこんもりと茂つた闊葉樹の集團は仲々立派なものである。赤澤の出合を對岸に見て暫らく降ると、左岸は急に開けて、廣い河原を爲して居る。時間は早い今日の泊り場は此處の豫定なので、荷物を降ろして露營の用意をする。まだ晝にも成らないので至つて暢氣だ。人夫達が組上げた小屋掛けの中に入つて横になつて居たが、それにも飽きて河原の石の上に腰を下ろして對岸を見遣ると東信歩道が斜めに走つて居るのが目につく。風は稍々強く、川下から吹いて來るが長次郎は「あひの風」だから大した事は無いと言ふ。晝食を済まして、寫眞機一つを携へて下流に出掛ける。丁度二時頃で、空は曇つて來たが大した事は無い。河原の砂を踏んで暫らく行くと道は登りとなり、川筋を稍々離れ、今まで水面と同じ高さに在つたのが、川は脚下に樹々を通して見える様になる。丸山の削壁は益々近く、前面を塞いだ様に聳え立つて來る。天氣が曇つて居る故か、何となく威懾されさうな感がする。やがて道が茂みの間を抜けて川筋へと降りにかゝると、俄然、眼の前に、クラノスケの大壁が現れる。川は大きく右へ右へと、此の直立した半圓形の大壁の裾を廻つて一大旋轉を試みる。流れは壁に沿うて深淵を爲し、左岸に向つて次第に淺瀬を爲す。川の中流には大きな岩塊が幾つとなく、流れに抗して其身を横へて居るが、壁が非常に高い爲に、遠くから見て居ると小石位にしか見えない。岩魚を釣りに出掛けて來て居る人夫達が岩から岩へと飛び移るのを見て、成程、岩が大きいと言ふ事が分る。道は水面から稍々離れた高みを傳ふが、河原傳ひでも平氣に行ける。やがてクラノスケ谷の落口の水が行手に迸り出て居るのが、僅かに見える。

丸山から落ちて来る小さな流れを横切つて、一度河原に降り、更に暫らくへつて行くところ、クラノスケ谷の落口だ。落口は岩がごろ／＼して居るが谷の奥を見上げると、丸山と大タテガビンに境せられた窓が弓なりに、ゆつくりと持上つて、廣闊たる感じに溢れて居る。落口から少し降つて河原に立つと、丸山の壁が實に素晴らしい。此處は丸山を眺めるのに絶好の位置で、クラノスケの大壁を廻つて、疾驅し來つた本流は此處に鳴りを鎮めて深き淵を爲し、その面に丸山の其の聳壁を寫出さんばかりに靜まりかへつて居る。空はまた晴れ出して、丸山の壁の背後が淺黄色に映え渡つて、その周縁をくつきりと浮き出させた。

もつと下流まで行つて見度かつたが、岩永さんがもう着かれた時分なので、歸路に就いた。成可く水の傍を行き度かつたのでクラノスケ谷の落口から河原に降りて、滔々として大壁にこたまして流れ去るその青い水の近くを選んで、ゆる／＼と露營地の方へと足を向けた。初めて大壁が見えたその邊りから道に合して、四時に泊場に歸つたがまだ岩永さんは見えなかつた。五時過ぎてから岩永さんと米谷、與吉の三人が着いたので早速その荷をほこして、新しい大きな天幕を張る。

豫て噂の大天幕なので、中に入つて見ると頭がつかへないと喜び、外に出て見るとは色が氣分にじっくりして居ると言つて愉快がる。そんな事をして居る中にとろ／＼日も暮れて、焚火だけが眞赤に邊りを照らす様になる。九日月が早、天上に輝き初めたが、その月の周りには小さい色のある暈が掛つて居た。然かし雨の降る様な氣配は更に無く、満天、只、星を以て埋められ久し振りて山らしい空を眺める事が出来た。

二十四日。御山谷小屋出發（前八、四〇）（晴）——御山谷落口（九、〇〇）——九二〇（晴）——再び小屋（九、四〇）——御前谷落

口(一〇、三五)(晴)——赤澤落口對岸下手泊場着(一一、一〇)(晴)。

泊場。後一、三〇。氣壓六五五耗。天候晴、風北北西、軟。氣溫一九・四度。水溫一四・七度。

泊場發(一二、〇〇)(曇)——クラノスケ谷落口(三、〇〇)(曇)——少し下手の河原(三、一五)(晴)——泊場歸着(四、〇〇)(晴)。

泊場。後四、一五。氣壓六五四耗。天候晴。風東東北、微——軟。氣溫一八・一度。水溫一四・三度。

同。後七、二〇。氣壓六五四、九耗。天候晴。風東東北。微。氣溫一六・二度。水溫一三・〇度。

四 新越泊場まで

朝起きて見ると、前面に屹立して居る赤澤岳の岩峰には雲が纏ひ付いて一層その凄みを増す。然かし寒さは可成強いで天候に對する心配は起らなかつた。露營地を出發してから昨日行つたクラノスケ谷落口下手の河原までは一氣に飛ばして仕舞ふ。此處から道は暫らくの間登りとなつて水面とは二三十米も離れて仕舞ふが、まだ此の歩道の無かつた頃、河原傳ひに岩を越え、水を涉り、未知へくと憧れて行つた、冠さんや岩永さんの憶ひを想起しつゝ、自分は暫らくその左岸に沿うて歩いて見た。川は此處では北東東を指して走り、一度、全流は極度に押狭められ、落差はそれと共に著るしく増し、奔流を作しつゝ異常なる力を以て突進んで行く。狭間が二度繰返へされると、その壓縮された全流が急に東に向つて方向を轉じ、今までのその勢は廣い深い澗の中へと分散されて、また靜かな姿となり、更に大きく左に廻轉して鳴澤小澤を合はせて北北西へと進んで行く。自分はその澗の所まで降つて、引返し、元の河原から歩道を登つて一行の後を追ふ。此の道の高みから瞰下すると、その澗が丁度、眞正面に見える。

此れから道はだら／＼と降つて水面に近づくがそれも暫らくの間で、對岸に削立した屏風の連続とも見らるべき鳴澤の壁の裾を本流が洗ふ頃には道は亦、高みを行くので、木の間を透かして白い流れを見る様になる。さうして居る中に豁然と邊りが開けて、振返へると鳴澤の壁が一望の許に收まる。此處でも壁が高いが爲に、流れが狭く見誤らるゝが、流れは依然、その幅と厚みとを失はず堂々と進んで居るのだ。大タテガビンから落ちて来る二つの小澤を合すると、流れは次第に左に廻はつて北東東を指す。道はまた水面近くに降つて来たが、前と同様、濤や奔流を交互に俯瞰しつゝ高みへと登つて行く。クラノスケ落口以來、俄かにその相貌を一變して、下廊下の核心へと急ぎ行くその黒部の水も、岩を噛み、壁に怒號して聊か疲れを覺えたものか暫し緩かになる。それと共に、大タテガビンの此の山裾もその廣がりを増して、林が平らになつて来る。榛ノ木が多くなつて、道が川岸近くまで降つて来た所が榛ノ木平だ。

見ると天幕が張られ、木が倒され、將に小屋の建築に取掛らんとする處だ。自分達は河原に出て流れを眼の前にしつゝ小憩する。天氣は段々好くなつて来て、谷の水はその持前の明るさを次第に發揮する。

此處では谷の走向は略々正北だが、一寸行くと右に曲る。此の曲り目の處で對岸から鳴澤が瀧の様になつて入つて居る。滑落ちる水が岩の上に瀧壺とも見らるべき椀狀の凹みを形造り、水はその凹みから更に溢れて、ガラ／＼した岩の破片の中に伏水となつて消失せつゝ本流に合して居るのは一寸愛嬌がある。道は下草を分けつゝ次第に登りになり、一寸した峠狀の地點に達すると、眼前には突如、下流の全容が展開される。右手には新越の壁が赤味を帯びた肌を露らばに、本流にのしかゝらんばかりに聳え立ち、その垂直に入つた割目からは新越の瀑の一部がちら

く、と白く光る。左手には左岸の悪場を隔て、その背後に、黒部別山澤左岸の屏風岩がそり立つて、本流は、益々落差を加へつゝ、新越の狭流へと身を躍らす可くあはたゞしく流れ去る。

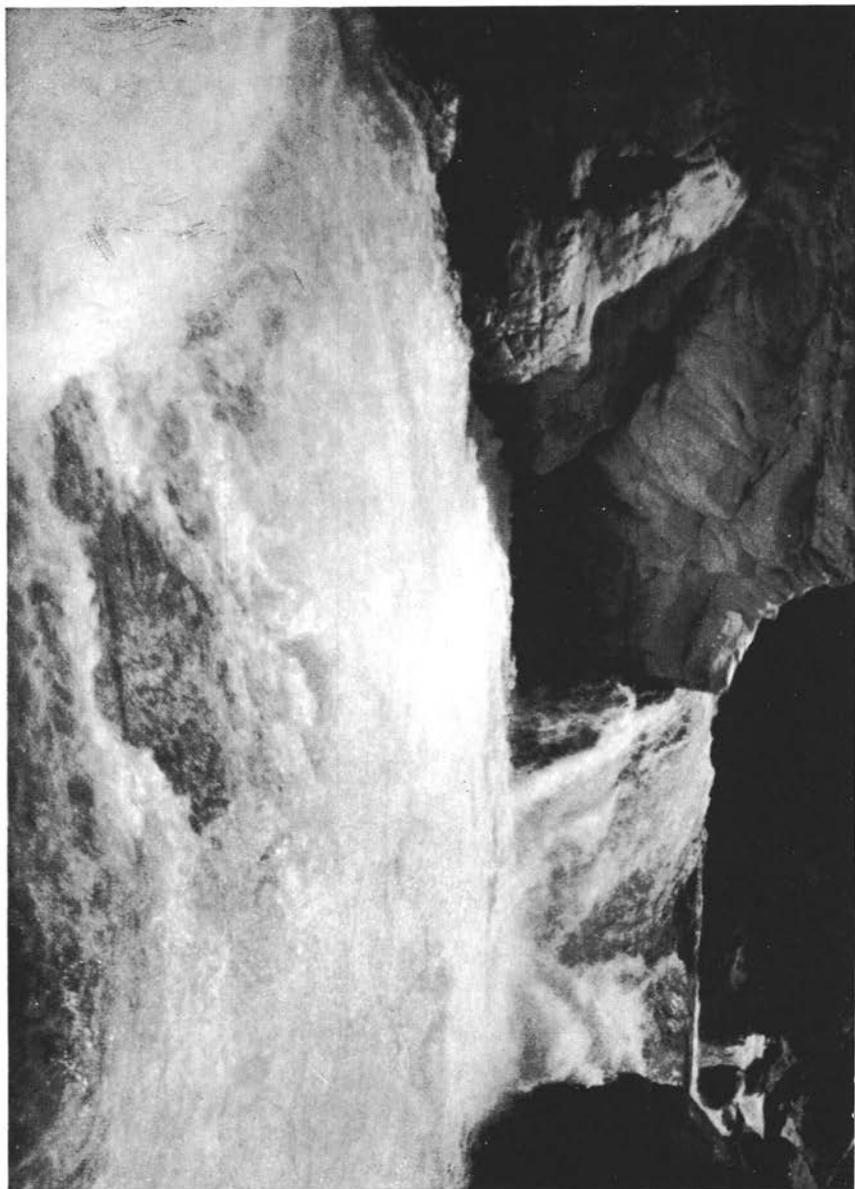
此處は必ず寫眞を撮ると定まつて居る場所だと言ふので、皆、一枚づゝ撮つたが、後でそれを見ると肉眼で感じた程の壯大な気分は一向に出て居ない。矢張、寫眞に撮るのには餘りばつとしないで纏つた處の方がいゝらしい。此處から見た眺めは寫眞には到底收りきれないだけに眼には何時までもくつきりとその印象が残つて居る。

左岸から合する小澤の雪溪の上を斜めに降りて河岸近くを行く。前方の景色にばかり氣を取られて自分の眼前を流れて居る水の様子は、さつぱり記憶に残つて居ない。右岸から小澤が入り、左岸から更に小澤が入り、大體の走向は北西に向つて居た事位しか覚えて居ない。

此の左からの小澤を越すと、愈々左岸は針金傳ひのへツリになる。右岸の方には可成河原を残し樹木も水際近くまで生茂つて居るのに、左岸はやゝ赤味を帯びた岩続きで、その下は相當の深みを爲して居る。

天氣は全く晴れ渡つて、日の光が水の底まで浸み込むかと思はれる位なので、針金につかまりつゝ、思はず足を止めて、眼下の青い、そして其の上に雪が吹散られた様な白い波紋の輝きにうっとりと思入る。川の只中に置かれた大石の水際は濡れて、つる／＼と光つて居る。其の水際からすつと上の方は乾いたり濡れたり、濡れたり乾いたりして居るし、素足で乗つたら吃度つるりと滑るだらうと思はれる其の肌目の細かな、圓味を帯びたその頂きは目も痛いばかりに眞白く照返へして居る。へツリを終ると、可成廣い岩磐で、釣のすきな人夫達は夢中になつて糸を垂れて居る。水は一面に泡立つて、其の間に、ひよこ／＼と岩の塊りが浮んで居る様な感じだ。

新越澤落口下の奔流



冠松次郎氏撮影

これから雜草を踏分けて向つて左手に登り氣味に行く。草が一面に生茂つてその一種特有な香りが高く鼻を打つ。その中を稍々暫らく搔分けて、草から逃れ出ると、右手に岩の割目がある。足掛りの悪いその割れ目の尖端に出ると、眞下は新越の狭流の上手の釜で、正面、右手には新越の瀑が一字に落込んで居る。少し眼を上に移すと、新越の瀑の上段のものが目に映する。新越澤程の大きな澤が此んなに身を狭めてでなくては入れて貰へ無い程、黒部は儼然と身を持して、その兩岸の守りを高く堅く鋭く築いて居るのだ。同じ事は廊下に落込む他の澤に就ても同様

に言へるのだが、自分は今、其の一例を如實に眼前に見る事を得た。

凹みを後に戻つて數歩進めば、新越の泊場だ。泊場の直前には大きな花崗岩のステージが新越の大壁の許へと、一面に身を乗り出して、木流を此處に極度に阻んで、例の新越の狭流を爲して居る。自分は狭流そのものは豫て想像した事として左まで驚かなかつたが、此の狭流に依つて連らねられた二つの大きな釜の美しさに打たれ、その釜の縁を形造くる此の大きな白い岩板の布置の巧妙さに、自然に向つて讚嘆の言葉を發せず居られなかつた。天氣が素晴らしく上々であり、時は光に最も恵まれた眞夏の正午である事が、益々其の美しさに光彩を加へた事であるが、自分は期待した狭流以外に更に更によきものを目の邊り見る事を得て完全に満足した。廊下の一核心とも言はるゝ此の新越附近の景觀に就て、自分が敢へて新たに記す必要もあるまい、また自分にはそれを形容して他人に自分の思ひを知らしむる事は不可能だ。行きて見よ！ 自分は只、こう言ひ度い。達するにはいと易い地だ。「平」より一日に足らざる行程、然かも途中には何等の困難なく、難すべきは只電力の自然破壊の行爲のみ。此れも僅かに二三個所で、一寸其處だけ日をつむつたら濟む事だ。途中の景觀を全然見ぬ積なら、「平」よりの日歸り亦不可能に非らずだ。

どうして人がこんなに来ないのか不思議な位だ。

溪の眺めにはのみ氣を取られないで、背後を顧ると黒部別山の壁が恐ろしく高い。首筋が痛むまで仰ぎ見ないとその空と接する境が分らない位だ。冬には雪は此んな急峻な壁には止まるのを許されず、降るなり次から次へ雪崩れ落ちて、本流を埋め盡して堆高く積つて居るに相違ない。其の堆雪の一部と覺しきものが、背後の山裾にそれも可成高い所に残つて居る。冬は水面からあんな所まで埋つて居るのかと思ふと、水と言ふものが又、別の姿を取つて現れたその雪の偉力のすばらしさに打たれずには居られない。

露營の用意も出来上つて、一同揃つて晝食を採る。午後は人夫達は下流の偵察に行き、自分達は泊場から少し下手に行つて大ヘツリの手前で止まり、黒部別山澤から大ヘツリに掛けての雄渾なる溪觀を前にしつゝ、行手の様子は如何にと人夫の動靜を觀て居る。

此の人夫の偵察には重大なる意味が含まれて居る。今年の計畫が成就するや否やは掛つて此れにあつた。自分達の偶然にも一致した計畫は、黒部別山澤落口上手の徒涉點より更に尙、左岸を固守して黒部別山の其の立壁をトラヴァースして劍澤落口に至らんとするもので、此の行は恐らく異常なる困難を伴うに違ひ無いと言ふ豫想の許に、水に強い人夫を斯くも多數に連れて來た理由だ。出發前、黒部別山側は爆破により着々として歩道を開きつゝありと言ふ情報を得て、少しく幻滅を感じたけれど、兎に角行ける處まで行こうと言ふので遣つて來たのであつた。

人夫達は明日、徒涉點まで手間採らず行ける様にと悪場にはロープを張つて來る筈であつたのに、出發後一時間半ばかりで皆引上げて來た、その肩には張つて來る筈のロープが依然、その儘懸けられて居る。駄目とは豫想しつ

「も萬一を期待して『どうした？』『どうだ？』『行けるか？』と尋ねると、『駄目だ！ 行けない！』との答を得た。長い間、只そのみを一心に思つて居た自分達はどうして『さうか』と言つただけで諦められようか？ 根掘り葉掘り微細に前途の様子を聞く。徒渉點から右に移つて、其處の泊場の下手から架橋なり何なりの手段に依つて黒部別山澤左岸の尾根の突端に取付こうと言ふ計畫であつたが、今年は黒部別山澤の残雪の狀態が變調で、丁度其の尾根の尖端に残雪が夥しく、且つ流れの中や深さや速さの關係で、架橋は全然不可能であるとの事だ。此れは老野口がわざ／＼徒渉して右岸に行つて確めて來た事實なので、此れは動かす事は出来ない。且つ、其れで無しに徒渉點の手前で黒部別山の壁に取付いて、その右岸を爲す尾根を乗越えて一旦、黒部別山澤の中に入り、更に適宜の場所を選び、その左岸の岩壁を攀ちて尾根に達し、その下手の黒部別山の太壁に至る事も、空身ならば不可能では無いかも知れぬが、現在の様な狀態では問題外であらうとの説であつた。電力の歩道がどの邊りまで進行せるやははつきりしなかつたが、頻りとハツバの響きがして居たとの事であつた。こう言ふ話であつて見れば、目的を一變する以外に方法は無かつたのであるが、さてさうは言ふものゝ諦め切れぬのが吾等の心中であつた。それで合議の結果、遂に上廊下廻行と言ふ事に一致した。只管に左岸、黒部別山側の下降にのみ憧れて來た自分達には上廊下の地圖の用意さへ無かつた。僅かに冠さんのみが、『槍ヶ岳』圖幅を持つて居られたとだけだ。

其の中に夕方になつて仕舞つたので、大いに鬱憤を晴らさうと言ふ氣持も交つて、焚火をどん／＼燃やす。地勢の關係上、流水が非常に豊富で、然かも其れが乾き切つてゐるので、一抱へもある様な大きな奴でも、忽ちにして火の塊りと化して仕舞ふ。日は暮れて仕舞つたが仲々明るい、そしてもう氣温も相當に低下する時刻なのに、邊り

はほかほかして生暖かい。流水の火の海を見て居る中に皆の心も何と無く明るくなつて来て、計畫變更で情氣かへつた顔にも何時しか笑ひが浮び、果ては呵々と大笑して身體を揺ぶる。

もう月が出る時刻だと言ふので、待構へて居るが、中々その姿は見えぬ。新越の壁の背後の空が明るくなつてからもう大分時間も経つのに、一向に姿を示さうとしない。岩の上にあをのけに寝ころんで、背後の黒部別山の壁を見遣ると、その上から五分の一の邊りまでがびかつと光つて居る。新越の壁の輪郭をぎざ／＼に映し出した其れから下の部分は眞黒ろで、黒部別山の壁が窺見したより更に／＼物凄く、立派に見える。月光を受けた部分が次第に下に擴がつては来るものゝ、月が此の二つの大壁の間の谷の眞上に達するのは餘程、夜更けての事と思はれたので待ち切れずとう／＼寝に就いた。

二十五日。

泊場。午前六時。天候曇。氣壓六五・四九耗。風、上層東東北、地上南東東、微。氣温一三・五度。水温一〇・五度。

泊場發(前八、二〇)(曇)——クラノスケ落口下手の河原(九、〇五——九、一五)(稍々晴)——榛ノ木平(一〇、二〇——一〇、三五)(標高約一二三〇米)(稍々晴)——ハツリ(一一、一〇——一一、一五)(晴)——新越ノ泊場(一一、三〇)(晴)

五 東澤落口まで

今日は東澤落口のまだ上まで行こうと言ふので早く出發する。風は有るか無きか分らぬ位で、空には一片の雲さへ見え、絶好の天氣とは斯るのを言ふのだらう。七時二十分頃泊場を去つて八時には早くも榛ノ木平まで達すると

言ふ馬車馬式の歩き方だ。人夫達は流石に少し遅れた様だ。昨日は此處に誰も居なかつたのに今日は數人の大工が居て、頻りと仕事に忙しい。御山谷の小屋と同じく二階建が出来るのださうだ。

尙もどん／＼歩き續けて九時前にクラノスケ谷の落口まで來た。此處から暫く行くと、赤澤岳の猫の耳の岩峰がその尖つた耳を青空に心行くまでに突立てゝ居るのが、此の無關心な馬車馬共の足を止めさすまでに、間近く迫つて來る。

やがて、一昨日の泊場の跡を左手に見て過ぎ行く頃、不圖、後を振返へると、昨日、一昨日は雲に妨げられてその全容をはつきりと見せなかつた大タテガビンの岩峰が朝の光を斜めに受けて聳え立つて居るのが見える。

出發以後三時間でボーリング小屋の傍を通つたが、小屋の連中は不審さうな眼を以つて吾々を迎へた。ヂョキン／＼とボーリングの機械が不愉快な響きを立てゝ居るので、早々に其處を逃れ去つて御山谷の落口まで行つて一休みする。河原に出て見ると今日は立山が其の全容を現して居るが、残雪は微々たるもので荒涼たる感は免れ得なかつた。

自分が一寸河原で緩りして居る中に冠さんと岩氷さんとはずん／＼行つて仕舞はれた。自分は其れに氣づかず、後から來られるものとはばかり思つてぶら／＼歩き出したが一向に後から人の來る氣配は無い。まあ兎に角「平」まで行こうと右岸に移つて歩道を進る。快晴の日の光を受けて痛いばかりに眼を射る河原の白砂や、その間を青く流れて行く悠々たる流水に、新越附近とは斯くも異うものかと感心しながら歩いて行つた。

小スバリ澤落口も過ぎて大きくうねつて居る右岸の鼻先を廻らうとする頃、後を顧ると、遙かにキラリと光るも

のが見える。よく見ると人だ。光つたのは寫真機らしい。誰だか知らないが兎に角待つて居ようと道傍に腰を下ろす。やがて後から追付いたのは別宮さんだ。冠さんや岩永さんは先に行つたとの事。別宮さんは腹が空つたので御山谷の落口附近で一寸喰べて來られたと言ふのだつた。道の兩側には背の高い闊葉樹がすく／＼と生茂つて居るが、其の緑は、もうやがて秋も近づこうと言ふ此の八月の末、東京邊りの新緑にはとても見られ無い鮮かさだ。天氣が好くて、葉末、葉末にまで日光が透徹して居る故もあつたらうが、此れから推して、黒部の新緑が見度いなあと思つた。

「平」に着いて、日電の小屋の傍の藁ぶきの中に入つて、晝食を採る。その中に人夫も追々に着いたので食料を調べて、更に米の補給を受けた。人夫の荷が此れが爲、大分増したので、それを新らたに荷拵へするや何やらで、二時間ばかり時間を費した。

釣橋を渡つて右岸に移り、直ちに水際に降りて足首位の深さの所をじゃぶ／＼と歩いて行く。暫らくして浅い地渉(附圖、八月二十六日のI、以下此れに準ず)をなしつゝ左岸に移りやがて左岸の草崖の間をへつり初める。

此のヘツリ(AA')は相當に長くて嫌氣がさすが、水の中に飛び降りる理由にも行かず、四十分ばかりしてやつと河原に降りる事が出來た(B)。そして浅い水を越えて更にもう一つ先の河原に出でその儘、すん／＼歩いて行くと、右手からは口元コピキ谷が入つて居る。

それを過ぎて暫らく行くと河原に川楊の集團がある特徴のある場所に来る。此處等は夏でも冬でも大差の無い地形で、河原が馬鹿に廣い所だ。此れから少し先で川が右手にくつと折れて居るが、此の邊り右岸の河原から立山を

仰ぎ見る。

中コビキ谷はさう大きいものでも無いのでうっかりすると見落す位だ。流れは左岸寄りに走つて居るので右岸の河原に行く。中コビキ谷落口から先で川がまた右手にぐつと曲る所で、右岸は岩壁が露出して来て一寸行難くい。高廻りは嫌なので、人夫達のお手のもの、架橋(D)をやらせる。

米谷が木を工面して来ると、皆で、それを渡す。身軽な山本が先づ對岸に移り終つて、しつかりと固定する。やがて手摺りも添へられると言ふ工合だ。然し此れが爲三十分以上の時間を費して仕舞つた。

これからは左岸を可成長い間へつるので(E/E')處々、一寸した高廻り等して進む。此のヘツリの部分は、大正十五年の春、東澤から平への歸途に於て、雪橋が落ちたが爲に、通過を餘儀なくされた處で、その二三の高廻りにも記憶に残つて居る個所が少なくなかつた。自分達四人と長次郎とは、こうして左岸ばかりを進んだが、人夫達は、此のヘツリの手前で更に右岸に移つた。自分達がへつり終つて一休みして居ると、丁度其の前面が少し浅いので對岸に居た人夫の一部は徒渉して此方側に來ようとしたが、案外に深く、腹以上に達して、然かも流れが仲々早いので、見て居る方がはら／＼する。それでもやつと、その連中は此方岸に辿り付いたが、残つた人夫連は此れを見て其處を涉らうとせず、尙右岸を進んだが、一個所岩角が非常に通過し難いので可成困難して居た。それでも其處を通過し終つて、少し先で徒渉して左岸に移り、やつと一行に合した。水量が少なければ「平」東澤落口間は、何でも無いが、豫想に反して、一寸水量の多い今日の様な状態だと二時間三時間は直ぐ異つて来る。それも水際ばかりを固執せず、大きく高廻りして仕舞へば何でも無いのに、水際で無いと承知が出来ない變な人種の寄合ひだか

ら人夫も困ると言ふものだ。

前方には赤牛の尾根續きが、幾多の支尾根に分岐して黒部の水に臨んで居るのが間近かい。

此の處で亦、右岸に移つたが、水深が腹の邊りまでに達し、見掛けと違つて底の流れが馬鹿に速いので二人づゝ並んで杖を横に確り掴んで渉る。自分達は野口老人と並んで涉つたが、ともすると下流に押遣られ勝ちで、足許には仲々力が入らない。水に逆つて強引に身體を押し進める老野口の確りした足取りに助けられつゝ漸く岸に上る。人夫達も大困難で、皆が涉り終るまでには可成時間を要した(Ⅲ)。

此れから暫くで左岸に移つたが、今度は少し浅いし、流れも左程速くないので、樂に涉れた(Ⅳ)。

左岸の河原を進みつゝ、自分は對岸を注目の眼を以つて觀察した。其れは丁度、其の對岸の地點が積雪期の黒部を訪れた者に取つては、大いに苦き經驗を味はされた憶ひ出深き場處であるからだ(山岳、第二十二年第二號「積雪期の黒部川」中、一六六—一六七頁參照)。

積雪期に雪崩の恐れある地點は、つる／＼の逆層の岩面か、岩の破片が堆積したザラ／＼な斜面かであつて、自分達が曾つてその雪面上を横切つた部分は夏には通過不可能な個處が大部分を占めて居た。

奥コビキ谷は林の中から忍びやかに出て來るので其の落口は中コビキ谷以上に見逃し易い。此れを過ぎて暫らくすると東澤の落口で、大きな岩と、樹木の一寸した集團等、夏でも冬でも、それを特徴づける目標に於ては毫も變化を見ない。

落口の邊りでは川幅は著るしく増して一面に平らな河原の面を水は思ひの儘に擴がつて、淺瀬ばかりで、草鞋の

裏をビシヤ／＼と濡らしつゝ、右岸に移り(V)今宵の泊場(X)に到着した。

もう少し先きまで行けると思つたのに、水が多かつた爲、とう／＼此處で今日の行程は終りとなつた。此の泊場は東澤落口から一丁ばかり上の右岸の廣い河原の一隅であつて、緩りした流れを隔て、前面には美しい立壁がつましげにその影を清流に映して居る。

焚火が燃え出すと、細引がその近くの木の幹に張渡され、徒渉で濡れた山男どもの衣裳が一面に懸けられる。今日は一同大いに奮闘したとあつて「平」で仕入れた酒が振舞はれる。「岩魚のこつ酒」と言つて岩魚を一寸焼いたのをその酒の中に浸した奇妙なる酒を飲む。毎日、岩魚を喰べるので少しは水に強くなつて來て居るであらう。

空は相變らず晴渡つて、星が降るかと思はれた。やがて背後の樹林を通して月も輝き初めた。

夜更けて、露重き天幕から脱け出でて河原に立つと、皎々と晝をあざむく月光は寧ろ恐ろしいばかりで、邊りがしんと静まり返へつて水の音さへ、その聲を潜めて居る様で、永らく其處に低徊する事を得なかつた。

八月二十六日。

新越泊場。午前六時十五分。天候快晴。氣壓六七・二九。風殆ど静止。氣温一四・五度。水温九・六度。

新越泊場發(前七、一七)(快晴、以後終日快晴)——榛ノ木平(八、〇二)——クラノヌヶ谷落口(八、五〇)——御山谷落口(一〇、三〇)——平(一一、二二)——後(一二、二二)——以下附圖ニ詳記セリ。

口元ロビキ谷落口上手(一二、二五)——架橋點(三、一五)——三、五〇——徒渉點(四、四五)——五、〇〇——東澤落口上手泊場(五、三〇)

○黒部川 渡送

○黒部川 渡邊

東澤落口泊場。午後五時四十分。天候快晴。氣壓六四〇・〇耗。風殆ど静止。氣温一七・四度。水温一二・五度。

三四

六 中廊下へ

註記 黒部川に在つて、その下流に於ける「下廊下」と相俟つて此處に渾然たる「黒部溪谷」の眞諦を形造くるものは、實にその上流に於ける「上廊下」に他ならない。然して此處に我々が「上廊下」と稱するは、上は薬師澤落口の稍々下手を以て初まり、下は東澤落口の稍上手を以て終る部分を指すのである。更に詳述すれば、此れを二分して「奥廊下」と「中廊下」とに分ち、其の兩者の境界點は後述する「金作谷の落口」を以てするのである。地形上の状態、其他實地に觀察せる種々の點より考慮するも此の見解は先づ妥當なりと是認せらるべきものであらう。

上、中、下、或ひは奥、中、下と頭から三つに分つのも一案であらうが、さうすると下廊下だけが他に比して大に失し均衡が採れぬ様になるので、吾々は敢へて上、下、の二つに大別し、その上、の部分をも更に二つに分つた次第である。

今日も昨日に劣らぬ好天氣だ、此れから上流は未知の境を探らうと言ふので一行は大いに緊張する。泊場の前の例の美しい立壁にはそろ／＼日が射し初めて、昨日、日暮れに見たよりずっと引立つて見える。

泊場を出て大きく左に廻つて南を指すと、まだ斜めに射して居る朝日の光から離れて日蔭になる。此處では流れが二分して、その間に中洲を挟んで居る。此の中洲へと右岸から徒渉(附圖、八月二十七日のⅠ、以下同じ)して暫らく進み、それからまた右岸へと同じ様な徒渉(Ⅱ)をして戻る。出發して五分も経つか経ないに徒渉を二つもする位で、今日は仲々徒渉が多いぞと言ふ氣がする。

これから少し先に進むと、一寸した岩場で、水はそれに接して青味を帯びた深みを作つて居る。此のヘツリ(A)は大した困難もなく通過し終る。川岸はまた緩くなつて右岸の河原の上を行く、不圖行手を見違ると、薬師が谷の奥にそのカールを抱いて肩をそらして居る。もう夏も晩いのでカールには残雪は殆ど無くて、赤チャケた、紫がかつた肌を見せて居る。

兩岸の山裾は緩つくりして岩の露出は見えず、緑の樹木で掩はれて居る。右岸の方が行けなくなつたのでも無いが左岸の方がよさうなので餘り深くも無い徒渉(Ⅱ)を爲して左岸に移ると、間も無くクマノ澤が落合ふ。此の澤の落口は五萬分の一の地圖に記されたより少しく上手で、森の中を滲み出て來る様に、こつそりと落合ふので、危ふく見落す處だつた。

短かいヘツリ(C)、ヘツリと言ふ部類に入れるべきかどうか怪しい位なもの、それを終ると、また右岸へ移る。

此の徒渉(Ⅳ)は流が相當に速く、股位まであつたらう。右岸の河原は廣いが左岸の方は壁で行かれ無い。少し行くと對岸にはガレが見え、尙暫らくすると、上流に當つて黒ピンカの大壁が花崗岩の白い肌に針葉樹の暗い緑を點綴させて、思ひ切り高く聳えて立つて居る。左から瀑をなして注ぐ小澤を過ぎて、左岸へと徒渉(V)する。此處は流れが少し停滞した氣味の個所で水もさう冷くないし、流速も小さいので悠々と黒ピンカを仰ぎつゝ左岸へと上る。

川は左に一廻り廻つて居て、その曲り目邊りではガレの下を傳つて行く。對岸からは一枚岩の上を一氣に滑落ちて可成水のある小澤が合して居る。壁の下手を過ぎると、またガレが右に掛つて居る。此れに相對して右岸からは小澤が入つて居る。

少し先で河原で小憩を取る(E)、此處からは前尾根を隔て、赤牛の一角がチラリと見える。

此れまでは、兩岸には針葉の樹林が水際近くまで降りて来て、その影を靜かに流れ行く水の面に没し、河原の眞白い小石は圓味を帯びたその肌を日光に曝らして誠に靜かな、そして落着いた氣持を漂はせて居たが、やがて廊下も始らうと言ふのに、斯る状態が何時まで續くだらう。

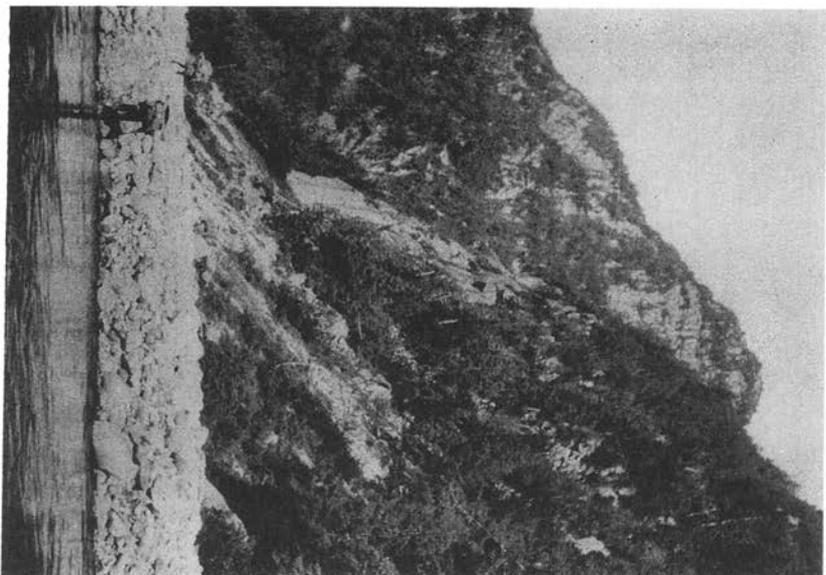
河原にはその角を摺減らされた花崗岩の大塊がぼつ／＼と目立つて來た。只、大きいものだけでは無しに、小さい石もごろ／＼と一面に散亂して、川は右手に急に折れる。此の角の所で對岸赤牛側からは二つの澤が相並んで注ぎ、その中間には巾廣い滑かな岩板が露出されて居るのが目を惹いた。

俄然、此の角を曲ると共に、前面は黒ビンカの大壁でびたりと閉ざれて仕舞つた。川は此處で盡きたのではあるまいかとの疑問を抱かせる。

兩岸からは眞直ぐな岩壁が迫つて、其の間に深い淵を挟み、その背後にはその天空と接する境も見え無い位に、高く／＼黒ビンカの立壁が扉を閉ざして居る(F)。

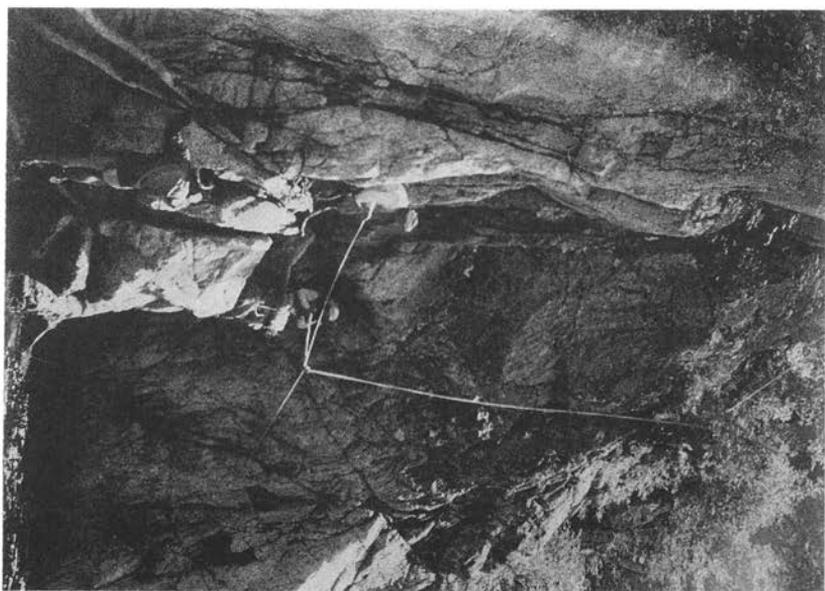
若し「平」より溯るのを順路とせば上廊下は實に此處に初まると言つて差支へあるまい。又若し上流より水を追うて降るのを順序とすれば、上廊下は薬師澤落口より約一時間行程の「廊下の入口」と名付けられたる關門を以て初まり、此處に終ると考ふべきであらう。

兩者の混同を避けんが爲に新らしき稱呼を附するとせば、此れを「中廊下の門」と言ひ上流のものを「奥廊下の門」と稱するのが適當であらう。兎に角、下流より溯り來りて上廊下の神秘を窺はんと欲する者は先づ此の關門を



クロゼツカ

渡邊 漸氏撮影



クロゼツカ下の懸場

岩永信雄氏撮影

入らなければならぬ。然し其の門は異常なる減水の時期を除いては、其れを通過するに多大の努力と時間とを要するので、此處まで溯れる多くの人達も敢へて通過しようとせずして、此の地點の下手より右岸に取付き、其の斜面を攀ちて東信歩道に合し、此れより徒らに尾根先の迂回のみを繰返へし、廊下澤落口附近に至るまでは谷と其の交渉を斷つべく強いられたのであつた。

其れ故、中廊下の溪觀を探り、その飽く事なき清流と岩石の美に酔はんと欲する者は、自然の與ふる此の試練に先づ耐へなければならぬ。然かも自然を打破らうと言ふ野心で無しに、小心翼翼として謙讓なる氣持で其の門を潜らして貰ふべきである。

先が行けるかどうか分らなくなつたので左岸の水際近くに一同荷を下ろす。長次郎は先の様子を窺つて居たが、行ける見込みがつかぬものか、米谷、野口、山本、信一等が身輕るになつてロープだけを携へて出掛ける。對岸の方の壁は稍々オーヴァーハングの氣味で、足場が悪い爲どうしても左岸を行かねばならぬ。

自分達の休んで居る此の河原は數歩先に進むと濤に接して居るのでその壁際を選んで、斜めに丸太をその岩壁の一部に渡し掛ける。然かし其の橋代りの丸太も水面下に在る部分が多い。さて其れを渡つて、岩に取付くと此處は幸に足掛り手掛りがある、其れに岩の割れ目に灌木が生へたりして居て比較的樂らしい。斜めに少し登り、へつり氣味に彼等は進んで行つたが、岩角に遮られて、其の行動は見え無くなつて仕舞つた。

自分達は、前面の淺瀬を横切つて對岸に達すると其處にはほんの猫の額程の河原がある。三人ばかり立つともう餘地が無い位で其の狭さは推して知るべきだ。別宮さん、岩永さんと自分は、其の先きの様子や人夫達の作業振

りが見度かつたので、寫眞機だけを携へて其處に涉つて見た。

左岸からは岩角に遮られて見えなかつた部分が此處からはよく見える。其の岩角の向ふは、窪みになつて居て、其處では岩が眞直ぐに水の中まで突立つて居る、へつり終つた所から少し上に木があるのを見付けて、野口が其處まで登つてロープを引掛ける。其れを傳つて下に降ると水際近くで左手に一寸した足場がある。其れから更に六尺ばかり下にある岩の棚に移つて水面と摺れぬになつたが、水深が相當にあるので一寸躊躇する。すると元氣な信一が禰一つの素つ裸になつてどぶんと水の中に飛び込んで、灘を一つ隔てた河原を目指して進んで行く。

河原に上ると、長い丸太を何處からか探して來て、此れを先刻の岩の棚に向つて渡し掛ける。然かし此の丸木橋も眞中の部分は水面下に沈んで居るので、やがてロープの手摺りが添へられた。其處で自分達は又、元の左岸の河原に戻つて身仕度をして、彼等が進んだ通り、その跡に従ふ。岩をへつつて十五米ばかりアップザイレンする處では其の終りの部分が窪みになつて居て、少し困難した。此れから下は向ふの河原に着くまでロープが張つてあるので水中で撓ふ丸木橋も安全に渡る事が出來た。

自分達が濟むと、今度は荷物の番で此れは人間とは異なるので、例の木に懸つたロープの末端に縛り付けて振子の様にして、別に結へ付けられたロープを手繰つて引寄せると言ふ寸法で人間の様に自分から動くと言ふ事をしない代りに少々手荒く岩角に打つ突けても痛いとも何とも言はない。一々荷物を擔いで運んだのではずつと時間が餘計に掛つたらうが、此れで大分時間が助かつた。然しそれでも全部終るまでには一時間四十五分を要した。

此の惡場を通過し終つた所は、左岸黒ビンカ直下の河原(G)で、一同此處で晝食を採る。朝からの快晴がずっと

續いて居るので、日向は可成に暑い、自分達四人は靜に接した砂地の日蔭になつた處で快い食事を楽しむ。人夫達は一仕事の後で大いに腹を空らして、日ががん／＼照付けるのも忘れて、眞白ろに光る大石の上で飯を掻込んで居る者も居れば、流石に暑さに耐へかねて岩蔭で蕨を頭の上にさしかけて、もぐ／＼遣つて居るのも居る。

背後の黒ビンカの一部を爲す其の大壁は向つて右手寄りに狭い急峻な割れ谷を落して、二百米ばかり眞直ぐに直立して居る。丁度大きな角材をぎ／＼と積上げた様で、上の方に重ねられた其の材木が周圍から壓出されて落ちて來はしまいかと思はれる位だ。その節理は向つて右下から左上へと向つて斜めに走つて居るが、其れと共に手前の方に倒れ氣味で上から／＼と重なつて屢々其の下面が下から仰がれる。此の灰白色の花崗岩の重なりが先刻、門の扉の様に行手を塞いで居たので、此處まで來て見ると川は左にぐ／＼と廻つて其の流れは盡きる處か却て今までもりも幅広い位だ。

第一の難關は終つたがまだ／＼前途が分らないので食後の午睡を採る餘裕等は無しに、正午出發する。

水際の小石を拾つて行く中に川はぐ／＼と左に逸れて今までの方向と略々逆になる位までに曲つて居る。左岸は黒ビンカの裾に接するので浅い所を選びつゝ水苔の生へたつる／＼した石を踏み越えて右岸に渉る(VI)。

向つて左手の壁、即ち先刻の悪場の通過に際して觀察せる所ではオーヴァーハンング等ありて通過不可能と見えし右岸の岩壁の續きは依然垂直に近い傾斜を保つて此處でも取付く術は無い。

流れは著しい狭流を爲して幅は一問にも足りない(H)が、對岸の岩が平坦でないので、一寸飛ぶ氣も起らず板を渡さうと言ふ事になつてその中の一人が木を探しに行く。さうして居る中に先祖がばつと向ふに飛び移つて平氣な

顔をして居るのには一同驚いて目を見合はす。其中に木切れを拾つて來たのでそれを架して一同渡り終る。

左岸の廣い河原を行くと、川はまた右に廻つて略々西を指す様になる。其れと共に兩岸の山裾は流水から稍々身を退け、その河原に接する邊りまで樹林で掩はれて、丁度、東澤落口の暫らく上手の邊りと同じ様な落着いた、然かも其の中には自ら美しさも具はつて居ると言ふ溪趣を示して來た。

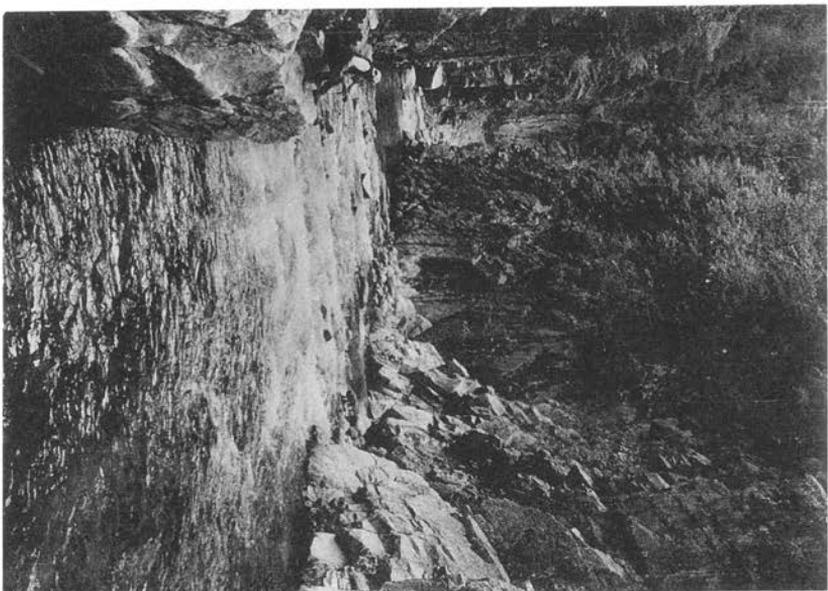
左岸の方が河原が廣いので少し瀬が早かつたが流れを越して(Ⅱ)其の方に移り、花崗岩の廣い岩板の上に行く。然かし其れも街路のベーズメントの様に平坦なものでは無いので凸凹不平の其の表面には處々水が溜つて居る所もあれば、斜めに割れ目が入つて、其れに沿うて砂がたまつて居る個所もある。

行手の兩岸の尾根の重なるの彼方にも、顧みる烏帽子南澤の尾根の末端の其の上にも、白い大きな積雲がふわふわりと浮び出て來た。流れは廣く淺く緩かに小さい石の間を縫ひつゝ走り去る。誠に穩かな眺めだ。

左手から澤が一つ入るが其れを越した邊りで左岸に向つて淺い徒涉(Ⅲ)を爲す。直ちに右手から瀧のある小澤が合し、暫らくして其れと同じ位なのが又右手から注ぐ。

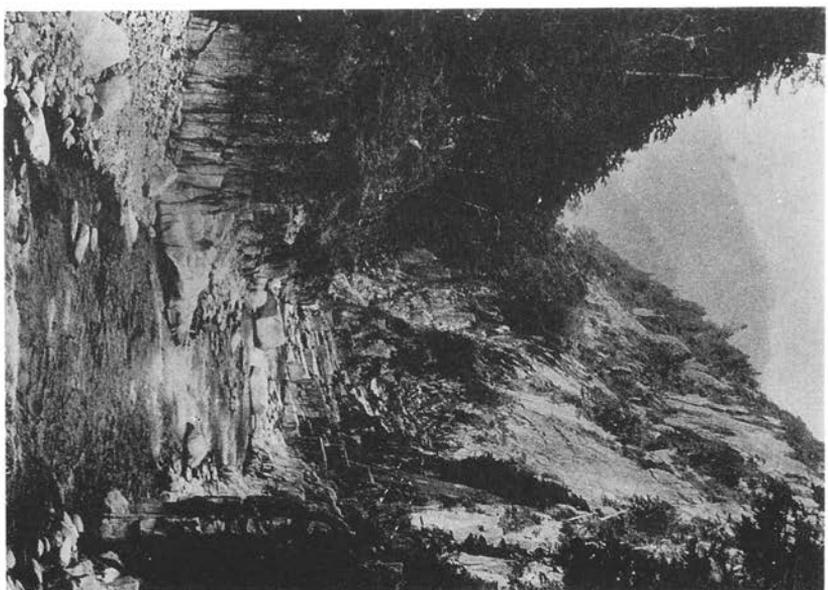
左岸の河原が次第に廣くなつて、右岸には壁が立つて來ると川は西南に向つて一轉する。前方を眺めると右手からは眞黒ろに茂つた尾根が眞一文字に降つて來て、其の下は立壁となつてゐるらしく左手の方は同じ様に濃く茂つた尾根が見え、其の水に接する部分はまだよく見えないが、兎に角、また手強い處が近づいたらしい。餘り樂な所が続いたので三十分ばかりで大分抄つたが、此れから先は相當に悪いらしい。

積雲が次第に空の廣い部分を占めて來て日が射したり、蔭になつたりする。足首を水に濡らして岩から岩へと移



口元ヲル澤上手の廊下

冠 松次郎氏撮影



敷河谷と金作谷との間の総峠 (其二)

岩永信雄氏撮影

りつゝ中流に出て、淺瀬を選んで進んだが、やがてまた左岸の方へと近づく。何の危険も無い處で、氣も弛んで居たので、一個所つると滑つて、リニクサツクの下の方を少し濡らした。邊りを見廻すと誰も見て居ないらしいのでほつと一安心したが、實はちゃんと見られて居たので、後で別宮さんに「あそこで轉んだでしょう？」と止めを刺された。

今まで隠れて見えなかつた前面がすっかり展開された。見ると兩岸とも、殊に右岸の方は眞直ぐだが、その兩岸の岩壁が相迫つて其の高さこそ三十米にも足り無いだらうが、典型的の廊下をなして數丁の間に亘つて連続し、やがて右の方に折れて、其の先は見えないが、恐らく其の少し先まで終つてゐるらしく思はれた。兩岸共、其の水際から突出つて居るのだから、水の中を行かない限りはその岸を傳ふ事は不可能だ。

兎に角近づいて仔細に觀察しようと言ふので、右岸に移つて小高い岩の上に行く(丁)。

口元ノタル澤が此の廊下の入口に接して右岸から入つて居るので、左岸から右岸へ移ると直ちに口元ノタル澤の落口を越えて此の小高い岩場に出るのである。其處まで来て前途を窺つたが右岸の方は絶望で、左岸の方を高廻りすれば行けさうなので老野口と信一がまた左岸に戻り、それから草崖の間を分けて高廻りをなしつゝ、前途を見届けて來る事になつた。

まだ一時にはならないのだが、邊りが一體に陰鬱な上に日が曇つて來たので夕暮れが迫つて日没ももう間近かいと言ふ感じが濃厚だ。薄すら寒くさへなつて來たので兩人の歸りはまだ仲々時間が掛るだらうと、口元ノタル澤の落口の邊りで焚火をする。岩魚に對しては目の無い人夫達は口元ノタル澤の方へどん／＼登つて行くのもあれば、

○黒部川 渡邊

四二

例の小高い岩場では釣は一等下手な米谷が糸を垂れては岩魚を逃がして居る。岩の窪みの水溜りには先程から釣上げたり、水を干して手どりにしたのが三四匹入れてあるが、それを相手に猫の様に戯れて居る人夫達も居る。

口元ノタル澤は水は餘り多くなくて、ガレ谷に近い感がある。冠さんや岩永さんは上を振仰いで彼處の木の傍を東信道が通つて居るのだと五十米ばかり上を、指しながら昨年の秋の憶ひ出を語られる。焚火はともすれば途絶え勝ちで、時々木を拾ひに邊りを歩き廻はる。口元ノタル澤と丁度相對して左岸からは残雪の多い傾斜の急な澤が入つて居る。クマノ澤以來左岸で注目に値するのは黒ビンカに入つて居た割れ谷と此の澤位なもので、此の澤は相當奥深く達して居るらしく思はれた。

一時間ばかり経つと遠くの方で二人が叫んで居るらしい聲が聞え、次第に其れが近くなつて二人の姿が左岸の藪の中から見え初めた。愈々行ける見込みがついたので、一同左岸に戻り、残雪の多い澤を越えて、其れから稍々岩の上を登り、灌木、雜草の中を行く。長次郎が先に立つて吾々はその後に従ふ。壁の上端より少し上まで登つて、今度は横にへつり初める。此の邊りには一面に虎杖が茂つて居るので、其の四五本を掴んで手掛りとなしつゝ進む。やがて虎杖が笹藪になる。此れは手掛りとしては確りして居るが、足場としてはつる／＼滑るので困る。こうしてがさ／＼と音を立てながら行くと自分の居る場所が谷の上のし掛つて、オーヴァハンダして居る様な氣がしてななかつた。

笹が濟むとまた大虎杖となり雜草の斜面となり手掛り足場が至極悪い。落葉松がぼつ／＼現れて来て此の邊りからは木の間を透して脚下に水が見え、行手には河原も見えて來た。倒れて朽ちた木の上を渡つたり、若木の枝に身

を託して足場の悪い處を過ぎたりする。木が無くなると岩の破片と土塊とが交り合つて岩面の上に薄く掩ひかぶさつて居る様な所や、土にステップを切らねばならぬ處があつたりした末もう眞下に河原が見えて降りられさうだがそれで居て仲々降り口が見付からない。尙降り氣味に進んで行く中に足場の多い岩壁に達し、それを斜めに降つてやつと此の長いへつり(KK)を終つた。時間は三丁ばかりの所に四五十分も掛つたが、同じ時間を費やすのでも水際近くを行く方がすつと愉快だ。どうも高廻りと言ふ奴は勞ばかり多くて結局残るものは何物も無い。

降り終つた所から下流を望むと少し先きで流れは左に折れて、此の曲り目近くで廊下が始つて居る事が明瞭に看取される。此の曲り目から上手では左岸の方は尙暫らく緩いながらも岩壁が続いて居るが右岸の方は岩壁がなくなつて狭いながら河原を爲して居る。

此の邊りでは落差は相當に強く、従つて流れも仲々速い。

少し先きで右岸に向つて徒涉(IX)をしたが、深さは股位まで達し殊に其の右岸寄りの部分は落差が激しくて右から石へと足を踏み變へるのが仲々骨だつた。自分は先に涉つて後を見て居ると次の冠さんがもう一足と言ふ所でひよつと足を踏み外づして水の中に轉べられた。手近かな岩につかまつて身を支へられたが何分流れが急で容易に岩の上に登る事が出来ないらしく見受けたので、ピッケルを差出して引張つた。何でも岩につかまつて居られた時にはその大きな岩が少し動いたと言ふ事で流れの勢は恐ろしいものだと感じた。其の時、水の中に失はれた黒部と銘うつたピッケルは水に目の利く竹次郎が早速に拾ひ上げた、此の調子で水の中の岩魚を探るのだから岩魚に取つては竹次郎は大敵だ。一寸其處で休んで暫らくするとまた左岸への徒涉(X)だ。此れも深い上に潮が早いので、一同

緊張して涉り渡る。

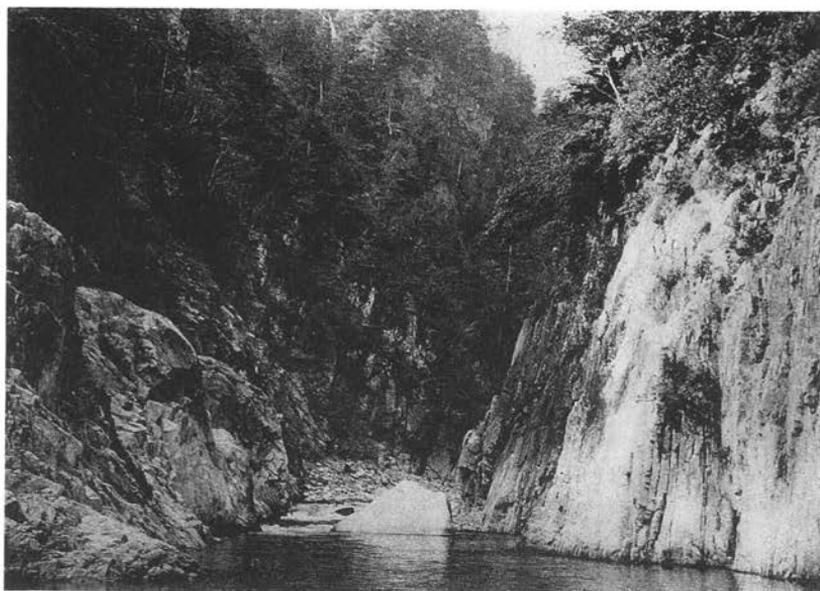
流れは今まで略々北西を指して居たのに此處で一轉すると共に又、西を指す。此の曲り目の所では左岸のやゝ高みを斜めに過ぎる。

曲り目を過ぎて左岸の積に出ると此の邊りから眼前の視界が大きく展開され、廊下澤の落口が見え、其の背後には越中澤岳がその半身を乗り出して、その頂き近くには薄雲が纏ひ付いて居る。空は依然として曇つて居るが、兩岸の傾斜が緩く、然かも充分な河原を残して居るので、また明るい氣持に立歸る事が出来た。

ぶら／＼歩いて行く中に、とある岩蔭を越すと左岸の河原が狭くなつたので右岸に移る(XI)。右岸は河原の幅も廣く、それに山裾が左岸よりまだゆつたりして居る。二つ三つと小澤を越して行く中に廊下澤の落口は程近かく、其の背面には赤く削げた岩壁が見える。

左からと右からと相對して二つの澤が合し、之れを過ぎると、山手寄りの雑草の生茂つた中に東信道が通じて居るのを認める。河原から一寸離れて數歩登るともう其處は東信道で「巨原標六千間」と記した標木が立つて居た(M)。然し東信道を辿る事、十歩に満たずして又河原に降る。此の處で露營の跡を見たが之れが廊下澤落口の泊場で、東信道を東澤落口から辿つて來れば、此處で始めて本流と出會うので其の間には泊場は無い。

自分達は尙少し進んで廊下澤落口の對岸に行つて其處の花崗石の上で休む(N)。廊下澤は水量も相當に多い立派な澤で今朝出發以來、澤らしい澤は此れが初めてだ。五萬分ノ一の地形圖では此處等邊りは岩の記號が多いので、廊下澤は其岩壁の削立した間に吊懸谷にでもなつて入つて居る様に想像されるのであるが實は此處邊りは上廊下中



(上) 數河谷と金作谷との間への入口の清淀(其一)

岩永信雄氏撮影

(下) 數河谷と金作谷との間の絶嶮(其三)

渡邊漸氏撮影

でも一番、ゆつたりした處で廊下の趣きは更に見られず、従つて此の澤も悠然と流れ來つて石の間を縫ふ様にして本流に合して居る。

岩の上で休みながら附近に泊場を物色したがどうも思はしい處がない。それに此處は恐ろしくぶとが多い所で、追つてもく身邊に迫つて來る。顔や手をさんくんに刺されて搔ゆくて耐らない。こんな處に長居は無用と此處を立去つて、少しばかり雜草の間を攀ち登るとまた東信歩道に出會ふ(○)。流れは左にくつと曲るので此の高みから上流に面すると藥師の屋根續きが谷の背後を大きく占め、殊に間山(二五八五・二米)が間近くその姿を現して居る。そして薄日ながらに逆光線を受けて谷の面はきらきらと輝き、落葉松の細かい葉末に映り返へる。

右岸の方は少し先きで赤味を帯びた脆弱な壁となつて暫らくの間續いて居るが、その下は直接に水と接せずして中廣い河原となつて居る。然し減水せる今日ではさうであつても水の多い時期には流水に掩はれるらしく、東信道は其の中程より下の邊りをかすかに通じて居るのが分る。

東信道から再び離れて河原傳ひに進んだが此の邊りは河原自身も至極おとなしいので、さつさと歩いて行く。泊場を求めつゝ行く中に左岸の河原に恰好な場所が見付かつたので、今日の最後の徒涉(XI)をする。廊下澤、數河の落口の中間より少し後者寄りの地點で、間山は益々大きく數河澤も間近かく見えて居る。

地形圖には廊下澤と數河澤との間は左岸は一面に岩壁の記號を附してあるが、左岸は此の邊りが最も山裾の傾斜が緩慢な個所で、實際の泊場から木の茂つた處までは仲々に距りがある。若し晴天だつたら非常に明るい感じのする處に違ひ無い。可成に濃く曇つて來た此の夕方ですへ暗い感じと言ふものは少しも起らなかつた位だ。

○黒部川 渡邊

四六

徒渉が十回以上もあつたので衣類がひどく濡れて、洗濯屋の物干見たいに、焚火の傍は色とり／＼の干物で一杯になつて居る。天幕はそれから稍々下手に張られ、自分達はその傍に集つて今日一日の憶ひ出に耽ける。分けても印象に深く残されたものは、黒ビンカ直下の悪場と、口元ノタル澤の上手の立派な廊下とだ。そして斯る緩みの無い場面の合間々々に點綴された清流、麗石、そしてそれを圍める樹林の美、さう言ふものが如何に自分達の心を和らげた事か？ 人工に汚されない大自然の美しさ純潔さに今日は終日浸る事を許されて、吾等は此の上廊下を訪ね來たつたその甲斐ありしを喜び、更に行手の未知境に對する憧れは益々加はるばかりだつた。

岩魚の大漁だと言ふので、今宵の食卓は岩魚料理で充される。鹽焼き、刺身、ぶつ切りの酢のもの、等々で難をつければフライが無い位なものだが、矢張りあつさりした日本風の料理の方が好ましい。食ふは食ふはこんなに喰べて米が足らなくなりはしまいかと思ふ程だ。腹が膨れると横になり度くなつて皆、ぼつ／＼と寝る用意に掛つたが記録を探つて居る自分はさうは行かない。天幕の中で蠟燭の光を便りに暫らく筆を走らせて、さて寝に就こうと言ふ頃には薪の音が邊りを搔がせて居る。空は曇つて居るが、時々はちら／＼と星が覗くので明日も先づ安心だ。

二十七日。

東澤落口上手泊場。午前六時。天候快晴。氣壓六四〇・五耗。無風。氣溫九・六度。水溫一〇・五度。

出發前七、四五(快晴)——黒ビンカ直下の悪場(九、四〇——一一、二五)(F)(快晴)——晝食(一一、二五——一二、〇〇)(G)(快晴)——口元ノタル澤落口(一二、四五——一二、〇五)(J)(稍々曇)——ハッリ(一二、〇五——一二、五〇)(K)(曇)——廊下澤落口(一二、五〇——一四、二〇)(N)(曇)——廊下澤ト數河澤トノ間ノ泊場着(一四、三五)(O)(曇)

七 中廊下の核心

今日は愈々最難關たり、また上廊下中で一番に優れたその溪流に接すると言ふので朝早くから起きる。餘り寒くないので天幕から出て恐々空を見上げると一面の雲だ。然かしその雲は高く、さう濃く無い上に、雲足が非常に緩慢で殆ど動かないと言つてもいゝ程で日が高くなれば晴れるらしく思へた。少しく朝焼けがして淡桃色が、つたがそれも大して意味あるものでは無さうだ。

昨日は氣が付かなかつたが谷の奥を眺めると薬師の頂上から南東に續いた尾根の一角、恐らくは二七六〇米の圍のある邊りと覺しきがごつ／＼した稜線を限つて尾根の間に聳えて居る。それから左に延びた頂稜は立石附近に終るものではなからうか？ 早く出發しようと思つても何分にも多人數の事とて仲々に時間が掛つて、いつもと同じ位になつた。

泊場を出て直ぐ右岸へ徒渉（八月二十八日のⅠ、以下同じ）し、暫くして又左岸に戻る（Ⅱ）。河原は廣いが、石塊が次第大きくなつて此の穩かな流域ももう直きに險峻になつて來るであらう事を豫想せしめる。泊場からも見えて居た薬師の一角は更に廣く展開されてその頭は薄雲にぼかされて居る。對岸は赤い色をした破片岩の壁で、東信道は危氣に其の上を通じて居る。あんなに無理してまで悪い所を通らないでも思はれる位だ。勿論かゝる地點では其の荒廢は著るしいものであつた。餘り急いでも居ないのだが案外に早く數河澤の落口の下手に達した。此處で右岸へと涉つたが（Ⅲ）、深さは股邊りに達し、流れは相當に速かつた。右岸に移つて見ると此處は山鼻が至極緩か

に展びて來た端で、其の少し下手では一寸した澤が二二一〇・四米の三角點附近から落來つて本流に合する。

此處は丁度數河澤の落口の對岸である(A)。自分達が數河澤と新稱せる澤は數河乗越より略々南流し來つて此處に終るものを言ふので、廊下乗越より來れる廊下澤と相伯仲せるものである。澤の落口の様子は廊下澤の夫れとよく似て居るが、此方の方が一層幅廣くて大きい様だ。それに谷の奥の方には緑で埋れ盡した、穩かな圍味を帯びた山影が見えるだけで他に目を遮るものが無いので非常に明るい感じがする。此處から此の谷を廻つて數河乗越に達し越中側の數河谷を降つてその惡場々々を過ぎて、眞川に至るのも仲々面白い行程である。此の澤の落口の上手では赤壁が水際近くまで來て居る。此の澤と半丁と隔らず、此の赤壁の上手には間山から發する澤が合して居る。此の澤は數河澤とは異つて兩岸が岩壁で界せられ谷の傾斜も急で、一寸見た處では其の岩壁も可成奥の方まで續いて居るらしく思へた。人夫達は先刻の徒涉點で涉らずに尙、左岸を固守して數河澤の落口を越えて此の赤壁の邊りから自分達の居る方に涉つて來た。

東澤の落口以來、西へ西へと辿つて來た吾等は、此處で南に方向を變へる。細部に在つては其の方向は種々であつて一定せぬが、此れを概括すれば藥師と赤牛との間を北へと流れて來つた本流が一轉して東を指すのは此の邊りであつて、従つて此處で本流に合する數河澤の源頭附近からは、此れより上手金作谷の落口に至る中廊下の中心地帯が見えるのは當然で、大正十三年の夏、五色ヶ原から藥師へと志した際に數河乗越附近から認め得た廊下の一部は實に其の邊りだつたのだ。其時の印象はまだ可成はつきりと記憶に残つては居るものゝ、それは岩壁の連続と其間を青く且つ白く疾走して居た流水の輝きとだけで何處がどうといふ事は勿論分らなかつた。岩壁は主として右岸



數河谷と金作谷との間の絶験(其五)

岩永信雄氏撮影

の方のものが見えたので従つて餘り高い感じはせず、山側が悉く岩面の露出になつて居る様な個所は見えなかつた。此處で南に轉すると共に廊下が愈々始まるので眼前には對岸に美しい岩壁が現れる(B)。左岸は水面から三十米ばかりの高さまでは針葉樹が下つて來て居るが、其處で眞堅てにすぶりと切られた様になつて此の立壁の岩面が露出して居る。層が堅てに細かく走つて居て其の表面は美しい感じを與へる。上の方は黒味を帯びて居るが下の方は水に接觸する爲であらう、磨きを掛けられて花崗岩特有の肌目の細かい眞白な表面を示して居る。それに此處では流水が漣を爲して居るので其の影が水の面に靜かに浮び出て居る。右岸の方は壁と言ふ程のものは無いが矢張、水際は大きな岩で終つて居る。此の漣の中程には大きな眞白な花崗岩が氷山の様横たはつて流れを二分して居る。右岸は少し足場が悪いが、暫らく水際をへつり終ると、前に述べた大きな圓味を帯びた岩に差掛るので、其の上に登る(C)。そして其の岩の上を歩いて行くと、少し先にポルトを打込んだ處が二個所あつて此處では東信道も水際に降つて居るものと見える。谷は少し右手に曲つて居て今まで見えなかつた先きの方が見え出した。左岸の少し上流に當つて、すばらしい大壁が現れ、其の直下は相當に手應へがありさうだ。案じて居た天氣も次第によくなくて、谷は次第に明るい氣持に充ちて來た。

自分達が進んで行く岩場に一個所妙な窪みがあつて其處では十米ばかりアップザイレンして降る。東信道にも何でも一個所悪い所があると聞いたが此處がさうらしい。岩を終へて河原に降りて其の儘右岸を行く、東信道は又もや高みをさして登つて行つて仕舞つたらしくもうそれと覺しきものは邊りに見え無い。河原がほんの少し右岸に残つて居るのを便りに行くが、兩岸の岩壁は次第に高く屹立し初めた。殊に左岸の方は殆ど直立と言つていゝ位で、

平たい一枚岩が板の様に立掛つて居る處もあつた。振返へると數河の頭の一角らしきものが高く聳えて居る。花崗岩を踏み越え／＼行くと谷が左に曲らうとして右岸の河原は段々狭くなり四角な大きな花崗岩が右岸寄りに蟠居して居る。此の岩は足掛りがなくて中々登れないのでピッケルを足場代りとして其の上に登る(D)。此處から更に右岸を行かうと人夫は先を見に行つたが駄目なので左岸に徒渉する(IV)。此處では河原は殆どないので岩より降り水に入り、岩に上ると言ふ有様だ。

左岸は大きな材木を横に何段にも重ねた様な、階段状の花崗岩の岩場で(E)、その節理が實に美しく現れて居る。その最下段に水から登り、次ぎの段、次ぎの段と三四段あがつてから棚の様にすつと續いた部分を斜めに進み、今度は逆に段を降つて水際近くに行く。左岸の岩壁の間から深い割れ谷が落込んで居るが此れはさう大きいものではない。もう此の邊りは先刻見えて居た大壁の裾で、次第にその峻険さが加はつて來た。谷は又右に急に曲つてすつと先の方は見えないが、行手は兩岸とも廊下状に相迫つて、左岸の曲り目に少しばかりの河原を残すに過ぎない。右岸の岩壁は冠さんの言葉借りて言へば碁盤を積重ねた様で、其の碁盤が谷の方に傾いて上から上から積重なつて居るので今にも其の一つがつかつたりと抜け出で、頭の上から落ちて來はしまいかと思はれる位だ。

左岸の岩壁の續きはまるで城砦の様に水際から聳立して最早、河原は見られないので水の中を左岸寄りに進む(F)。然かし流れは相當に速い上に足場に適當した石が順序よく並べられてあると言ふのでは無いのだから口で言ふ様に簡単に進む譯には行かない。水の中にある石から、すつと離れた水の中にある石に移らねばならぬ所では思ひ切り身體を大きく動かさねばならない。どうしても人夫の手を借りねばならぬ様な個所もある。人夫達は右岸へ

移るべき處を探して居るが、深さが深いので中々いゝ處が見付からなかつたが、それでもやつと越えられる場所が見付かつた。此の徒渉點(V)は何分にも流れが速いし、深さが随分に深くて、青い色をして居る處もあるのど一部はどうしても岩から岩へと飛び移らねばならぬ。其の所では老野口が手を差出してぐつと引いて呉れるが、勢を付けてその岩に乗り移る時に野口の身體に自分の身體がどしんとぶつかるのに、狭い岩の上でびくともせぬ彼の強さには全く恐れ入つた。自分の様に目方の軽い者は比較的禁であつたが、冠さんの様によく肥つて居られるとなか／＼手間が掛る。然し石から石へで無しに水中の流れの速い個所を横切ぎる時には目方の軽い者は浮かされ氣味で目方の重いの方が工合がいゝ。

前方を見ると兩岸から大きな岩壁が「く」の字に相迫つて流れは其の間に押し狭められ、或る所では青く深い澗を作り、また或る所では白く泡を噴んで岩に激しその間を縫うて奔流は疾走する。兩側から流れを差挟んで稍々オーヴァーハンドして居る岩壁で限られた前景の背後からは、向つて右手即ち左岸に當つて先刻遙かに谷の奥にその上半を望み見た所の大岩壁の全面が約三〇〇米近い高さを示しつゝそゝり立つ。其の上の方には緑の樹木が掩ひかゝつて、岩の割れ目、裂け目を傳うて岩面の一部に纏ひ付いて居るが、下の方は美しい節理を示すのみで、木も何も生へる餘地を見出されぬ位に研ぎ澄まされて居る。左手寄りの、其の更に背後からは金作谷の落口に向つて岩井谷の頭から延びて居る尾根の一部がこんもりと茂つて見え、その後には當つて藥師南稜の一部が突兀として空を限つて居る。

右岸の水際近くに辛うじて残された餘隙を暫らく辿ると、例の「く」の字なりに右岸を限つて居た岩壁の突出に

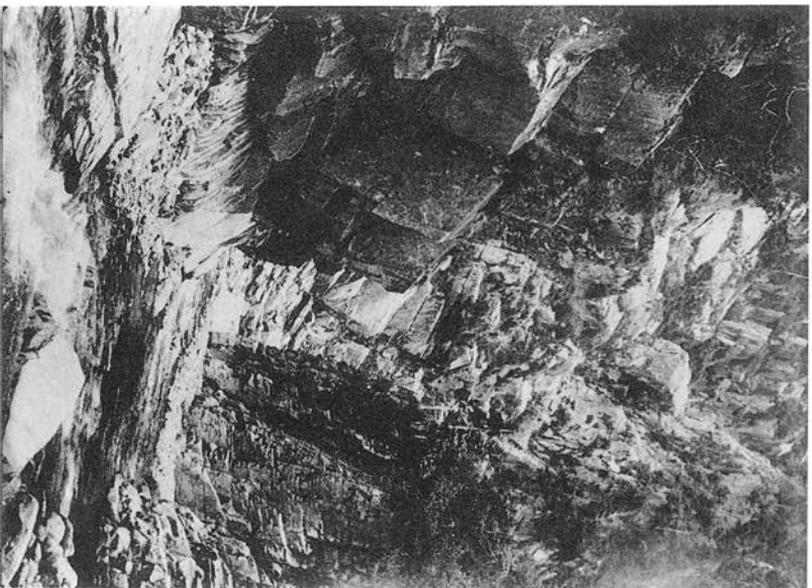
前途を阻れてもう一步も先きに行けぬ様になつた。此處(G)は丁度赤牛岳の北稜二二一〇・四米の三角點の少し上手約二三〇〇米の附近から西方に分派せる尾根の突端に位して居て標高は約一五七〇米であつた。冠さんも赤牛から来た尾根先きが悪いらしいと前から言つて居られたが成程此處で右岸は行詰つて仕舞つた。

兩方から大きな岩壁に限られた其の間では本流は深い澗を爲して居て半丁ばかりも續いて居る。そして兩岸の岩壁は其の裾に僅かの餘裕も残さずいきなり深みに大戸を立掛けた様に澗の側面に接して居るので幅もなか／＼廣い。此の澗の上手で流れは壁に逸れて右岸の岩角の背後へと隠れて居る。左岸上手の大岩壁が行手を塞いで聳々として高くそゞり立つて居るのは丁度、黒ビンカ直下の悪場と相似て居るが、此處では黒ビンカ直下の様に眞正面から其の壁を見ずに流れが一旦左に轉じ又少し右に戻つて居るらしいので、此の大壁も斜めに見る事になる。

上手の大岩壁と其の水際近くにある岩塊とは日光の直射を受けて白く光つて居るが、此の澗は右岸から覆ひ掛つた岩壁に遮られてまだ日が當らない。對岸は矢張、水に洗ひ晒された花崗岩の眞直ぐな岩板で逆層になつて薄い板狀に重なつて居るが、其の角がとれて圓味を帯び其處此處から小さい乳房の様に其の一端が垂れさがつて居る。また上の方では岩の割れ目から水が浸み出して幾條と無く黒い條痕を岩面に染め出して居る。

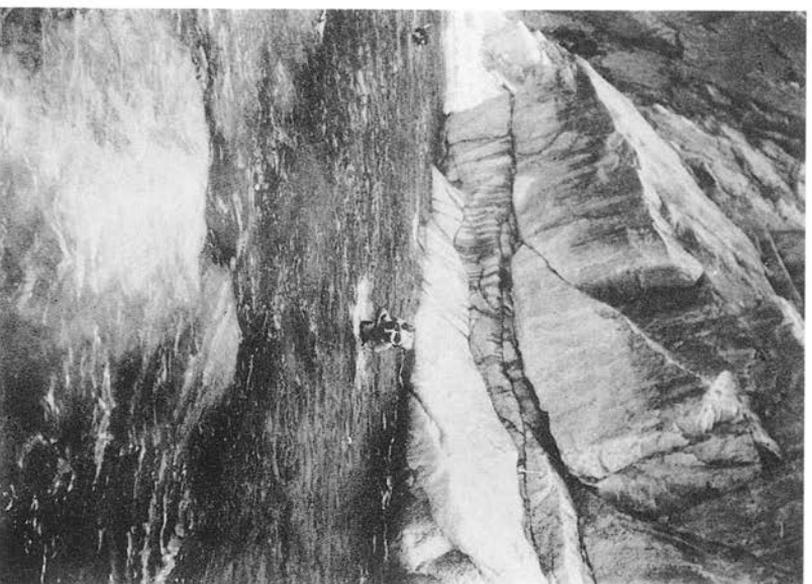
右岸の方は左岸よりは幾分しましたが、岩傳ひに行く事等はとも及びもつかぬ。此の澗の下手の右岸に少しばかりの河原があつて其の背後には細いガレ谷が掛つて居るので、その急な片岩、堆石の斜面を米谷と老野口の兩人が前途を窺ふべく登つて行く。一同は河原に荷を下ろし兩人が先きを見届けて歸つて來るまで待つ事となつた。

河原の石に腰を下ろして前面の澗を見遣ると、水はその面に縫れ合ふ無數の波紋を描きつゝ青く且つ碧に澄み切



渡河谷と金作谷との間の立壁（其四）

岩永信雄氏撮影



渡河谷と金作谷との間の徒渉（其六）

渡邊 漸氏撮影

つた其の水底では重たげに然かも力強く後から後からと絶えざる流れの動きが押寄せて來るのである。下流を顧ると澗から脱け出て來た其の水は今まで抑へられて居た其の壓力を放散しつゝ岩角に飛沫を擧げながら疾驅して遂に流れは左の方へと折れて見えなくなる。右岸の壁は日射の關係で薄暗く、大小の岩塊が不規則に露出して、丈の小さい木が此れを點綴して左岸上手の大岩壁とはまるで異つた感じを與へる。

二人が偵察に出掛けてからもう一時間になり、何れにしても晝食が濟んでからでなくては此處を動く事は出來ない様になつたのでまだ少し早かつたが兎に角晝食をしようと言ふので焚火を初め、辨當の蓋を取る。雑談に興じながら飯を食つて居ると何だか人聲がした様だ。もう直き二人が歸つて來るのだらうと背後のガレ谷の方に向つて此方からも應答する。

然し尙暫らくすると叫び聲が上の方で無しに谷の方でするらしく思へる。それで一同上流の方を見て居ると其の左岸に當つて二人の姿が現れて來た。皆食事もそつちのけにして二人の行動に注意して居ると暫らく様子を窺つた後、左岸から中流にと岩傳ひに來て、其處から澗の中に降り立つた。泳いでも來る積だらうかと思つて居ると、二人並んで杖を横にしてそれを互ひに握りながら水の中を自分達の居る方にと進んで來る。段々に深くなつて背の低い兩人は胸邊りまで水に浸つて肩から上だけが出て居る。然しそれは僅かな部分であつて又段々に淺くなつて、其の勇敢さに感嘆して居る自分達の前まで遣つて來た。

前途の様子を聞くと兎に角大體に行ける見込はつけて來たさうで、自分達は之れを聞いて大いに喜んだ。ガレ谷を上つて行き、高廻りをしてそれから降りようとしたが降り口が無いので大いに困難したさうで、左岸に瀑のある

澤がある對岸の邊りをやつと谷に降りて、それから尙暫らく先の方の様子を見て引返へしたのださうだ。

深く背丈も立たないだらうと思はれた澗が案外に淺かつたので、不愉快な高廻りをして東信道に出る必要も無くなり此の儘谷傳ひに行けるのだと思ふと大いに嬉しい。

二人が出掛けてから歸つて来るまでには一時間二十分ばかり掛つたが、晝食を終へ準備を整へて愈々徒渉に掛るまでには更に一時間近い時を費やして正午になつた。

深い徒渉(Ⅴ)なので衣類を脱ぐ、然かし肌着をつけて居た方が水當りが少くていゝだらうといふ人夫の意見に従つてシャツと猿股だけは身に殘して、素足に草鞋を穿き衣類は頭に手拭でくゝり付ける。さて山本を先頭に人夫が二三人之れに従ひ、自分達がそれに従つて一列を爲して水の中を流れに逆らつて進む。深さは次第に増して来るが、幸に流れが緩慢なので徒渉夫れ自身には大した困難は伴はない。若し之れでもう少し水量が多いと地形の關係上流速はすつと増加して徒渉は不可能になるらしく思はれた。

自分達は僅々一二寸の水深の差が徒渉に際しては如何に其の難易に關係するものであるかを屢々經驗した。

長次郎は、萬一の場合には流れて來た者を助けようとして後に残つて居る。普通の徒渉では流を横に越すか乃至は斜めに越すのであるが此の徒渉は縦に越すのだ。兩岸の岩壁は取付く島もなく流れを其儘に溯つて、先刻米谷、野口の兩人が其處から水に降りた中流の岩に達しようといふのである。次第に水深が深くなつて股に達し腰に達し腹に達し胸に近くなる、然しそれ以上には深くならず、また少しづゝ淺くなり初める。もう先頭の山本は中流から右岩の方へ寄つた三角形をしたその岩に達してこれに取付こうとする。遠くからは極く小さい様に見えるが近づいて見

ると可成に大きい岩で頻りにこれに攀ぢ登らうとして居るが水に磨がれてつる／＼と光つて足場手掛りが全然無いので流石に憚憚な山本も之れには手こずつて居る。杖を横にしてぐつと岩に壓しつけそれを足場として上らうと二三回繰返へして居る中に、杖が流れたりする。こんなに手間が掛るのは豫期しないで彼等の後から續いて來たので水の中で立往生して寒さに慄へながら後を振返へると岩永さんが自分よりは深い所で立止まつて居られる。更に其の後の方では一番深い邊りで停滞して居る人夫も居る。冠さんと別宮さんはまだ水に入らないで先が行ける様になるのを悠々と待つて居られるのが水の中にある身には羨ましい。

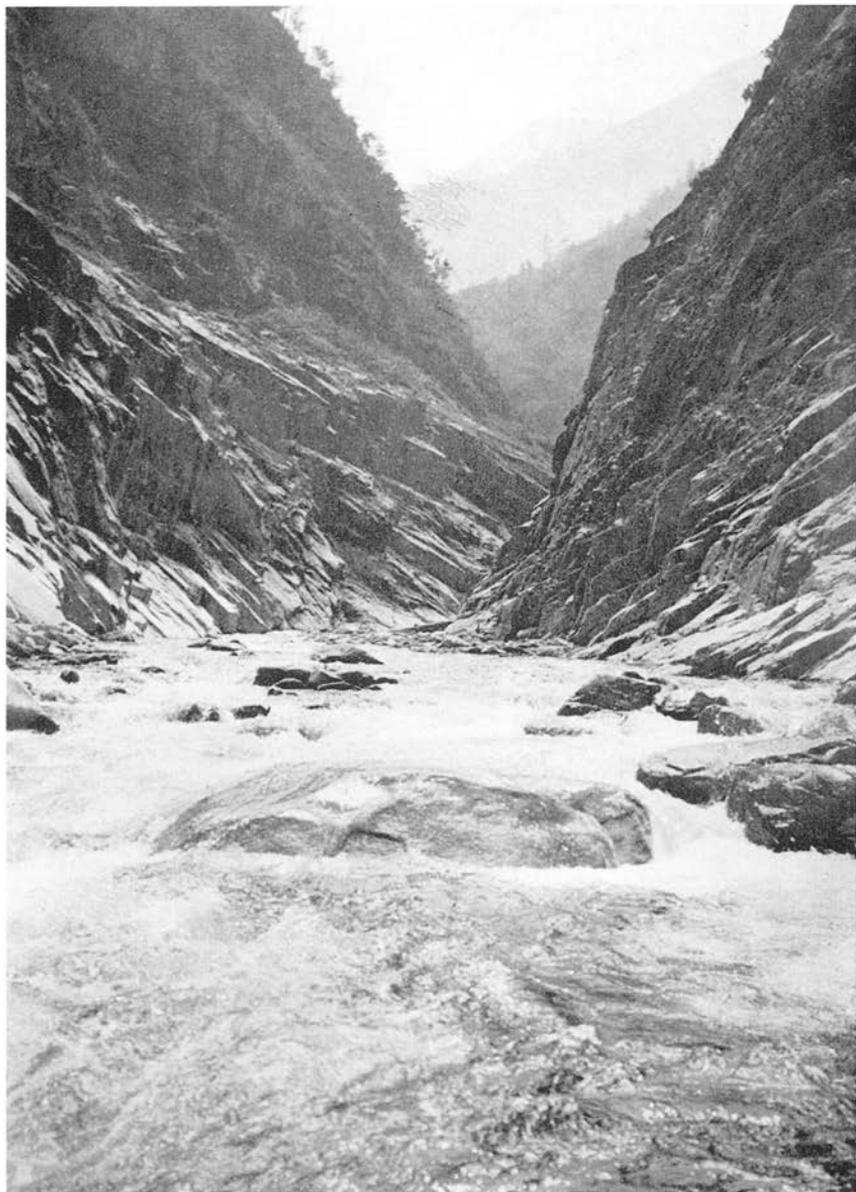
其の中にどうやらして山本が岩の上に登つた。一人登れば上から手を借して引張るので大分樂だ。こうして順々に其の岩に登ると、其處から左岸に掛けては淺瀬以至極簡單に行ける。流水は其の大部分が例の三角形をした岩と右岸の岩壁との間に向つて注ぎ落ちて其處から漕に移るのである。此の漕、人夫達の言葉借りて言へば此の「ドブ」は長さが二十間ばかり幅が五間足らずで、自分達が涉つて來た一番深い所は三尺六七寸ばかりあつた。然し之れは何も其の漕全體中での最深の個所ではなくて、一番の淺瀬を選つて來た自分達に取つて最深の個所に止まる。

左岸に辿り着いて衣類をつけてさてゆつくりと涉つて來た其のドブを見直ほす。右岸の岩壁は下流からは其の一角しか見えなかつたが此處から見ると大きな船舶の舷側とでも言ひ度い感がする、或ひは又、大象の背中が水に面してのし掛つて居ると言ひ度い。水に洗ひ晒らされても眞白ろには成らずに灰色をして居る地肌には、其の表面を傳つて滑り降ちる水滴の痕が黒く軒端に映る氷柱の影の様な模様を残して居る。もう正午過ぎなのに此の壁は相變らずに日光の直射を受けず、此れに相對した左岸の、流水にその節理を圓く削り去られた岩壁のみ眞白く光る。

河原には大きな花崗岩が幾つも蟠居して、其の一つの上から上流を望むと、谷は兩岸から急傾斜をした岩壁に依つて界せられ、落差が相當強くなつて來た。右手の岩壁の一部からは瀑らしいものがちら／＼見えて居るが此れは二人が話してたものらしい。

自分達が今立つて居る左岸の背後は例のすばらしい大岩壁で、樹木の殆ど無いその岩面には縦横に無數の細かい線が描かれて、其の角に觸れたら指先が切れるだらうと思はれる位に堅い鋭い岩層の節理が示されて居る。丁度徒渉を終つた少し先の所では大きな割れ谷が一直線に深く喰ひ入つて居る、そして此れは奥の方で大きく二つに岐れて居るらしく思へた。地形圖では澤の落口は尾根の上から見て大體想像で入れてあるので、それが誤まつて居るのは當然で其れを準據とする事は出来ないが之に反して尾根、殊に三角點のある附近では正確である。此の割れ谷も恐らく間山(二五八五・二)より來れるものでその落口は地形圖に示せるより二分ばかり南に偏して居るものらしい。

岩壁を見上げた眼で透き徹つた青空を眺め遣ると、その空高く嵩でもあらうか羽を擴げた大きな鳥が谷の上を飛んで居るのが見える。随分高い、あんなに高くから此の立派な廊下の谷を見降ろしたら何んな氣がするだらう。谷の上が一番氣に入つたらしく何時までも同じ處を舞つて居る。大きな花崗岩の表面は日光の直射で暖かくなり、其の上を濡れた草鞋で踏んで行くと、また／＼間に乾いて仕舞ふ。左岸傳ひにこうして岩から岩へと傳つて行くと、その中に岩壁は水際に迫つて來て左岸は行きにくくなる。此處で右岸に移らうと野口は流れの程まで出たが行けさうもないので又戻つて來て、左岸の岩壁をへつる事にする(H)。黒味を帯びた逆層の岩場で、殊に其の水際はつる／＼して足場が悪いので岩の隙間にピトンを二本打込んでロープをそれに張渡して通過する事になつた。ロープを



數河谷と金作谷との間(其八)

岩永信雄氏撮影

渡してそれを頼りに進むと至極簡単に此の悪場も済んで寧ろ呆氣無い位だが、そのロープを張るまでの人夫達の勞力は並大抵のものでは無い。

右岸は典型的な節理を示す岩壁で其の逆層を爲した疊々重々たる黒光りのした岩面は谷に向つて放射狀に擴がり、左岸は例の大岩壁の繼續で其の高さは次第に減じたものゝ傾斜は更に減じやうとせず、右岸と同じ黒味を帯びた逆層の岩面が眞堅てに水際まで切落されて居る。

兩岸が相呼應して鋭い岩角を刻み、飽くまで堅い岩の砦を築いて、それを削り去らんと夜も晝も絶えざる努力に執着して居る水の力に頑として應じようとせず毅然として屈せざるその高き誇を今、自分は目のあたり見る事が出來た。然し又其の間を滔々として流れ行く水には又別の意味がある事を知つた。永遠に老いる事を知らぬ水はまだ年若い上廊下の岩壁の様に己れの意思を己れの姿に反映させて毅然としてそゝり立つといふ事はせず、黙々として謙讓なる氣持の許に、低い方へ低い方へと志さすのであつた。水の凄まじさ、水の力強さ、之は水自身の意思では無くて、之に反抗するものの發する言葉である。それは岩壁の發した言葉であり、人間の發した言葉である。水自身は何時でも同じ氣持で、只その低きに赴かんとするつゝましい意思を遮へぎるものが滔々たる響となり、漠々たる沫となる。自分達はそれ故に水の姿の千變萬化の其の結果は一に水の謙讓さから出發せるものなる事を知り得るのだ。

流れが右に曲つた其の角を越えたと右手の岩壁からは先程その一端を窺ひ得た瀧が掛つて居てその直ぐ下手の所で右岸へと徒渉する(Ⅲ)。此徒渉を終つた點から(Ⅰ)對岸を見ると、瀧は約三十米ばかりも上から岩壁を傳つて落

込んで居るのであつて、黒い岩の面に白い絹糸を或ひは束ね、或ひは解きほごして何本となく垂れ下げた様である。此の澤は薬師の北稜二八三五米の稍々北に其の源を發するものの如く、それより略々東に向つて一直線に降つて來たが此處まで來て此の左岸の鋭い堅い岩壁を貫く事を得ずに、こうして其の面を傳ひつゝ本流に合するのであつた。斯る場所では水は其の岩壁を次第に浸蝕して深い窪みを刻み、遂には割れ谷を爲すのが普通であるのに、此處では岩が餘りに堅い爲、そしてまた谷の年齢が若い爲、水は止むを得ず其の表面を滑り去るのに止まつて居た。

右岸の岩壁の裾を、流水に洗はれて白く磨きを掛けられた水際近く、或ひは又其の壁際の青く淀んだ瀬の中をぢやぶ／＼と涉りながら進んで行く。米谷、野口の兩人が先を見に行つて高みから谷へと降つたのは此の邊りださうだが何處を見ても降れさうな處は見當らない。逆層のつる／＼岩で其れには木も何も生へて居ないので、一體どうして降りたのか一寸想像が付かない位だ。

下流を顧ると左岸割れ谷の背後の岩壁が高さ三百米もあらうか、聳々として垂直に近い傾斜を示しつゝ谷一杯にそゝり立つて居る。其の手前には例の瀧の澤が白く岩角に飛沫を擧げて居て、正面から見た時にはその高さ三十米ばかりと思つて居たのに、此處から見るとまだ其の上にも瀧が掛つて居たのだ。此の邊一帶の左岸の大岩壁の露出は下流の「黒ピンカ」のそれに比して優るとも決して劣らぬもので、此れを「黒ピンカ」に對して「上の黒ピンカ」と稱する事にした。

先刻の深い徒渉點から此の邊りに掛けて廊下の眞髓は遺憾なく發揮され、雄峻なる大岩壁の連續に、滔々たる奔流の疾驅落走に、窮險此處に盡きると共に、透徹せる澗潭の快麗の美に、錯綜せる轉石の布置に、優達なる溪趣は

其の限りを盡して居る。

此の中廊下の核心、更に大きく言へば上廊下の核心に觸れる事の出来た自分達は限り無き喜悅と陶醉とに没りきつて永い間のその憧憬が充された時の快さを染々と味ふのであつた。自分は此の時の憶ひ出を恐らく一生忘れる事はあるまい、今こうして筆を置いて靜かに眼を閉ぢると先づ第一に目の前に浮んで来るのは此の時の映像に他ならない、そしてその中では自分は谷の音を聞き、谷の香を吸ひ、心ゆくまで澄み渡つた大空を仰いでは谷間を目指して落ち來つた日の光を面に受けるのである。

上手を見ると流れが左に折れる手前の所で對岸にはもう一つの瀑が掛つて居て、自分達はその下手まで來て右岸から左岸へと斜めに谷を横切る。此の附近では瀬もさう強くない上に、比較的淺いので徒涉(Ⅷ)は至極簡單に終つて瀑の直下に達する事が出來た。此の瀑は前の瀑とは違つて岩から直接に下に落ちて居て、瀑の下はザラ／＼した石の破片が堆積して居る。其處では岩壁は窪みを爲して割れ谷狀に瀑に相當して喰込んで居る。高さは二十米ばかりもあらうと推定された。此の澤は矢張二八三五米附近から發するものらしく地形圖に此の澤が金作谷と其の落口附近で合する様に記してあるのは明かな誤りで、金作谷には斯る澤は合して居ない。此れは須らくガレの記號より更に二分ばかり北で本流に出合ふ様に訂正すべきである。

左に折れた本流は此の少し上手で兩岸から眞直ぐに切立つた岩壁が迫り、其の間では深い／＼澗を爲して居て、此處ではどんなに減水しても谷傳ひには通過は出來ないらしい。左右兩岸の岩壁は大して高いものではないが角がとれた大きな岩の塊りで一寸手のつけ様がない。其れで瀑の左手の壁を攀ち登つて高廻り(Ⅸ)をする事になつた。

○黒部川 渡邊

六〇

米谷が空身で眞直ぐな岩壁の割れ目に沿つて登り初める。岩が乾いて居れば大分助かるだらうが何しろ瀑の直ぐ横手で岩が一面に濡れてぬる／＼して居るので流石に彼も仲々さう簡單には上れない。手掛りの少い岩の割れ目を一生懸命になつて登らうとして居るのを下から見て居るとはらく／＼する。やつとの事で彼が登り切つたので上からロープを下げて、人夫が二三人それに掴まりながら上に登る。その次ぎには荷物が引上げられてそれから自分達が登る事になつたが、ロープを片手に便りとしながら足場手掛りを求めつゝ登るよりは一層引上げて貰ふ方が時間の節約が出来るので、「貴重なる荷物」となつて二十米近く引揚げられたが、如何なる山の本にも斯る技術は書かれては居ないので笑ひを耐へながらロープに結ばれる。上からは調子に乗つてぐん／＼引上げるので途中でもう少し緩つくり遣つて呉れと悲鳴をあげる始末だ。さてこうして引揚げられた所は一寸した岩棚で其處から尙少し岩を登ると上は狭いながらも平たい草原を爲して居て最後の者が引揚げられるまで草の上に腰を下ろして待つて居る。

行手を見ると、眼下の深い澗の處で左に折れた本流は其れから少し先で右の方に曲つて居て、左岸の方は其の水際近くには河原を残しては居るが壁はまだ續いて居る。右岸の方はよく見えないが岩は左岸程に高くはないらしく鬱蒼たる森林が可成下まで降つて来て居る。下流を見ると疊々たる兩岸の逆層の岩壁の間に當つて遙かに木挽山が望まれた。先刻まで雲一つ見えずに澄み渡つて居た青空が此の頃から次第に曇り出して、水面は明るい中にも一抹の鈍さを漂はせて來た。

米谷、野口が午前中に見届けて來たのは此の少し先まで、あつて、此の草地から草崖の間を分け、背の低い灌木の枝を頼りに少し登り氣味にへつる。暫らくがさ／＼と進む中に、左岸の水際からは大分隔つて來て丁度其處で本



數河谷と金作谷との間(其九)

岩永信雄氏撮影

流に合して居る割れ谷の上に出る。下に降りられる見込みがついて長次郎がロープを小さな白樺の幹に掛けると人夫の一人がそれを傳ひながら岩壁を降りて行つた。木がぐつと撓んで、長次郎は其れを確りおさへながら下に降つて行く人夫と何やら大聲に話合つて居るが其の中に下に降り切つたので其の後から三人の人夫が降り、自分達が降りる番となつた。此のアップザイレン(K)は三十米ばかりあつて、それにロープが比較的新しくて滑らかなので注意をしながら降つた。ロープが終つた所から尙暫らく岩角に足場を求めつゝ降つて、割れ谷のガラ／＼した岩の破片の堆積に達した。此の割れ谷には水は無かつたが或ひは此の堆積した片岩の下に伏水として存在して居るのかも知れぬ。何しろ多人數の事として此の高廻りの爲に二時間に近い時を費やしたので今日の中に「立石」まで行く事は難しくなつて此の先の金作谷の落口で泊る事になりさうだ。自分達が其の水際を通る事の出来なかつた所を上手の此處から顧ると、水に浸蝕されてその岩角を失つたつる／＼の岩が兩岸に蟠居して居るので、其左岸のもの水面近くには鰻頭を五つばかり重ねた様に岩層の一部が削り残されて居るのが目を惹いた。先程まで續いたあの岩層節理の生々しい、兩岸から其の鋭さを競ひ合つた岩壁は其の姿を潜めて谷は次第に其の相貌を變じて來た様に思はれた。

左岸の河原傳ひに暫らく進むと、谷はまた急に右に曲つて前方の溪觀は俄然一轉する。兩岸の尾根先がすつとなだらかになり岩壁は著るしく低くなつて谷は非常に明るさを増し、空には可成雲が濃くなつて來たにも拘らず自分達は先刻の晴々した氣持に又立ち歸る事が出來た。今まで黒味を帯びて居た岩の面が此處では赤味を帯び、兩岸の岩層は水平に走つて、見るからに氣持のよい直角の段階を築き上げて居る。函状の谷と言ふ言葉が許されるならば此れは恐らくそれに相當するだらう。北海道の谷に屢々見る「ハコ」と言ふものはどういふものかを知らない自分

は其れを正しく理解し得ないが察する所、これに近いものではあるまいか。左岸の方には少し先で瀑が掛つて居るが、これは高さは十米も有るか無しかの小さいものであつた。

此處で右岸へ徒涉(Ⅴ)をしたが深い上に瀬が中々速いので人夫の手を借りて涉り終つた。此の所で右岸に瀑のある水の多い澤が合して居るが此れは相當大きいらしい。これから右岸の其の幾何學的に積上げられた段階に沿つて或る時はナメをへつり、或る時は淺瀬を涉り等して行くと、更にもう一つ右岸から澤を合はせ、先刻見えて居た左岸の瀑のある澤を對岸に見てその函狀の谷もやがて終つて、兩岸はザラ／＼した砂礫の斜面となる。右岸の方は段丘(Ⅰ)を爲して居て、水から離れて其の上に登つて見ると青く茂つた山裾はずつと背後に退いて東信道が其れを縫ひつゝ次第に降つて來て居るのが見える。行手に當つては金作谷の上手の尾根が縁に包まれて薬師の頂點から悠々として延び來たつて空を限つて居る。金作谷の下手の尾根の突端は岩壁を露出して居るが其れは直接に水に接せず、其の間に廣い砂礫の段丘を挟んで居るので、泊場を其處と定めて、又、水際近くまでザラ／＼した斜面を降つて行き、今日の最後の徒涉(Ⅴ)を終つて左岸の平たい河原に達して荷を下ろし露營(Ⅵ)の準備に取掛る。

薬師岳頂點直下と岩井谷ノ頭直下との二つのカールに其の源を發し相合して此の泊場の直ぐ上手で本流に終る「金作谷」は地形圖に依つてのみ其の大きさを推察して居る人々には其の豫想外に堂々たる闊達なる谷の容貌は想像され難いであらう。此の谷は大正十一年の夏、我が山友、今西、西堀の兩君が大山村の宮本金作を先導として降つたのが最初であつて(山岳第十七年第二號五〇頁參照)、今はとき彼の名を永遠に止めんが爲に「金作谷」と稱するのである。尙此の機會に一言すべきは此の谷は「黒部號」(山岳、第二十二年第二號)の中には冠氏に依つて「ヤ

クシのカール澤(一五〇頁)と稱せられ、更に同氏の著書「黒部溪谷」の中には「金作澤に就いて」(五五頁)なる一項があつて「金作澤」と稱せられて居たが、黒部川左岸の越中側の支流の稱呼を其の土言に基き可及的に「澤」より「谷」へと戻して、其の統一を圖らんとする今日、此の谷も「金作澤」より「金作谷」へと改められた次第だ。

此の泊場からその落口の方を見ると、其處は一面に残雪の堆積で本流を隔てた對岸にまで達して居る。此の偉大な雪の押出しは其の表面は岩石の破片や土砂で掩はれて一見雪とは思へないが其の水に面した厚みのある断面が白い冷い肌を示して居る。此の雪は年に依つて一定しないらしく、自分の知れる限では大正十一年十三年には落口附近には全然残雪の堆積がなくて、此の谷は其の落口ではガラ／＼した岩ザクの堆積で荒涼たる有様を呈して居るのは「黒部號」に挿入された寫眞(對一八二頁)によつても明かであるが、大正九年、昭和三年、四年には著るしい残雪で本流に雪橋を掛けて居る状態だ。然してこの様な變化は此の残雪が單なる積雪の堆積に據るものではなくて頻々として繰返へされた雪崩の産物である事を如實に物語つて居る。従つて其の冬の雪量如何よりは、寧ろ雪崩の要素たるべき、日射、降水、風等の量的關係、其の相互間の比例、及び其の配列の状態に據る事が多い。であるから例へ積雪量が例年に比して非常に多かつた年でも雪崩が少なくて、雪がその積つた斜面で徐々に消失せたとらば、落口附近に雪の押出しの堆積は見ないであらうし反對に積雪量が少くてもそれが悉く雪崩れる様な場合には其の反對の結果を見るであらう。

今まで「金作谷」にばかり熱中して居た頭を暫らく後に戻して徐ろに下流を眺めると、あの偉大な立壁は見えずに、緩やかな尾根の背後に數河の頭がもつくりと持上つて居るのが望まれた。まだ四時にはならないし、曇つて居

た空も先刻からまた晴れ渡つて來たので總ては明るい感じに充ち満ちて、此の儘此處で泊つて仕舞はずもつと先に進み度い氣持さへ起つて來るが、心にはさう思つても、肉體はもう大分疲勞して來て言ふ事を聞かない。

今日は廊下中での一番優れた所を過ぎて來たので、赤飯代りに餅米を炊いて吾々の恵まれた幸福を祝つた。腹一杯に食ひ終ると、早々に天幕に入つて疲れが出て來た身體をぐつたりと横たへる。

中廊下の核心と呼ぶべき其の溪觀が吾々の豫想を裏切らなかつたばかりでない、想像以上に堂々たる、引締つた緩みの無い溪谷の相を示して呉れたので流石は黒部川であると感嘆した。そして吾々が人工に接しない、否それ所か人間界とは遠く掛離れた其の神秘の境を心ゆくまでさまよふ事を許されたのは天と人と二つながらに全きを得た爲であつた。御山谷の小屋に一泊した日に驟雨があつて以來、雨といふものは一寸も降らうとしなかつた。若し此の二三日前に雨が降つたとしたら例へ今日の日が快晴でもあの廊下を通過する事は不可能だつたに違ひ無かつた。また一行の心は堅く結ばれて完全なる一致にあつた事を忘れてはならない。人夫は初め下廊下に行く積で澤山に連れたが、上廊下の方ではそんなに澤山は要るまいと思つたので「平」から一部は歸さうと言ふ意見も出たが、長次郎に従つて其の儘全部を上廊下まで伴つた。そして人夫が吾々の目的の奈邊にあるかを察知して一生懸命に働いて呉れた事は本當に嬉しかつた。そして其の一例として次の挿話を掲げる事が出来る。此の日の晝頃米谷、野口の兩人が先を見に行つて、歸つて來る途中、老野口は米谷に向つて、「且那方の首にロツブつけて引張つても此のドブを見せんにや。」と言つたさうだ。そしてあの深い徒渉點を着衣その儘でずぶ濡れになつて上流から二人竝んで降つて來た時の事を、後になつて「あの時もつと深かつたらどうする積りだつた？」と尋ねた所、「深くなつたら泳ぐ

積だつた」と笑ひながら兩人は事も無げに答へるのであつた。自分達の眞意を察知し得ない人夫、金さへ貰へばどうでもいゝ人夫、若し彼等がかういふ類に屬したとすれば彼等は何も非常な危険を冒かしてまで、右岸の岩壁を降つて水面に達する必要も無かつたらうし、また、全身すぶ濡れになつて其がどんなに深いか分らない徒渉をする必要も無かつたので、只「先は降りられない、徒渉は出来ない」と告げて、吾々を東信道にまで引張り上げれば足りたのだつた。どうにでもして、其處を見せよう、例へ自分達はどんなに骨が折れても、其處まで連れて行こうと言ふ眞實に溢れた彼等の心根は、本當に有難かつた。彼等の眞心を黒部を通して明かに知る事が出来ただけでも、自分はこの谷旅に満足してゐるのであつた。

二十八日。

數河澤落口下手ノ泊場。午前五時四十五分。氣壓六三一・八耗。天候曇。殆ド無風。氣温一四・三度。水温九・七度。

泊場發(前七、三五)(曇)——數河澤出合(七、五七)(曇)——赤牛尾根突端(九、五〇)——一二、〇〇(快晴)——大徒渉(一二、〇〇

後一二、二〇)(快晴)——ロープ場(一二、三〇)——一、〇五(晴)——高廻り(一二、二〇)——三、〇〇(曇)——金作谷落口下手左岸の泊場(三、四〇)(晴)

金作谷下手泊場。午後四時。氣壓六二五・八耗。天候晴。無風。氣候水温共ニ不詳。

八 奥廊下

最初の考へでは此れから奥廊下を経て源流を窮め、其處で一行は二分して一つは双六谷を降り他は高瀬川を降る

○黒部川 渡邊

六五

と言ふのであつたが、さう大した困難もあるまいと思はれた中廊下の岩壁は以外に堅固で人を近づけ難い有様であり、豫定よりは大分日程も遅れて來たので、九月一日にまでは是非とも歸らねばならぬ岩永さんは到底源流まで溯る事は出来なくなり、それに別宮さんもさう緩つくりはして居られないと言ふので二人は薬師澤の落口から薬師岳、岩井谷を経て眞川を降る事となり、日數の餘裕が少しある冠さんと自分とは源流まで溯り、更にオクノタル澤を下つて再び立石に戻り薬師澤、薬師峠、有峰を経て歸る事に昨夜相談が纏つて一行が一緒に歩くのは今日が最後の日となつた。餘りに上天氣續きなのでもうそろ／＼雨が降る頃なのだが天は相變らず我等に幸して今日も亦快晴で雲一つさへ見えない。雄大な岩壁の露出も影を潜め、疾駆する流水の躍動も收まつて、蒼々たる樹木靜かに深淵に影を宿し、皎々たる麗壁、清流に其の細膚を洗ふと言つた趣の奥廊下を將に辿らうとする自分達は徐ろに其の第一歩を踏み出した。

泊場を後に河原を降つて水際に近づき、直ちに第一回の徒渉（二十九日のI以下之に準ず）をして右岸へ移る。そして残雪の上を少し高みへと登つて行く。此處(A)は丁度、金作谷の落口の對岸に當つて居て今年の様に残雪の堆積が著るしい場合には此處に泊場を求める事は出来ないが、落口に雪の無い夏には此の邊りは一面の草地で恰好の露營地となる場所だ。

落口の所では残雪は本流に雪橋を掛け渡し、其の續きは更に上流に向つて一町餘りも擴がつて恰も全流を暫らくの間蓋して仕舞つた感がある。八月ももう月末、二三日で九月にならうとする今日、此の様に廣大な残雪の擴がりを見て自分達は奇異の思ひを抱いた。落口から延び上つた闊達なる谷の偉容に就いて更に此處に繰返へす必要はあ

るまい。谷は暫らくにして二分し薬師本峯直下と岩井谷の頭へと向つて居るが、其の邊りにはまだ夥しい殘雪が白く光つて居るのが認められた。落口の左岸を扼した岩壁はまだ日が射さないので黒く聳えて居たが、谷の奥は已に朝の光を斜めに受けて尖々たるカールの周縁を築ける岩峰が青空の下にくつきりと浮び上つて居た。地形圖には落口の所で二分して居る様に記してあるので、注意して觀察したがそれらしいものは全然見當らなかつた。これは更に北の方で直接本流と合して居るものであつて、金作谷は頂上直下のカールと岩井谷の頭直下のカールとのみ源を發して居て、其の相合するのは略々地形圖に示された邊りであるが、其れから下では支流の合するものは全く無し。

本流の殘雪に埋められた邊りから廊下が初まつて居て、暫らくして右に逸れ南々西に向つて、尙も續いて居るがそろ／＼先を急ぎ出した上に、是非とも其の水際を行かねばならぬ程のものでも無いので少し上の方を通じて居る東信道に合して、その荒廢し切つた細徑を行く(B)。

左手の岩壁から岩傳ひに水が流れ落ちて居るが上の方を見ると白い煙があがつて居て、温泉でも湧き出して居るらしく見えた。道は次第に登り氣味となつて草原の斜面を絡みつゝ進んで行く。此處で本流は大きく右に轉じ、立石へと降つて來て居る薬師の南稜が相變らず兀々たる岩角を其の背後に峙てゝ居るのが間近く望まれる。

眼下の廊下は水平に走る節理を示して居るが、此の節理は同じ水平でも金作谷の下手で昨日見たものよりはすつと細密であり、且つ岩面も黒ずんだ肌合を示して居る。兩岸の岩壁はさう高くはないが略々垂直に近い角度で水面へと近づいて居て、其の水に接する邊りには水量の多くない今日では幾分の餘裕を残して居る。まだ此の廊下の中

○黒部川 渡邊

六八

へは日が射さないので暗い感じが漂つて居た、少し先で流れが左に轉ずる邊りで其の左岸をなして居る森林が、此の廊下の奥に當つて、日の光を一杯に受けて粲々として輝いて居るだけに其の對比は強かつた。

少し行くと左手から岩の表面を傳つて四段になつて落ちる瀑の澤が入つて居る。此の瀑は相當に高さもあつてその落水が岩角を叩いて沫をあげて居るのを仰ぎながら自分達は其の直下で此の澤を横切つた(C)。これは先年冠さんが廊下を降られた際、此の上手の所を高廻りされた後、下られたもので(山岳二十二年二號二〇頁参照)あつて、其の時には日が輝やくと五彩の光りを放つて仲々美しく見えたさうだが今はまだ朝で背後の尾根が日の光を遮へぎつて居てかゝる美しさは味ふ事を得なかつた。道はもう水面から四五十米も高い所を行く様になり、直下に見えて居た廊下から次第に遠ざかつて落葉松や梅の生ひ茂つた尾根先を大きく迂回して次の澤へと絡んで行く。そしてそれから略々水平に谷の奥の方へ進んで行くと、やがてその支流の水面と同じ高さになつて此處で道は此の澤を越す(D)。

此の澤は赤牛岳の北稜二八〇〇米附近に源を發して居る大きな澤で、此處から上手を窺ふと、天空は明るく此の谷間の奥に開いて居て、悠々たる大澤の相を示して居る。然かし此の澤もその落口は瀑になつて居て、其處ではゆったりした感じは與へられぬらしい。自分達が今、越して行く邊りは一面に平たい岩板で水はその上を縦横に浸して草鞋の底をびしゃ／＼と濡らす。此れを過ぎると道は尙も登り續けて、もう本流の様子等全く分らない様になつて皆はそろ／＼不平を起こし始めた。ほんの暫くの積で辿つた此の道、またこんなに谷筋から離れようとは思はなかつた此の道がこんな状態なので早く此れから脱して水際に近づこうといふのだが、どうにもならない。登り切つ

た所は一つの尾根先で此處は一寸した峙らしい所で、前方には赤牛の一角と、黒くびつしりと茂つた雲の平の北側とが樹間に望まれた。此處から道は次第に降り氣味となり、廊下を脱して略々南に其の方向を轉じた本流へと近づいて行く。此の降りは丈の高い笹を分けて行くので、左半身は忽ちにしてびしょ濡れになつて仕舞つて、また此處で東信道に對する非難は高まつて、皆もう懲りぬだと言ふ。自分は冠さんが東信道を前からいたく非難して居られるのを聞いてそれ程ひどくはあるまいと考へて居たのだが、今、それを辿つて見て冠さん以上に強硬な意見を抱く様になつた。東信道の特徴は、谷の美しい、また立派な廊下を爲して居る所では必ずこれを避けて高廻りする事、谷が平凡化して、河原にガラ／＼した堆石のある所では必ず其の堆石の上を行く事、また尾根を巻く場合には一／＼丹念に尾根先を迂回して行く事はせずに、二つ三つの尾根は東にして高い所で一度に越して仕舞ふ事、一度それを傳ひ始めると、それから脱して氣儘に振ふ事は仲々出来難い事等で、その優れた點もあらうがマイナスの方が多し。

道は水際近くなつて來たのに頑として河原に降らうとはしないので自分達はもどかしさに堪へ兼ねて遂に河原を目指して馳せ下つた(Ⅴ)。此の少し先で流れは左に曲つて居て、其の角の所には右岸に一寸した岩壁がある。此の岩の裾を尙も右岸傳ひに行くと、流れは青く淀み、白い漣を立て、悠々として降つて行くのだつた。

暫らくすると堅に岩皺を刻んで居る白い岩に遮ぎられて右岸は行き難くなつたので左岸へ徒渉(Ⅵ)して移つたが流れはさう速くないので石を拾ひながら渡る事が出来た。此の附近は左岸は押出しになつて居て、對岸の右岸の方はと見ると、白い岩の塊の上手には同じ様に堅に節理の走つた赤味を帯びた岩壁が續いて居る。先刻河原に降りず

○黒部川 渡邊

七〇

に其の儘東信道を進んだ人夫達が其の上を徐々に動いて居るのが見える。自分達は長次郎と一緒に尙暫らく左岸を行つて、薬師の頂上の南にあるカールから降つて来る荒谷の出合の手前で右岸へ徒渉(Ⅲ)したが此れは前回のと同じ様な具合に石から石へと飛び移つて餘り濡れないで済んだが、日が高くなつて来てガン／＼照りつけるので、寧ろ水の中を行く方が好ましい位だ。左岸の荒谷は荒涼たるもので、此の谷の下手に左岸に堆積して居た押出しは恐らく此の谷から流出されたものであらう。此の谷の落口は地形圖では黒部川の「部」の所に記されてあるが此れはもつとすと南に移さねばならない。それと同時に赤牛の北稜二八〇〇米附近から發して居る先刻の大きな澤は黒部川の「部」と「川」との間に落込む様に記されてあるが、此れは反對にすと北に移して「部」の少し北で落合ふ様にせねばならぬ。

此の荒谷の落口の少し先で又左岸へと移る(Ⅳ)。そして直射する日光に反映して目が痛い程きらく／＼と蟬やく河原の白い石の間を行く中に、又右手から一つの荒れ谷が來り合する(Ⅴ)。此れは前より更に南に寄つたカールから降つて來るもので此れには相當の殘雪も認められ其の谷自身も前のよりは一段と大きい様に思はれた。對岸を見ると押出しがあるので其の邊りに赤牛側から澤が入つて居るのでは無いかと思はれたが實はこれは、此の荒れ谷の押出しであつて、雪崩の頻々たる時期に對岸にまで達したのが、名残を止めて居るのであつた。

左前方に當つて針葉樹で濃く埋つた大きな尾根が延びて來て居るのが著るしく目を惹いて、一時は立石の尾根ではあるまいかと疑はれたがこれは赤牛の頂きの南方から降つて來た大尾根であつた。従つて其處で本流に合して居る水の多い支流もまだオクノタル澤では無かつたのだ。流水は此の邊りではもう大分穩かになつて、兩岸の河岸近

くまで茂り合つた落葉松の緑の葉末までも其の面に映すかと思はれる位で、眞白ろな河原が青く透き徹つた清瀬にくつきりした境を爲して迫つて居る。もく／＼とした緑の尾根が襟を搔合せた其の間に遙か下流に當つて數河の頭が淡青に彩られてもつくりと其の圓味のある頭を擽げて居た。少し先で右岸へと徒涉(▼)をしたが此處では相當の深さがある上、底の流れも強くて一寸骨が折れた。

先刻對岸に見て居た赤牛からの澤の落口に來て見ると(G)、谷奥はぐつと開けて眼を遮るものとなない。赤牛岳頂上直下西斜面の水を悉く集めて來て居るだけに流石に其の水量も大したもので、頂上直下東斜面の水を集めた口元ノタル澤に匹敵する大澤であつて自分達は之れに「赤牛澤」なる新稱を付する事とした。此の澤は黒部の奥廊下から赤牛へ登らうとする者に取つては興味ある存在で、その途中には大した困難も無い様である。想らくは近き將來に於て此の登路が記載され推奨さるゝに至るのではなからうかと思つて居る。

今まで廣闊であつた本流が此の少し上手で急に兩岸から迫つて灰白色の峽間を築いて居る。そして流水は油の様に重たげに漂つて青く冴え渡り、水際近くでは岩は白く研がれ、圓く角を磨り減らされて其の儘に前途を辿る事は出來難いので東信道に合して、右岸に沿つて高廻りする。

東修道を少し登つて行くと、峽間の上手で流れが思ひ切り左に屈曲して今までの方向と略々反對になるがまた急に右に旋轉して元の方向に戻つて南を指して居るのが望まれた(H)。此處では岩壁は左岸の方が高くてその割れ目から急な小澤が落込んで居るのが窺はれ、また流れは峽間の上手では碧く静まりかへつて幅廣い美しい澗を爲して居る。更に前方を見ると雲の平の一角がもう手に取る様に近い。東信道の癖とてなか／＼河原に降りようとはしな

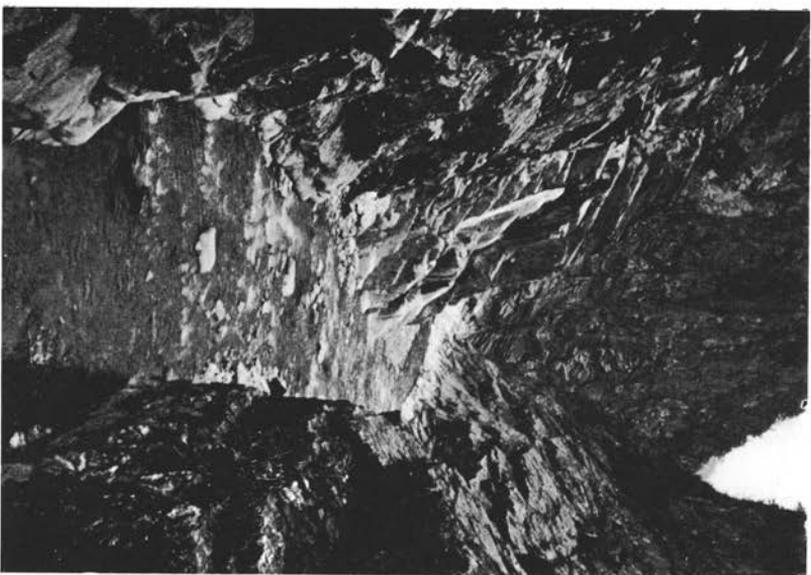
いので業を煮やした自分達は途中から道を離れて河原まで降り、少し先に行つて小憩する(Ⅰ)。

落葉松、樺、檜に交つてクロベが現れ出して兩岸の深い針葉樹林は益々其の光彩を放ち、美しい潭や麗しい岩石が巧みに配置されて奥廊下ももうその中心にまで近づいたらしい。暫らくすると左手から岩の多い澤が合するこれは赤牛澤に比較すると小さいが水量もなか／＼豊富であり谷の奥も廣く開いて居て、相當に大きなものだつた。

右岸では此の先きで始めて岩の節理が逆層から順層へと移つたが、對岸の左岸の方は所々岩面が露出して居る所を注意して見るとまだ逆層の所が多い。前方に黒く茂つた尾根が見え出してから尙暫らく右岸を傳つて行くと、やがて左から大きな支流が合して居て此處が即ち奥ノタル澤の落口に當る立石だ(マテイシ)(Ⅱ)。

奥ノタル澤は二つに分れて本流に合して居るが、その水が流れて居るのは上手の方のものだけで、これは先年冠さんが此處に泊られた時と同様だ(山岳第二十一号第二號一〇八頁参照)。立石の岩小屋は二分した水路の中間に挾れた小さな丘の上にあつて一寸見付け難い。つい今しがたまで岩魚釣が居たらしく焚火の残りがまだ生温かつた。人夫達は荷を下ろすと早速に、奥ノタル澤の落口の上手で水を偲いて、流を乾干して岩魚を獲らうと懸命になつて居るが何しろ今まで岩魚釣が居た事と一匹も獲れない。奥ノタル澤はこれからはんの暫らく行くと大きな瀧が掛つて居るさうだが、自分達はさういふ事は知らなかつたので後になつて残念な事をしたと悔んだ。

本流は奥ノタル澤の落口の直ぐ上手で、典型的なトロを爲して居て、碧く凝つたその水面を限るものは、對岸に屏風を半ば擴げた様に連らなつた所の白く磨かれた垂直の岩壁であつた。右岸の方は壁はなくて黒い斑點を交へた大きな花崗岩の岩場になつて居て、自分は其の上に座つて眼下の測り知れぬ深さを持つた碧淵をじつと見詰めるの



敷河谷と金作谷との間(其十)

岩永信雄氏撮影



立石附近の岩壁と瀧

岩永信雄氏撮影

だつた。此の麗はしいトロの上手では兩岸は餘り高くない岩壁を水際近くにだけに連ねて、流れはその間に在つて、深く淀んで居るが少し先で右に曲つて居るのでそれから上手はどうなつて居るのか分らない。下流の空を仰ぐと赤牛岳が大きく聳え立つて居た、空には、白い雲がふわ／＼浮いて、時々日が射さない様になる。まだ時間は早いから先一寸適當の所がなからうと言ふので此處で晝食をとる事にして、初めに荷を下ろした邊りに皆が集つて愉快に語り合ひつゝ飽食する。

食事を終つてロープと米とを奥ノタル澤を降つて來た時の用意にと岩蔭に残して出發すると、又、例の東信道だ(KK)。自分としては少し手間は掛つても水際ばかりを行き度かつたのだが、距離にして見ると藥師澤の落口まではまだ大分あるので無理に我を通す事も出来なかつた。立石の上手の所では暫らくの間、廊下を爲して居て其の間にはトロを挟んで居るのだがこうして右岸傳ひに東信道を段々登つて行くと、水面からは次第に高くなつて、兩岸の低く連なつた白い岩肌を仔細に眺め、その落着いた典麗さを愛でる事は出来なくなつた。もう直きに降りると思つて居るとどうして／＼道はそれ所か樹の間を分けて益々登つて行く。そしてやがて下の谷筋が見えなくなると、次第に降りて掛つて、流れが此の美しい廊下を終つた邊りで漸く河原に達した(L)。水際近くまで來て下流を望むと黒々と茂つた兩岸の尾根の間に、豁然として赤牛岳が其の全容を示して居て此處から見た其の山容は實々に堂々たるもので、黒岳附近の尾根筋から見た貧弱な姿とは打つて變つた根張りのある容姿で、その頂上の北から黒部へと延びた悠々たる尾根が緩やかに空を隈つて居る。

右岸の河原傳ひに少し先に進むと對岸藥師側から殘雪のある大きな谷が入つて居て其の落口は數段の瀑になつて

居る(M)。此れから右岸は赤味を帯びた脆弱な岩壁の露出となり其の間には急峻な割れ谷も點綴されて居る。此の脆弱な岩壁が一部分河原に残つて背後の壁との連絡を斷れて、三十米ばかりの尖塔(N)を聳て居るのが驚異の眼を見張らせる。危ふく倒れ掛つて僅かに河原に其の身を支へて居る此の岩の尖塔は如何に登らうとしてもそれは到底出来ない相談で、永い年月の間に水に依つて浸蝕され盡すまで誰にも登られずに終る事だらう。此の邊りは左岸の方は傾斜が緩くて岩壁らしいものは見當らないが、これから暫らく先で薬師側から残雪のあるガレ谷が二つ入つて居る。此の二つの谷の落口はほんの僅しか離れて居ないのでその落口で出合うと言つてもいい位だ。其の落口の對岸(O)にも残雪の堆積があつて自分達は其の上を過ぎながら其の二つのガレ谷の源頭を見上げると、其處はザラ／＼した黒い岩の破片が、風雪に浸蝕された岩角の曝露を僅かに掩つて居る荒涼たる岩稜であつた。

これから兩岸は次第に傾斜が緩くなり、右岸には押出しの堆積があつたがこれは雪崩の時に出たものと推定された(P)。河原は益々廣闊となり流水は其の間を徐ろに縫うて聲を呑みつゝ、忍びやかに過ぎ行くのであつたが、自分達は行手を遮る何物もないだけにすん／＼と足を進めて行く事が出来た。やがて又薬師側から荒れ谷が出合つたが此れは前のと比較すると可成小さい。此の谷の落口を對岸に見て、直ぐ其の上手で左岸へと徒涉(V)したが流れが穩かな此の邊りでは徒涉もこれまでとは随分樂になつて來た。然し右岸へ移つたのも束の間で、又、左岸へと同じ様な徒涉(W)をして戻り、尙少し進むと美しい澗が碧緑の色を湛へ、大空に浮んだ白雲の一片を靜かに其の面に漂はして居る。此の澗を圍んで居る岩の上を過ぎて少し上手で流れが大きく左に屈曲して居る其の緩かな尾根先を廻つて行くと(Q)、流水は二分して河原に並べられた圓い白い小石の間を徐ろに浸し、兩岸の針葉樹林は青く黒く

重なり合ひつゝ、深く其の枝葉を交へて吾等を迎へるのであつた。

片々たる白雲に遮へぎられて暫し邊りが薄暗くなつたかと思ふと、忽ちぱつと明るくなつて一面に日が當る。然かし自分達は邊りが明るくなつても夢から醒めようとはせず、尙もふら／＼と此の夢幻の世界を彷徨し続けて限り無き自然の愛撫に身を委ねるのであつた。自分達の心を亂す何物もなく、身體に加はる何等の困難をも見出し得ずして、昨日とはまるで違つた靜寂の境を辿つて行く。

藥師側からは、またガレ谷が一つ入つて來て暫し此の靜寂なる溪趣を亂すかと思へたが、忽ち復、元の靜けさに歸り、流れが漸く西に轉じようとする手前の所では美しい大きな瀨を形造つて居る。林叢が益々密やかになつて來たので其の影を浸した此の深淵は更に青碧の色を濃くしてその中へと落ち込む流水の眞白ろな飛沫と強い對照をなして居る。此の瀨の左手に接した大きな花崗岩の上を越えて行くと、正面には雲の平から降つて來た小澤が二つ三つ、瀑となつて本流に合して居て、流れは大きく右に曲つてそれから上手は見えない。此の所で自分達は先刻からずつと辿り續けた右岸を去つて左岸へと徒涉(Ⅷ)した後、流れと共に右へ／＼と方向を轉じ三本ばかり小さい瀑が對岸の岩壁の凹みに掛つて居るを眺めながら淺瀬を選んでさぶ／＼と左岸寄りの水中を行くと右に曲り終つた邊りから兩岸が次第に迫つて來て、また廊下が始まるのではなからうかと心を躍らす(Ⅸ)。然かし兩岸の岩壁が重なり合つて谷の奥を塞いだのも暫らくの間で、左岸水際の細い皺を其の面に刻んだ特徴のある岩塊に足場を求めつゝ其の上を踏み越えて行くと谷奥の尾根と空とが岩壁の隙間を通じて窺はれるのであつた。冠さんは「愈々廊下の入口だ」と言はれたので一同緊張しつゝ、此の最後の難關を突破しようと勇み立つたが此の關門の通過に相當の困難を

豫想して居た自分達はいさゝか拍子抜けせざるを得なかつた。眞直ぐに切立つた岩壁が兩岸から迫り其の間に挟まれた流水は此處に美しい深潭を湛へて碧く凝つて居るのだが、左岸の方は其の岩壁の裾が多少の餘裕を残して居るので殆ど何等の困難もなしに通過する事が出来たのは寧ろ意外だつた。岩壁の終り近くにある深潭は實に美しいもので其の通過が容易だつたにも拘らず、自分達は其れに依つて印象を弱めらるゝ事なく、充分に其の優麗さを味ふ事が出来た。對岸を見ると其の面に細かい鑿を刻んだ白く晒された岩の屏風が水と境して居て其の境界を爲す一線はくつきりと浮び上つて更に動かうともしない。碧い重い油を湛へた様で水面にはほんの一抹の波紋を靜かに漂はせるばかりで水は動いて居るのかどうか判らない。自分達は常識に依つて此處では水は右手から左手へと移り行かねばならないと結論するのだが、此れを左右から切離して眼を或る限界内に止めたならば水が何方に動いて居るのか分らないと言ふのが寧ろ當然である。立石上手のと此れとは奥廊下のトロの典型的代表と稱していいだらう。左岸の岩場(S)に座して暫し其の眺めに見入つた後、眼を少しく右に轉ずれば此の岩壁の上手の所で右岸から一つの澤が入つて居て、其の落口の少し上手の所で東信道が此れを越えて居るのが間近く認められた。東信道は先刻左岸へ徒涉した附近から、又高廻りをして、此の「廊下の入口」を避け、やつと此處で谷近くまで降つて來て居るので、「廊下の入口」は大した困難もないのに何故之を回避して居るのか、此れは一寸理解に苦しむ。自分達は東信道にはもう二度も欺されたので此處が困難だらうと豫想しながらも斷然之れを採らなかつたのであるが、却て谷筋を通つた方がすらすらと順調に運んだのであつた。此の「廊下の入口」は黒ピッカ直下の「中廊下の門」と對應して奥廊下の門と呼ばれるのが適當であらうと自分は「中廊下の門」の記述に際して説いたのであるが「中廊下の門」を入

つて、上廊下を溯つて来た自分達は此の「奥廊下の門」に於て始めて廊下の世界から完全に解放されたのであつて上廊下の二門戸は確かに此の兩者より成立して居る事を事實證明なし得たのである。此の「奥廊下の門」は誠に入るべき門であつて此れを出づべきでは無い。冠氏が先年、源流附近から上廊下を下降された際には此の「廊下の入口」が素晴らしい印象を與へた事は同氏の麗筆に依つて仔細に描寫されて居るが、下流より溯行した今日、斯る強烈な印象を受け得なかつたのは失望には値したが、よく考へて見ると當然さうあるべき筈である。岩壁の露出が更に無く、水量の少い、兩岸の緩傾斜は緑に包まれた針葉樹の悠々乎たる状態から突然斯る岩壁、深潭に行手を阻まれた場合と、大岩壁の削立、流水の奔落迅驅、深淵碧潭の連續等に依つてその神経を極度に刺戟された後に斯る小規模の岩壁、澗潭に遭遇し、且つ其れが豫め事實以上に困難なる個所として期待されて居た場合と比較すれば何故に其の印象に於て斯る差異を生じたのであらうか明かに之を了解する事が出来るのである。それ故に「奥廊下の門」は「上廊下の入口」であらねばならぬが、然かし「中廊下の門」が之れに従つて「上廊下の出口」であらねばならぬ必要はない。此の方は「入口」としても「出口」としても其の體面を汚す事はないので、決して此れから出た所で失望する事はない筈だ。然かし此れは「上廊下の出口」とのみ定めて仕舞ふのは不可能で、「上廊下の入口」とも見做さるべきものである。「出口」としてよりは「入口」としての方が寧ろ多少の歩があると思ふ。

廊下を終つて暫らく行き、右岸へと今日の最後の徒渉をして（Ⅹ）水から上れば、正面には鑛坑が控へて居てそろ／＼人臭くなつて来た（T）。そして右岸には此れから谷沿ひに幅の廣い鑛山道が通じて居るのでそれを行く事になつたが、坦々たるいゝ道なので行程は今までと違つてぐん／＼捗る。又、只道がいゝばかりでなく河原が廣く兩岸

は針葉樹の緩傾斜で何等此れを遮るものが無いので流石の黒部ももう其の源流近くなつたと言ふ感が深い。黒部で無くては見られないと言ふ溪趣は已でに盡きて、此處邊りの様子は何處にだつて求められる平凡な景色だ。斯る平凡な景色が黒部にもあるのだと言ふ意識が寧ろ好奇心をそゝる位だ。

暫らくすると道の傍に鑛山の小屋があり、そして其の小屋の近くには、別な小屋を取毀した跡がある(㊦)。選鑛の目的で鑛石を水と共に流す爲に用ひたらしい樋が小屋の所から始まつて居て道は一寸分らなくなつたので、此の樋傳ひに行くと暫らくで此の樋も無くなり、又道がはつきりとして來た。流れが左に轉ずる所では、藥師側から二つの澤が相並んで入つて居るのが目についた位で尙暫らくすると、道の右側に小屋が二つある(㊶)。これは鑛山の物置で仕事をしない今年は種々な道具や食糧が其の中に貯へてあるらしかつた。これから藥師澤の落口までは直ぐだと思つたのに、もう可成り疲勞して來た故か、思ひの外時間が掛つた。此の落口の所まで來て見ると曾ては鬱蒼と茂つて非常に美しかつたと言ふ落口上手の對岸の尾根先は悉く伐採され盡して見る影も無い有様であつた。そして其處には「蓬萊橋」と名付けられた手摺が片側だけしか無い橋が掛け渡されて谷の美しさを全く覆へして仕舞つて居る。自分達は早々に此の「蓬萊橋」なるものを渡つて本流の左岸に移り藥師澤落口右岸の河原を均して其處に露營する事となつた。

露營の準備が出来上つて仕舞つてもまだ大分日が高いので人夫達は藥師澤の上手や本流の上下流へと例の如く岩魚を釣りに出掛けて行つた。二時近くから曇り出した空は時の移ると共に次第にその雲の濃厚さを増して、やがて西南の風さへ加はつて來たので、どうせ一雨は來るだらうと覺悟を定める。邊りは薄暗くなり雲足は益々速くなつ

て來たのではあつたが、どうした加減か暫らく經つと空が次第に明るくなつてとう／＼降らずに濟んだ。夕暮れ近くなるるとぼつ／＼と人夫達が岩魚を數尾づゝ笹にぶら下げては歸つて來たが、其岩魚は餘り大きいのはなかつた。何にしる立石から此方は本職の岩魚釣が自分達の先きに立つて釣つて行つて仕舞つたのだから、大きいのは掛らないのだ。本流の方でなしに藥師澤の上流の方へ行つた連中も餘り澤山は釣れなかつた様だ。然かし何と言つても大勢が釣つて來たのでそれを合はせて見れば隨分數があつた。明日は愈々一行が二手に別れる筈なので皆打揃つての晩餐は今夜が最後だといふので、なか／＼の御馳走だ。食後にはコ、アを大鍋二つに滿々と拵へて、人夫達には西洋の汁粉だと説明しながら腹一杯になるまで呑んだ。天候はどうも悪い方に向いて居るらしく、夜が更けても寒くないばかりか、却つて生溫い氣が透りを掩つて居て、空には高層積雲が千切れ／＼になつて浮んで居る。背後の樹林の枝を通して月の光が射し込んで來るが、月の面は其の輪郭がぼうつとして居てまるで春の夜の様な氣持がした。

二十九日。

午前六時。金作谷落口下泊場。天候快晴。無風。氣壓不詳。氣溫一二・二度。水溫九・二度。

泊場出發(快晴)(前七、三五)——立石(快晴後稍々曇)(一〇、三七——一二、〇〇)

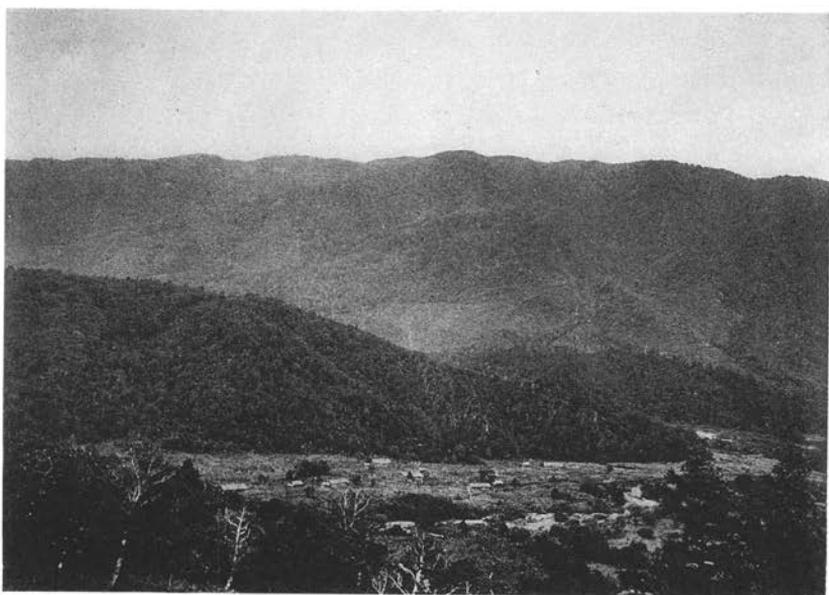
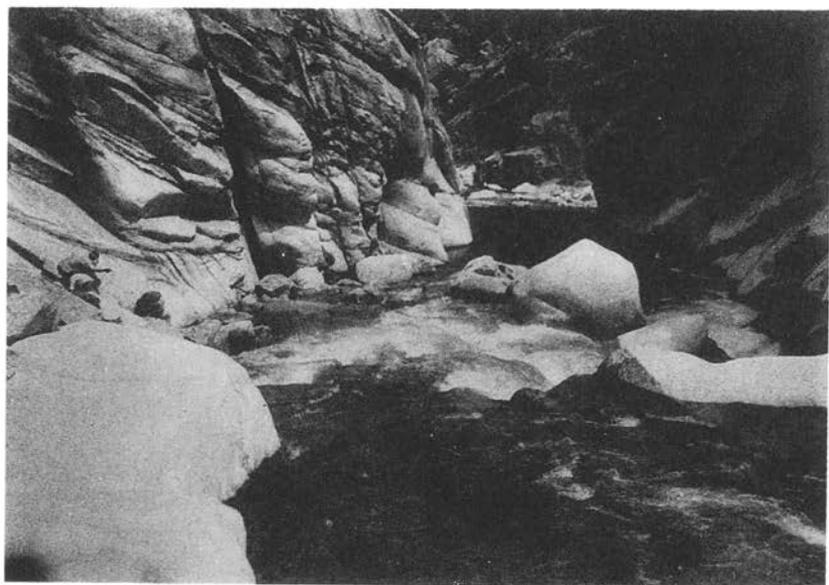
立石。午前一一、三〇。天候快晴。略々無風。氣壓六二〇・〇。耗。氣溫二〇・〇度。水溫一二・七度。——廊下の入口(後二、〇〇)

(曇、時々日波ル事アリ)——藥師澤落口野營地(三、三〇)(曇)。

九 有峰へ

昨夜から今日の天氣の不安なのを豫想して居たが、起きて見ると果して悪く、東南より西北へと後から後から黒雲の大塊が動いて行く。そしてさうして居る間に早くもばらばらと天幕の屋根を打ち初めた。雨ばかりでなく風が可成強くて暴風雨がやがて襲つて來るのであるまいかと疑はれた。こんな模様では殘餘の限られた日數内に全行程を終る事は到底不可能なので、源流に溯らうとする一隊も、薬師から岩井谷へ降らうと言ふ一隊も共に其の計畫を中止して、一行は直ちに有峰へと降る事となり、雨の中を急いで出發の準備に取掛る。立石にロープと米とを殘して來たので人夫を二人遣つてそれを取つて來させる事にして、薬師峠へと向ふ事になつた。

自分達四人と長次郎とはまだ後片付けに忙しい人夫達に先だつて出發する。薬師峠へ更に有峰へと通じて居る鑛山道を通つて行くと暫らくで雨は止んだが雲行きは依然あわたましい。薬師澤右岸寄りに道は次第に登つて森林濕原の中を行くので、此の邊りは中々感じのいゝ處だ。谷を隔てた其の背後には黒岳が大きくそそり立ち、その頂きを掠めて重たい黒い密雲が西北へ西北へと疾走し續けて陰慘な氣が邊りに漂つて居る。黒部の源流の鷲羽、三俣蓮華等の山々が此の黒雲の大集團の下に壓しつけられた様になつて小さく望まれ、その右手の方からはもくもくと盡きせぬ雲の大波が後からく、押寄せて來る。やがては自分達も其の大波の中に吞まれて仕舞ふのではあるまいかと思ひながら、太郎兵衛平の頂きを指して急いで行くと、左手には上ノ岳の緩やかな斜面が展びて來て其の肩には小さい點を打つた様に小屋が見えて居る。黒くびつしりと茂つた雲の平の斜面、緑の毛氈を敷きつめた様な濕原



(上) 敷河谷と金作谷との間(其七)
(下) 有 峰

渡邊 漸氏撮影
岩永信雄氏撮影

の上に針葉樹が疎らに置かれた上ノ岳の薬師澤に面した緩い山腹の起伏、自分は冬に此の邊りを訪ねて見たいものだとつくづく思ふのだつた。そして樹氷に飾られた大きな樅の木の間に雪煙を立てながら薬師澤落口の方へと滑つて行く自分の姿を想像しただけで胸が躍るのを禁じ得なかつた。太郎兵衛平近くになると此處は丁度風の通路に相當して居て、吹き飛ばされさうになるのを辛うじて支へながら一面に廣い其の頂きにと出て、偃松の影に身を潜めながら西の方を眺める。眞黒ろな東の方とは反對に、西の方は飛驒の連山から白山に掛けて山肌が恐ろしいまでに青く光つて居て、非常に強烈な印象を與へるのであつた。飛驒の盆地や富山の方面は晴れて居て、其の上には青空の一片が見えて居た。能登の方がはつきりとよく見える時には山では天候が思はしくないと云ひ傳へられて居るが成程、能登は曾て自分が見た事の無い位はつきりと見えて居た。

残雪もない荒涼たるその姿を黒雲の下に辛うじて現して居る薬師の大岳の左手には大日の尾根続きが見え、更に左に寄つて鉢崎山が間近かく迫つて居る。太郎兵衛平から薬師峠へと掛り眞川を目指して草原の上をどん／＼と降つて行くと、もう頭の上では雲がすつかり薄くなつて、時々はその断れ目から日の光さへ射すのであつた。尾根筋から此方では風も全くなくなつて先程のあの烈風はまるで嘘の様な氣がする。眞川と和田川との間の低い平らな尾根続きが前面を限つてその尾根の終は寺地山へと延び上つて居る。上ノ岳から寺地山それから更に西へと續いて居る國境の大尾根は濃く茂つた針葉樹で一面に掩はれ、双六の谷から其の水上へと、又或ひは打保の谷から和田川へと越して見度いと思つて居るのは只自分一人であらうか？ 鑛山道がいゝお蔭で自分達の歩みはぐん／＼と草丈から樹林の中へと入り、やがてもう眞川の水音が間近く聞えて来る。神祕に閉ざされた大自然の只中に鑛山を見

付けて鑛を掘らうとする連中が何時でも失敗に終る事實を語り合ひつゝ自分達は降つて行く。薬師澤の落口附近で採鑛した事は曾てあつたが何れ失敗に終つたのであらう、其後さう言ふ話は聞かなかつたのだが昨年（昭和二年）に又、仕事を始めて、自分達が昨日見て来た様な小屋や樋や、鑛坑や、橋や道路等をこしらへて採鑛に従事したが一年経たない今日早くも其の事業を放棄して仕舞はねばならないとは自然の冒瀆に對する報償は實に恐ろしいものではないか？

眞川の谷まで下つてそれを越すと、其處には荒れ果てた小屋が見出される。曾ては薬師の冬季登山に對して重大な役目を演じた此の小屋、山小屋としては他に餘り類を見なかつた此の小屋が、斯く荒廢し切つて居るのを見て、自分達は意外の感に打たれた。現在では富山縣の所有になつて居るのだから、何故に此れに修理を加へようとはしないのだらう？ 修理をして、此れを元の状態に戻す事は現在ではさう金の掛る問題でも無い。然かし此れを尙放置して置けば益々荒廢して遂にはその潰滅を見るのも遠くはあるまい。そして小屋を新らしく建てる事が如何に困難な事業であるかを知つたならば一刻も早く此の小屋に手を入れるべきであらう。

小屋の前で早目の晝食を済ました自分達はぶら／＼と有峰を指して出掛ける。尾根まで登るには案外に時間が掛らず、此れからは有峰までは降りだけとなつて自分達は益々ゆつくりと歩いて行く。そして深い林の中に入ると、ゼニトリが「ゼニトリ、ゼニトリ、ゼニトリ、ゼニ」と鋭い叫びを交はして居るのが耳につく。針葉樹の林は其の中に段々闊葉樹へと其の林相を變じて来て、楢の大木が次第に多くなつて来たが、まだ楢茸の時節には少し早いと見えてそれらしいものは一向に見付からなかつた。楢、榎、等が其の緑を明るく染め出して東澤の落口以來見續け

て來た針葉樹の暗い、蒼色とは著るしく異つた趣を見せて呉れる。自然のその儘に、手を觸れない此の密林は二抱へ三抱へもある大木が梢を並べてすく／＼と生ひ茂つて居て、人工を加へられた林ばかり見慣れて居る自分達は其の美しさを浸々と味はふのであつた。林を抜けると眼下には有峰の部落が近く、小さいマツチ箱でも並べた様方に一軒此方に二軒と言ふ具合に山裾に白く見えて居る。

さて愈々有峰に掛ると、人間が住む事を忘れた此の邊りの寂しさは又何と言つていゝだらう。行き交ふ里人も無いので何處が道だか分らない位に草が茫々と茂つて居て、秋の氣は肅々と風になびくすゝきの穂に已でに著るしかつた。軒が傾き、屋根の破れた廢屋の傍を通ると寂しさは一層身に浸み渡るのであつた。そして一軒又一軒と過ぎて行つてもかたりとも物音はしないで不氣味なまでにひっそりとして居る。自分達は人の住まぬ所で寂しさを感じる事はなかつた。さうした人氣の無い所を求めて山谷をさまよふ自分達であつた、然かし曾て人の住んだ所、そしてその跡ばかりが残されて荒るゝに任せられた廢村に却て測り知れぬ寂しさが宿つて居るのだつた。人の居るべき所に人が居ないと言ふ事實は自分等の心を強く打つて止まなかつた。

が然し只一軒、通稱「カヂヤ」と言つて居る家には人が住んで居た。それは九十幾歳の老翁であり、その子である七十幾歳の老媪で、里人が悉く此の地を去つた今日、この靜寂な寒村に對する愛着を斷ち難く一度は平原の町へと出たものゝ、再び住み慣れた此の祖先傳來の地へと戻つて來たのであつた。已でに此の地を圍む十里四方の大森林は彼等の所有ではなかつた、然かしそれでも歸つて來た彼等は幸福だつた、其處には彼等を欺く利に敏い都人は居なかつたし、彼等の心を亂す文明の響きもなかつた、彼等は毎朝藥師を仰いではその姿に手を合はせ、靜寂な餘

生を送つて行けばいいのだつた。富山縣に祖先傳來の山を賣つて莫大な金を得た里人達が喜びに夢中になつて此の土地を見捨てたのは數年前の事だつた、そして今ではもうその金は悪賢い利權業者の手にすつかり捲き上げられて仕舞つて、富山やその近くの町で慘めな生活を送つて居るのださうだ、そして一度、華やかな平地の生活を味はつた彼等は二度とこんな下界と掛け離れた退屈な山村へ歸る氣はなくなつて仕舞つて、苦しみ喘へぎつゝ平地で辛らい目を見て居るのだつた。

自分達は老翁に迎へられて、今宵は此の家に泊る事になつた。そして與へられた座敷に入り荷物の整理も済んだがまだ時間も早いので其處等邊りをぶらつく事にした。然かし道が荒廢して居るので其の逍遙も決して樂なものではなかつた。會つて木彫りの駒犬のあつたと言ふ社を求めて東谷の下手の方に行つて見たが、人が住まなくなつてからは詣でる人とても無いので荒るゝに任かされてその拜殿の床も朽ちて少し力を入れると床板が折れる始末だ。引歸へして來ると丁度山から降りて來た人夫達とひよつこり出會つた。親切な野口老人は自分達を連れて西谷の方の社へ案内して呉れる。廢屋の前を通る度に、何かしら寂しい氣になつては中を覗きながら過ぎて行く。西谷の社といふのはなか／＼遠い、野口の話では其處には杉の木が數本あつて、有峰で杉の木があるのは其處だけだと言ふので、杉を目當てに草を掻き分けて目的の社に達したが此の方はまだ其の荒廢の程度がいくらか軽い。へと／＼になつて空腹を抱へ、疲れた足を引摺りながら歸つて來るともう日暮れ近かつた。

軒先に出て東の方の空を眺めて居ると、寺地山の方から大きな黒雲の集團が北へ／＼と自分達の頭上を通つては後から後から押し寄せて來る、そして此の雨雲は見る間に和田川の下流の方へと過去つて仕舞ふ。もう降るか今降

るかと思つて寧ろ心持ちにして居るのに、雨はなか／＼落ちて來ようとはしなかつた。前山の茂つた尾根の背後には藥師が其の幅廣ろな肩を張つて居るのが遙かに望まれ、其の頂きを掠めて黒雲が北へ／＼と蒼りに疾走して岳は相變らず荒れて居るらしかつた。前尾根が眞紅に燃え、其の紅葉に映へて藥師の頂稜がきら／＼と新雪に輝き渡るのももう間近かい事で秋は一刻々々と此の山村に浸み込んで來て居た。

夕方になつて立石まで行つて來た二人も着いたので久し振りで天井の下での夕食を採つた。夜に入ると今まで持ち耐へて居た雨が猛然と降り出して其の沛然たる大雨は終夜止まずに終つたが、降られる事を豫想して此の家に泊つた自分達は歸りの汽車に濡天幕を持ち込む事を免れた。

三十日。藥師深港口泊場出發(前七、四五)(小雨)——太郎兵衛平(九、二〇)(曇、東南ノ烈風)——眞川小屋(一〇、五五)(曇稍々晴)——有峰大野方着(後三、五〇)(曇)。

一〇 和田川

今日で愈々十日間の樂しかつた山路も終りになるのだ、そして此の旅の初めに立山温泉で抱いた豫感が思ふ存分に充されて歸り行く自分達の心は、薄雨が霏々として邊を包んだ此の陰氣な朝にも明るく晴れ渡つて居た。

有峰が富山縣の所有に歸したので和田川に沿つて立派な林道が開鑿せられ、以前の様に尾根を辿つて迂回する必要は無くなり、千垣からは一日足らずで樂に達せられる様になつた。「和田川」は地形圖には「前川」と記載されてあるが此の名稱は人夫達の間には全然通用せず、其の下流の部落たる大山村和田の地名に由來した「和田川」が

廣く使用されて居る。

千垣に着いてからゆつくりとしたい考へで早く出發する。まだ雨が上り切らずにぼつり／＼と降つて居るが暫らくは雨装束で行く。有峰の部落を離れようといふ頃、雨に濡れた白樺の林の中を抜けるが、白樺が亂伐され盡した今日、こんな處で素晴らしく美しいその集團に遭遇しようとは夢にも思ひ掛けなかつた。東谷と西谷とを合はせた頃には田圃の中の小川とも見られた和田川も兩岸が次第に茂り水量が段々と増して來るに連れて其の河岸には大小の岩塊が置かれ、やがて低いながらも兩岸には岩壁が現れて來る。道は左岸傳ひに進むが可成降つてから一寸右岸へ移り、暫らくしてまた元の左岸へと歸へる。此の邊りでは水面に接した岩壁も相當に立派になつて、流れは堂々たる溪流の趣きを具へて來る。釣橋に依つて二回流れを横切つて元の左岸を尙ほ進んで行くと道がいゝので行程がぐん／＼と捗つて此の分なら千垣に盡少し過ぎに着けるだらうと少し慾を起したりした。可成行つてから釣橋で再び右岸へ移り、此れから先きはずつと下流まで右岸ばかりを行く事になる。兩岸の斜面は雄麗な闊葉樹で掩はれ水際近くまで眞直ぐに降つて來て居て其の水面に接する附近では所々廊下狀に岩壁を露出して、なか／＼悔り難い溪趣を示して來た。雲が次第に薄れて日の光が斜めに谷間に射し込む頃、鉾崎山から來るオホサカモリの谷の落口で出發以來始めての小憩を採つた。雨具をすつかり始末して身輕るになつてまた歩き出すと道は次第に水面から高くなつて、谷が左に折れて居る邊りでは可成高い岩壁を兩岸に立て、居る「中ゴヤ」の廊下の上を迂回し暫らくして對岸に「ニンニクの不動瀑」と名付けられた白く銀線を曳いた瀑を眺めながら尾根先きを克明に一つ／＼廻つて行く。

「有峰ナリヤ」と言つて有峰と大山村との境まで來ると此處は以前に「鬼ヶ城」と呼ばれて道の無かつた時分に

は通るのに随分骨が折れたらしく、岩の破片がザラ／＼と崩壊してるのが認められた。一時曇つて居たのが再び晴れ間を見せて来る頃には、「カヒガフチ」と言つて和田川での屈指の悪場の上に差し掛つたが、何にしる道は高い所を通じて居るので遙か眼下に其の薄暗い狭間をちらりと窺ふのみでどん／＼と行き過ぎて仕舞ふ。此處を過ぎて暫らくするともう和田川の谷も見るべき何物も持たぬ様になる、堰堤に達したのだ！ 詳しく言へば日電の龜ヶ谷發電所の取入口が此處に設けられて居るのだ。

まだ十二時にはならなかつたが千垣までは可成あるので兎に角晝食を済ます事になつて日電の事務所に立寄つた。食事を終つて暫らく休んだ後出發するとこれから先きは水平につけられたトロ道に沿つて行くのだ。谷は水が涸れて乾干しになり見る影もないまでに凋落して居る。今に御山谷の附近に偉大な堰堤が築かれたら、新越附近や大へツリの邊りもこんな惨めな状態になるのかと思ふと實際情無くなる。黒部の谷が其の河床を天日の下に曝らさねばならぬ日が早晚来るのだが、自分はさうならない以前に見たのだからもうどうなつても構はないといふ氣にはなれない。下廊下の核心たる大へツリ附近から十字峽邊りまでは何時までも元の儘にして置いて後から生れて来る人達にも見せて遣り度いものだ、一步譲つて後世の人がそれを見る事は望まないとした所で、變り果てた黒部の殘骸を衆人の眼に觸れしむる事は自分達に取つては耐へ難い苦痛だ。

トロ道は其の枕木が邪魔になつて歩き難いし、その上今頃になつて日が／＼照り付けて来るし、風らしいものは一向に吹いて呉れないしするので全く遣り切れない。延々長蛇の如く山腹を遙か彼方まで白く通じて居る此の道には黒部では頑張つた猛者連もすっかり參つて仕舞つて、意地汚い根性を起して早く千垣に着いて西瓜が喰ひ度

○黒部川 渡邊

八八

い、冷いビールが飲み度いとそれのみを唯一の慰めにして且つ當てにして、單調な此の道を黙々として進んで行く。やつとの事で發電所まで辿り着き、その傍の草坂を草いきれに惱まされつゝ降り終つて小見の部落から千垣の方へと急いで行くともう直きに千垣だといふ常願寺川の釣橋の近くから驟雨がざつと襲つて來た。一行があはてふためきながら橋をどん／＼と走りつゝ渡つて例の茶店に駈け込んでほつと一息ついた時に此の山旅は終つたのであつた。

三十一日。有峰出發(前六、二五)(雨、暫ラクシテ止ム)——大サカモリ出合(八、〇〇)(曇、稍々晴)——絶ヶ谷發電所取入口(一〇、四五)——後一二、〇五(晴)——千垣着(二、三〇)(晴、驟雨)。

附記

上廊下に關する從來の記録に就いては「黒部川探勝の經過」(冠松次郎氏)(二十一年第二號一七五頁)——一七九頁)中に其の概略が記載されて居るが此れには多少の誤謬も含まれて居る様であるから其の訂正旁此の機會に一言したいと思ふ。

上廊下を初めて探られたのは京都の會員田中喜左衛門氏であつて此れは大正九年の七月中旬から下旬に掛けての事であつた。一行は同氏他一名と大町の大西又吉及び四名の大夫の七名であつて先づ高瀬川水俣千丈澤を溯りそれより雲の平を訪れた。此れより黒部川の流域に入り、第一日は藥師澤落口まで下降して其處に一泊、第二日は奥廊下の谷を辿つて立石に達し一泊。立石まではずつと谷筋のみを下降されたさうだ。第三日は尙谷筋に沿つて奥廊下

を降り、金作谷落口附近にては膨大なる残雪が本流を悉く埋め盡したるを目撃せられた由だ。此れより暫らくは右岸に沿つて下降されたが谷が左に曲つて更に少し下手で右に逸れて居る邊り（即ち自分達が高廻りなせる二十八日のJ、K、附近）まで來ると谷筋が行かなくなつたので右岸を可成高い所まで登つて高廻りをし可成進んでから割れ谷を降つて僅かばかりの河原を見出して一泊されたさうだ。此處は丁度例の深い徒渉點の手前で自分達が晝食をした點（二十八日のG）に相當し、同氏の降られた割れ谷は米谷、野口の兩人が先きを見るべく登つて行つたものだ。同氏が此處で撮影された寫眞と自分達の寫したのとを比較して見ると、大正九年は非常に水量が少く、昭和三年は可成多い方で同一に論ずるわけには行かないが、七月下旬と八月下旬とは流石に非常に水量に差異があつて、同氏が行かれた時分には徒渉等思ひもよらぬ事で、到底丈が立ちさうも無い。第四日は此處より暫らく高廻りをなし、それより右岸の水際傳ひに進み何處か分らぬが或る地點で左岸に移り、數河澤と廊下澤との中間邊りで一泊されたさうだ。第五日は此れより大體左岸を下降し、口元ノタル澤落口上手の廊下（二十七日のKK'）の所では矢張左岸を高廻りされたさうだ。黒ビンカ直下の惡場（二十七日のF、G）は右岸を高廻りし、此れから行程はずん／＼涉つて平から針ノ木澤を溯つて南澤落口附近で一泊されたとの事だ。上廊下を下降して居る間は毎日小雨が続いて行程がちつとも捗らず大分天候に惱まされたらしい。金作谷の下手で支流が瀑となつて本流に合して居るのは自分達と同じく再三目撃されたさうだ。

田中氏に續いて同年八月下旬より九月上旬に掛けて澤本千代次郎、同三郎の兩氏が町より、平に到り此れより上廊下を溯行せられ立石よりオクノタル澤を上り、雲の平に達せられた。此の時には水量が非常に少くて谷の中を

○黒部川 渡邊

九〇

何處でもすん／＼と行けたさうで、自分達の溯つたのも八月の下旬、もう九月に近い頃ではあつたが、どうもあれから一週間や其處等でそんなにまで水が減るとは思はれないのであるから、此の大正九年といふ年は昭和三年と比較するとずっと水量が少なかつたらしく思へる。田中氏の下降された當時の状況を考へて見ても七月下旬としては割合に水が少なかつたらしい。昭和三年の夏には七月下旬頃はとても谷沿ひに行く餘地はなかつたであらうと言ふ事は自分達の溯つた時の種々な點から推して知る事が出来る。

澤本氏の溯行された時には口元ノタル澤上手の廊下（二十七日のK'K'）では水深は股まで達しなかつたさうで、丈も到底立つ見込の無かつた自分達の時とは大分趣きを異にして居る。こゝいふ具合であるから黒ビンカ直下の悪場も例の深い徒渉點も全然問題にならなかつたらしい。然かし「上の黒ビンカ」の上手で右岸を高廻りした所（二十八日のJ、K）の深潭は此の時にも水の中を通過する事は出来なかつたさうで、右岸の高廻りは相當に困難を伴つたといふ事だ。本流が此の様に水量が少なかつたのであるから、従つて支流はずつと水が少なくて、瀑になつて落ちて居る澤等は一つも見受られなかつた由だ。奥ノタル澤は瀑の連続で右岸をすつと高廻りされたが、それでも樹間に認め得たものは十を以つて數ふる程だつたさうだ。

上廊下探勝の第三回は冠氏が大正十三年八月に双六谷から降られた時で此の時の事は「黒部號」に其の紀行があるから此處には述べない。

此れから以後東信道を辿つて上廊下を探つた例はあるが谷沿ひに辿つた人のある事を察聞にして耳にしない。

岩苔小谷溯行記

角 田 吉 夫

岩苔小谷は信濃越中の國境山脈水晶岳赤岳及び雲ノ平の祖父岳等にその源を發し、西北に走り、黒部川上廊下の中樞立石に於て本流に合流してゐる。そして源流に於ける圈谷は比較的廣範圍に亘つて數條の支派を合せてゐる。寧ろ黒部川源流地、鷲羽岳蓮華岳間の廣さにも優るかとも見える。岩苔小谷は一名奥ノタル澤とも呼ばれてゐる。私等は通常後者と呼んでゐる。又或る信州の岩魚釣が立石の澤と呼んだ事を記憶してゐるが之は立石に於て本流に落合ふ一支流といふ程度の軽い意味の様である。

昨年岩苔小谷を試み様と藥師澤落合まで入つたのに種々の都合で中止し、太郎兵衛平より有峯に下り、再遊の望も失せたと思はれてゐた。幸に今年（昭和四年七月）も暇間を得たので藥師澤落合のカベケ原を中心として數日を送る計劃を立てる事が出來た。そして事情の許す限度に於て金作谷を藥師岳まで登る事と、岩苔小谷を溯つて見たいといふ希望を抱いてゐた。

黒部川の上流に於ては岩苔小谷は東澤に次ぐ大きな谷とも云ひ得る。然し此の一支流の溯行記をして一文を草するには餘りに内容に充實さを缺く憂のあるのを私は案じてゐる。時に本號が黒部號であるといふ話を田中實雄氏より傳へられたので甚だ拙文であるが岩苔小谷溯行の感想を少し書いて黒部號の巻尾を汚す事を承諾する氣持になつ

○岩苔小谷湖行記 角田

九二

た譯である。

湯俣川入り

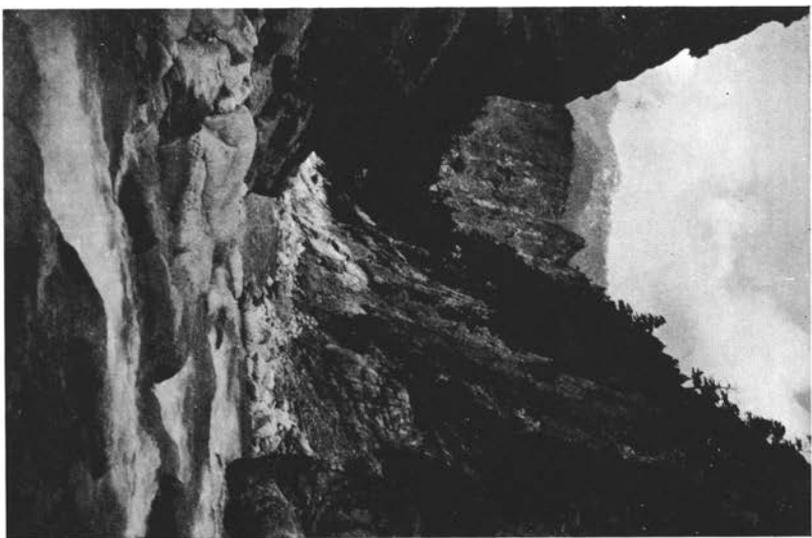
夏山の盛り時、七月廿一日（昭和四年）信濃大町に下車、大出までハドソンのドライブに送られたのが此の山旅の第一日である。同行の岳友は三名、入夫は親しい有明村の塚田清治君を併せて五名。高瀬川に沿うて湯俣川を溯り、蓮華小屋より黒部川へ下る豫定である。高瀬川に二泊して三日目には蓮華小屋へ、その夜は薬師澤のカベケ原にベースキャンプを張る意気込みは強い。然し十日間以上の食糧は分擔しても擔ひ切れぬ程の重荷である。又夏山の第一日は誰しも味はふ夜汽車の睡眠不足と山麓の曇さには少からず辟易する。そして豫定は第一日より齟齬を來たし、湯俣水俣の合には遙遠く傳兵衛の小屋跡附近の河原に第一夜を送らねばならなかつた。

ベースキャンプの目的地であるカベケ原までは如何様なコースをとるも三日は要する處である。出發前熟慮の結果、最も容易な、短時日なコースとして湯俣川を登る事に決定を見たのである。即ち第一日湯俣出合、二日目椴澤出合、三日目蓮華小屋を経てカベケ原までの豫定に従ふ事となつた。昨年カベケ原の印象を書いた時にも述べてあるが、毎年薬師澤出合に入る鰯釣の上條新一は烏帽子の尾根を通つてゐる。此のコースを取れば四日間を要するが最も當を得た道と云へやう、然し私も湯俣川は大して悪い谷とも考へず、元氣よく溯つたが、實際に於ては相當悪場の多い谷であつた。重荷と激しい雷雨の爲に結局は私の迷案も平凡なものとなつてしまつたとは云へ、赤岳硫黄岳の岩峯の鋭さを近く仰ぎ得た事と、湯俣川が豫期以上に緊張を與へて呉れた事を想へば後悔よりも寧ろ深い感



岩菅小谷第一の瀧

角田吉夫氏撮影



湯俣谷

角田吉夫氏撮影

銘を得た事を喜んでゐる。

翌二十二日は前日にも優る快晴、クツキリと蒼空を劃して北嶺の獨標が屹立してゐた。湯俣川はその名の如く水俣の出合附近より既に硫氣と熱湯を噴き、流は氣味の悪い白濁である。一ノ澤（湯俣川が大きく北に曲つた處）附近より唐谷（北より入る露岩の記號のある廣い谷、湯の字の約五分程右に落合ふ）の間が最も悪く、見事な廊下状をなしてゐる。岩質が脆いので高廻りも出來ず幾度か腰を洗める緊張した徒渉を繰返し、ワリモ澤出合附近の右岸に僅の平地を得て第二日の夜を迎へた。此の出合より仰ぐ硫黄岳は實に立派な山容である。赤褐色の岩肌、深い投影を結ぶ多くの裂け目を以つて屹立する様は寧ろ豪壯である。

二十三日も朝は快晴であつたが、午後二時間程激しい驟雨に遭つた爲に、縦澤出合にて雨中の露聲を餘儀なくされた。此の日硫黄澤出合の約一時間程下流にて一ヶ所架橋した爲に非常に時間を要してゐる。硫黄臭き無氣味な硫黄澤と離れると谷は急傾斜となり初めて緑濃き針葉樹林が現れる。縦澤出合との中間に三段の瀧に出合ふ。落口は見事な釜をなして谷沿ひに行くのを許さず、左岸の藪を押し分けて高く卷く。此の瀧が湯俣川に於ける最大の瀧であらう。瀧を終ると殆んど傾斜もなく、靜な流となり縦澤を合せてゐる。

豫定の日数は既に終つたが目指すカベケ原は猶一日を要さなければならぬ。廿四日の朝も靜かに明けた。朝霧の立込める中に蓮華岳の豊富な残雪を目指して露に濡れた下草を押し分けた。水の盡きる所は美しい草原にまばらな針葉樹を混へて氣持よく、山旅の心を慰めてくれる。雪溪を登りつめて蓮華小屋に着いたのは四日目の晝時であつた。心行くまゝ四圍の山々を眺める餘裕も與へられず、今日も又現れた夕立雲に追はれながら、黒部の源流へ歸

釣の踏跡を下つた。やがてポツリポツリと降り初め、五郎澤出合の出水平まで夕立は續いた。未だ三時前ではあつたが、突然の増水で徒渉中私が流され、身體も荷も全部濡らした爲に泊る事になつてしまつた。露营地は本流の左岸、五郎澤と落合ふ所の美しい草原である。昨年使用したテントの支柱も杭もそのまゝ思出深く残されてあつた。

私達も既にカベケ原に近く、黒部川上流の持つ特長ある數多くの美しい草原の一つに靜かに置かれてある。流には齧跳り、仰げば黒部五郎岳のカールも雨後の澄み渡る大空に浮んでゐる。最早や黒部に入つたといふ意識の爲か、今迄にない愉快な氣持が感ぜられる。流に絲を垂れ、魚を求める心も明るい。その夜程愉快的い夕食は曾て無かつたらう、ロソクの火を圍み、釣り上げた齧のフライに舌鼓を打つ時こそ谷歩きにのみある歡びである。

立石まで

廿六日。晴。五郎澤のテントを引拂つて藥師澤出合に着いたのは晝前であつた。カベケ原には未だ齧釣の小屋もなく、一人の姿も見えない。毎日必ず一度は見舞はれる夕立には閉口してゐるので、根據地は出合よりやゝ下流、右岸の齧山小屋に移す事にした。小屋とは云へ既に屋根もない残骸に過ぎない。數枚の板にて屋根を葺き、床を張りその中にテントを張る。小屋の後の倉庫には食糧は豊富に藏され、十數俵の米は徒に野鼠の跳梁の下に置かれてある。午後の夕立は珍らしく僅なものに過ぎなかつた。小屋の整理が終ると、後は溪流の響に耳を傾ける靜かな谷の生活の味ひである。

次の日も靜かに明けた。仰ぎ得る範圍に於て雲一つなく晴れ渡つた朝を迎へた。金作谷廻行を後に、先づ岩苔小

谷を登る事に決定を見る。二日分の食料、四人用テント一張、防寒具、釣竿、カメラ等を分擔し、今迄にない軽い足取りで立石に向ふ。平和なる朝の静けさを破る駒鳥の聲も美しい。鑛山の歩道を流に沿うて、或は高く山を巻いて下れば、やがて上廊下の大岩壁は高く屹立し、私等の進路を拒むかとも思はれる。四時間餘にして立石左岸の立派な岩壁が現れ、岩小屋に入つたのは、午前十一時三十分であつた。その側に三間程の川幅を持つ岩苔小谷は巨岩の間を縫つて黒部川に流勢強く落込んでゐる。澤の奥は兩側相迫り直立した岩壁は相對峙して、直ぐ右に曲り暗い感じを與へてゐる。岩小屋は落口に近く此の澤を渡つた所に入口を南に開いてある。毎年魚釣や獵師が好避難所として使用する爲であらう、非常に整頓された、居心地のよい岩小屋である。私達が此處に荷を下した時、薬師の一角に現れた黒雲は既に頭上を覆ひ、間もなく激しい夕立となつた。晝飯をしたため、食後の一服を終るも未だ雨は去らず、岩小屋の籠城は餘儀なく續けられた。

岩苔小谷

立石の岩小屋に激しい夕立を避ける間、幾度か空を仰いだが黒雲は次から、と切れ目も見せない。岩苔小谷の落口に於てまで無情な雨は私達を苦しめ、激しい焦燥と不安の内に時間は經つて行く。谷は落口より僅數十間にして右に折れてゐれば、其の先の様子も知る事は出来ない。

私が此の谷に憧憬を抱いた大きな理由は岩苔小谷と呼ぶその名稱である。ロマンチックな考へかも知れぬが、岩苔小谷と呼ぶ時、私は不思議な程その名稱に魅力を感じてゐた。此の谷が非常に險阻である爲でもない、又誰も行

かぬ處女地の理由でもない、たゞ其の岩苔小谷の名稱に憧憬を抱いてゐただ。私の山旅の内には斯る不思議な理由のある事は否定し得ない。例へばあの南アルプスの丁字形に流れる御子ヶ淵を持つた三峯川、或は聖岳、遠山川等は岩苔小谷に於けると同じ様な氣持を持つた山旅であつた。

待ちあぐんだ激しい夕立も午後三時を過ぎて漸く終つた。そして黒雲の後にはスッキリとした青空も仰がれ、暖い陽光は再び遍く照り輝いた。

暮營の準備もあるので出来得る限り此の谷を溯る事に決め、草鞋の紐を締めなほして岩小屋を出發する(三時三十五分)。餘り落差がないので落口より奥は靜かに流れ、蒼い、深い淵も見える。流について進めばやがて先程から見えた谷が右に折れる所に達する事が出来た。此附近より既に兩岸は岩壁となり、谷が迫つてゐるので非常に暗い感じを興へてゐる。右岸について僅な棚に足場を求めつゝ行くと、谷は又急に左に曲つて前方は見えない。その左に曲る鼻は相當に悪く、對岸へ行くにも深い淵に遮切られてゐる。四、五米高く登り依然へジリは續けられる。此附近の岩は黒部の持つ特色の様に、皆一樣に角が丸くなり、全ての手懸りも足場もやゝ下向になつてゐる。左に曲り終へると又僅か右へ、そして又左に折れてゐる。此處で廊下は一度終り、前方はやゝ明るく、午後の太陽の光が樹間を漏れてゐる。廊下を終へる最後の五、六米の同じ右岸の岩壁で、塚田が失敗を演じた。最初私が滑り易い手懸りを掴んで、幾度か試みた後、辛じて登り終へた時續く塚田は同じ手懸を掴んで滑つたのである。昔は流に洗れた岩壁であらう、特有の丸味を持つ滑り易い、然し美しい花崗岩である。幸に塚田は直ぐ下に待つ深い淵の中には落ちず、その側に止る事が出来た。而し左の手首を強く打つたので自由を缺いた様であつた、切傷は大した事もな



(上) 岩苔小谷より薬師岳を望む
(下) 岩苔小谷より雲ノ平を望む

角田吉夫氏撮影
同

一同その岩を登り切るとやゝ兩岸は相離れて河原となり、前方に三段になつて落ちる見事な瀧が現れた。(三・三五) 十五米程もあらう、水量の豊富な瀧である。兩岸は岩壁にて逆層となつてゐる。此の瀧の落口の左より小澤が一本赤牛側から入つてゐる。開らけた緩い流の澤で岩肌も見せず、雜草灌木が生ひ繁つてゐる。荷を下し、一服しながら登路を研究して見たが見出し得ず、結局岩苔小谷と左より入る支流との間の尾根を高巻きする事にした。(槍ヶ岳圖幅参照、瀧の位置は岩苔小谷の黒部川合流點より僅か登つた所にて一七八〇米の等高線附近と思はれる)

路やイタドリの間を押し分けて急傾斜の草付を喘ぎつゝ登る。麁も終つたと思はれる所より本流に降らうと試みたが、急傾斜には熊笹が密生し其下は直立した岩壁である。幾度か試みたが不成功に終り、餘儀なくこの細い尾根を高く登るより外に術はない。熊笹は何時しか梅、白檜の密林となり、限り無く續いてゐる。夕闇もやがては迫りつゝある。水の無い一夜を送る覺悟を決め、密林中に平地を求めなければならぬ時となつた。樹間を通して谷を覗き込むも姿はなく、流の響のみである。對岸(左岸)は二百米もあらう、高い岩壁が續いてゐる。私達が右岸をとつた事はせめてもの慰であつた。四時十五分尾根の一角とも思はれる所に登り着いた。赤牛の赤味を帯びた尾根や、藥師の支脈も仰がれる所である。尾根はやゝ平坦となつたので、南に向ひ、谷に沿ふ氣持で梅の林に行く。下草がなく、羚羊の踏跡を拾ひつゝ進み得たので餘り困難もない。此の歩きよい平地もやがて終つて、崖際と思はれる所に出る事が出来た。不安氣に谷を覗き込めば前方に一つの低い平な尾根を隔だてゝ岩苔小谷の谷脈が現れた、足下には思ひがけなくも水の流を見出した。赤牛側より入る小澤であらう。早速水際に下つて露營の準備に、疲れ

た身を勵ました。稍濕つた地ではあるが笹の生えた平地を得たので褥の葉を厚く敷き詰め岩苔小谷の第一夜を送るテントは張られた(五、一〇)。珍しく流の側には落葉松の林がある、皆一丈程にのびた若木にて、新緑を思はせる様な若葉であつた。流は清く冷たいが非常に硫黄臭い水であつた。澤の岩石は稍茶褐色である、何處か此上流には硫黄泉でもあるのではなからうか。私が昨年カベケ原に遊んだ時、鯿釣の老人から聞いた様に記憶する岩苔小谷の湯といふのは此の附近ではないかと思はれる。瀧を左に絡んだ結果が現在の様に私達の位置もよく明かでない澤に導いて來たのである。明日の豫定を考へる餘地もない、如何なる變化が待設けてゐる事やら。夕闇の空にキラメク星が唯一の慰安である。無氣味なそして陰鬱な印象を與へつゝある岩苔小谷の第一夜は次第に更けて行つた。

七月廿七日。

ほがらかな朝は靜かに訪れた。冷たい曉の微風が谷を登つて行く。

出發に先立つ問題は私達の進路である。幕營した谷に沿うて岩苔小谷の流に出るか、南へ尾根を横切るかを決定しなければならぬ。私達の露營地は昨日の瀧の處に落合ふ支流より一つ南の同じ赤牛側より出る澤にて、本流の落口に近い二俣の合流點と考へられた。此の澤の流は稍西北に向つてゐる爲に、本流へ出るには寧ろ南へ尾根を横切つた方が確かに早いと思はれ、私等は尾根を登る事にした。

七時三十分露營地を後に、二間程の川幅を持つ流を涉り、二俣の南の澤を僅か登り之れより南へ向つた。四、五十米も朝露に濡れながら熊笹を分けて登れば、やがて尾根の上の平坦な處に出る事が出來た。疎らな偃松の間は美しい下草に依つて彩られてゐる。バイケイ草が散在する、チングルマ草が奇異な花を開いてゐる。僅にして尾根は

終つた。そして私達の眼前に展開されたのは實に宏大な草原である。(露營地と岩の字の間) 雲の平の東側の急斜面に割される迄此の緑の毛氈は敷詰められてゐる。岩苔小谷の流は草原の彼方に横たはつてゐる事であらう。赤牛岳の頂より走る數條の山稜は皆高原に到つて姿を消してゐる。足取りも軽く、無意識の中に私達は草原の中央に誘ひ出されてゐた(八、一五)。草原の四圍には柵の林がある。四つ五つ美しい水を夕、えた池がある。自然の明鏡に浮ぶ薬師、赤牛そして雲と白雪を何に例へ得られやう。足元には可憐な虫取スミレ、モウセン苔の群生も見られる。

黒部川の上流には幾多の草原がある。祖父平、出水平そして薬師澤出合には廣大なカベケ原がある。此等の草原に立つて仰ぐ黒部五郎、或は薬師岳の姿も美しく又壯觀である。然し今この岩苔小谷の草原を圍る山々を仰いだ時、遙かに優る美さを知つた。雲の平はあくまで平坦である。黒岳の山稜は黒く鋭く聳えてゐる。

豫期しなかつた此の草原との奇遇に喜び、驚きつゝやがて南へ、見返りつゝ深い針葉樹林に分入つた。苔むす大きな倒木を乗り越えるのも無氣味である。可成り澤に近くなつて、前方が再び明るくなつてゐる。近づけば大きな丸い池がある。双六池程もあらう。(岩の字の僅か北方) 密生した針葉樹の倒影と雲の動きが浮び、如何にも幽邃な感を與へてゐる。一時は地圖に記入された池かとも思はれたが、錯覺を起さざる限り未だその地點ではない。(地圖に示されてある池は其の後澤を登り終る迄遂に見出し得なかつた。)

池を後に再び熊笹を分けて十分間も行つた時、岩苔小谷の流に出る事が出来た。(八、四五)(岩の字の直ぐ北) 静よりに動。私達は溪流の響に依つてあの静寂そのものゝ美しい草原と池の追憶より覺めた。昨日瀧によつて拒まれた流に再會、溯行の續けるといふ意識を呼び起したのである。

下流を望んで私達の位置の相當高まつた事を知つた、岩苔小谷は大きな落差を持つてゐる様である。薬師の頂は密雲に閉されて見えないが、金作谷の雪溪に豊富な残雪を仰ぐ事が出来た。其に反して上流は非常に緩かな流である、遠く源流地の山稜も見える。兩岸も相當開らけて灌木が生ひ繁つてゐる。最早上流には私達を拒む障害も見えない様である。流に喉をうるほして溯行を初めた。谷の宇附近の左岸よりガレが入つてゐる所を案じてゐたが、此處も大した事もなく、右岸に左岸に足場を求めて進む。溯行は面白い程捗る。

流の岩間には七、八寸の赤褐色のサンショ魚が數多く見られた。親しみ難い姿である、塚田は晩飯の茶にすると言つて幾匹か水筒の中に詰め込んでゐた。扇狀に開けられた水源地は數多の支流を持ち、眞白な残雪が強く眼を射る。此隘谷底に達した時、大きな岩の上に圓陣を作り名残の晝飯を開いた。

水源に近づくに従つて谷は悪場もなく、寧ろ平凡な程明るい東澤の姿に似通つてゐる。やがて流は大きな雪溪となつた。そして傾斜も加り偃松は密生し、岩苔小谷の溯行も終局が近づいた。私達は最も近い祖父岳の雪溪を登らず赤岳を目指して進んだ。烏帽子岳より來た登山者の姿が二つ三つ、足早やに鷲羽岳へ進んで行くのを見る。十二時三十分私達も遂に赤岳の尾根へ立つ事が出来た。前方には此の狭い山稜を境にワリモ澤がある。その澤の深く落込んだ、荒漠たる姿は湯俣川を聯想させるに充分である。

山稜の縦走路は非常に親しみを覺えた。湯俣川以來の平坦な路である、然し私達は又直ぐ此の路と別れて、黒部へ雲の平の偃松を分け様としてゐる。岩苔小谷は暗雲の下に靜かに横はり、流は廣い鬱蒼たる樹海の中を西北に走つてゐる。此時私の心は不思議に靜かであつた。(四、一〇、二一〇)

附 錄

紅葉と新雪の黒部流域

冠 松 次 郎

行程 大町より鹿島川を上り、大冷澤の西俣を経て、鹿島槍ヶ岳を極め、冷池附近より棒小屋澤本流を降り、棒小屋澤二俣に出て、東信歩道を下流に辿り、劔澤の中央部の『劔の大瀑』を見、戻つて、棒小屋澤、新越澤を横ぎり、幾多の尾根を昇降して、鳴澤、鳴澤小澤、赤澤を経て、籠渡しにより後立山側御前谷附近へ移り、平の小屋着。下廊下の鳴澤落口附近までを往復し、更に上流、上廊下の廊下澤の下手の泊場まで往復し、平の小屋に戻り、針ノ木澤を上り、針ノ木峠を越えて、信州大町へ歸着した十日間の紀行である。

大町から冷の泊場まで

第一日 昭和二年十月十三日午後十一時飯田町驛發、十四日午前八時三十分大町着。對山館にて朝食を認め黒岩直吉、松澤由藏、櫻井一雄の三人を雇ひ、十時五十分大町發、自動車にて鹿島川の釣橋手前の小熊原に到り、そこにて自動車を返し、午後十二時四十分鹿島の村、午後二時四十分、鹿島川本流に分れて大冷澤に入り、午後三時三十分、大冷澤と冷の西俣との出合（冷の泊場）にて野營。

對山館の三階から、鹿島槍、爺、蓮華岳の方を見ると、新雪は寒さうに山の窪に添つて、随分低い處まで下つて

○附錄 紅葉と新雪の黒部流域 冠

來てゐる。「信州もこの一週間位は毎日天氣が悪く、山頂の雲がとれないので、山を見ることが出来なかつた。今日久しぶりで見ると、この間まで殆どなかつた雪が、あの位積つてゐるのでは、多分二三回はやつて來たらしい」と主人の慎太郎君が云はれた。

新雪の山、紅葉の谷、その頃の黒部を知らない私は、あの晶燦として輝く新雪の山を越えて、深谷の底まで降つて見たならば、どんなに美しい秋が、山谷の大きな秋色が、私等を待つてゐることであらうと、私も、恐らく又岩永君も、この國境山稜の姿を見たゞけでも心はもうすぐろなのであつた。

なるべく早く山へ入りたいのと、秋の日の短いと云ふことゝを考へて、行ける處までと云ふ約束で、自動車を頼んで見た。やがて來た車を見ると、頗る古びたあやしげなものであつたが、山道へ入るには動搖が烈しい爲によいものは使へないと云ふことであつた。

ガタクリ自動車へ一行五人、荷物は十五貫を越えてゐたであらう、人も荷も共に詰め込んだが、とても入り切らないので人夫の一雄一人だけはステップの上に踞んで行くことにした。

大町の街を離れ、やがて籠川入の道と分れて鹿島川の方へと入つて行くと、道は急に悪くなつて、石高道の動搖は甚だしい。凹みの大きな處へ差しかゝると運轉手はかけ聲をする。一同手足を突張つて、身體が身體にぶつからないやうな姿勢をとる。車が二三尺飛び上つたかと思ふと、今度は横に危く倒れんとする、随分勇敢な自動車で、まるでタンクが山野を荒し廻つてゐるやうだと想像した程であつた。

私は幾年前、梓川の岸邊を島々まで通ふ乗合馬車に乗つたことを想ひ起した。その時分には、暑い日を途中の

立場で一時間位は屹度待たされたものであつた。前の馬車と後の馬車と相接して止められると、ともすると後の座に腰を下ろしてゐるものは、後の馬車の馬が自分達の膝の處まで首を延ばしてくるのに驚かされることもあり、前の座を占めて居ると、馬の糞や、放屁の臭ひまでがどされてウンザリすることが往々あつた、ガソリンの臭氣は馬の放屁のものにまさるとするも、そのガタクタなることは全く選ぶ處がない。

前山は樺黄色に染つて、眞紅の紅葉がその中からにじみ出てゐる。雪は可なり下まで来てゐるので、紅葉の上に茂つてゐる針葉樹まで皆薄白く雪を被り、その下から枝葉の蒼青色は深く息づいてゐる。それがまるで朱の毛氈の中に、乳青色の唐草模様を織り出したやうで美しい。蓮華岳の大きな雪尾根が時々見えてはかくれる。

黒松、落葉松、灌木の間を走つて行くこと一時間で、自動車は小熊原と云ふ荒地に止つた。もうこの先へは行けませんと運轉手が云ふ、實際私達は途中でとうに降りたい位閉口してゐたのであつた。

それから徒歩で、間もなく鹿島川の橋を渡り、鹿島の村へ出た、人家十一戸、近年になつて二度も火災にかかつたと云ふ、新しい好い家並で、山間の僻村としては富裕なのを思はせる。大町迄三里、冬は全く深雪に閉されて容易にそこ迄は出ることが出来ない。その頃は小供等の爲にこの部落で小學校の代用の教授が施されることになつてゐると云ふ。

もう村の人達は短い秋を冬籠の仕度にせはしい。伐採せられた薪は路傍に堀のやうに積み重ねられてゐる。長い冬の淋しい生活は間もなく始まるのである。

この村から奥は、樹林も山間の様子も頓に深山らしく、紅葉黄葉の中を貫いて行く流も幽邃に、川楊の大木が目

立つて來た。そして檜、楓、栂、七葉樹などに交つて落葉松の林が光彩を放つてゐる。

空が暗くなると時雨がどこからともなく、はら／＼と落ちかゝつてくる。やがて又雲の割目から力の抜けたやうな日射が谷に射し込んで四邊がいやに明るくなる。大した降りにはならないらしい。今頃の天氣は時々時雨れてくるが、長降りにならないことが何よりである。歩いてゐる内は可なり汗ばむが、休んでゐると素的に底冷がする。矢張り秋だなと思つた。

本流に分れて大冷澤に入り、午後二時十分廣い磧に出る。鹿島槍は密雲にかくれて見えない。前山の新雪、針葉樹に積つてゐるのは見事である。紅葉も益々色深くなつて來たが尾根近くは草蓆を立てたやうな枯林になつて見える。

川涉りをするのがいやさに架橋をして對岸（左岸）にうつり、本流へ分れて山道を行き、磧より藪に入り、左手に小澤を見て行くと、やがて岨道となる。仰げば鹿島槍前山の新雪と斷崖が寒さうに、然し中々立派に聳えてゐる。紅葉の中にネズが追々に交つて來た。新雪の森林は手の届くやうに近い。然し雲霧の爲國境山稜の眺めを逸したことは遺憾であつた。

午後三時半、大冷澤の左岸冷の西俣と大冷澤との出合の數間上手の、巨岩の傍に野營の仕度をする。冷の泊りと云ふ所で、すぐ前方から細流が石坂の間を二筋かゝつてゐる。それが冷の西俣の流で、私等は明日それを冷の池に上る豫定である。

こゝへ來たとき西俣の水量の多いのに直吉は驚いてゐた。私も秋は夏より水の大きいと云ふ事實を解しかねてゐ

たのであつた。

冷の泊り場より鹿島槍ヶ岳を経て棒小屋澤支流まで

第二日 同十月十五日、午前七時半冷の泊場發、午前十一時五十分『冷の長ザク』の上で中食、午後一時十五分國境山稜冷の池附近、午後三時二十分、鹿島槍ヶ岳頂上、午後四時五十分戻つて冷の池より二十間程南の鞍部を下り、小澤の雪上にて野營。

夜中に目を覺すと明月は枝葉の影を鮮かに天幕にうつし出してゐる。首を出して見ると空には雲の片翳もなく、月の輝き星の光は皎々として晝の如く、あたりはおく霜に白く、流木は月の光を受けて青光を反射してゐる、小用をたしに谷近くへ降りると、吹き下ろす鹿島風は非常な寒さで、震へ上つて又天幕へ潜り込んだ。

夜が白みそめると同時に起床、午前六時半、氣温は攝氏の一度である、對岸の西俣の水は昨日の三分の一位しかない、寒さの爲に凍つたのだらう。

巨岩の間をくゞつて顔を洗ひに谷川へ出て、思はず上流を仰ぐと、V字形の尾根の窓から鹿島槍が氷柱のやうに光つてゐる、私等はその方を見て手を舉げて喜んだ。布引の頭も随分白い。この旅行初めて間近く見た雪山は私等の心を有頂天にせずにはおかないのである。

大町で見た時にはこれ程あるとは思はなかつた。山頂が雲にかくれてゐるときには雪が降つてゐると云はれたが、昨日の雲がこの雪を置いて行つたのであらう。青空、紅葉、そしてこの雪山の輝き、何してもよい氣持だ。手の切

れるやうな溪水で顔を洗ひ、朝食を終つて出發したのは急いだつもりでも、午前七時三十分になつた。

架橋して西俣の方へ入つて行くと、水は流れてゐるが石の面は悉く氷つてゐる。流水の傍にある水溜は薄氷で張りつめられて、杖の先で叩くとカランと金屬でも打つやうな音がする。霜柱は一才位の厚さで足の下でガサ／＼と崩折れて、その下に朽葉病葉は厚く重なつてゐる。

少し登ると、新雪は凹地に少しづつ溜つてゐる。もう紅葉の華やかさはなく、落ち残つたミヤマハンノキ、ミヤマナ、カマドの葉は黄に黒にしぼみぢやれて、ミヤマナ、カマドの實は珊瑚樹のやうに赤い。大町ではこの木をタケサンショと云つてゐる。

渡鳥が高くうねつて行く。ピーピーと鳴きながら數百羽の小鳥の群は木の葉のやうに、山の頸を飛び廻り友を集めては里の方へ下つて行く。後からも又後からも。

今日から解禁なので里山ではカスミが到る處に張られて、鳥落しが賑かであらうと直吉が云つた。小鳥の季節、然し深い山や谷にはその頃はめつきり鳥がゐなくなるのである。

登るに従つて木の葉に新雪がへばりついてゐるのが目についてくる、やがて大雑の上に出た。行く手は粉を吹いたやうな新雪に粧はれた岩壁岩稜が高く續いて見える。そして木は著しく矮くなり薙の凹處に沿うて新雪は五寸位の深さで雪溪となつてゐる。破片岩の急峻な崩れの上や、凹溝について上つて行くと、足を下ろす度にずる／＼と迂る。こゝは「冷の長サク」と云ふ處で、夏は日射しが強烈な爲可なり困難する處である。

今朝あんなに美しく晴れてゐた空も、私達の喜んでゐた甲斐もなく、叢雲が山からはひ下りて來て、追々濃厚に

なり、山裾にあたつて鮮かに見えた山川の曲折や、紅葉の尾根々々、戸隠或ひは越後方面の山々をかくして、到頭私等の周りから總ての景觀を拂ひ拭つてしまつた。霧風は非常に冷たく、新雪を踏んで行く足は凍るやうだ。

最後に岩峯の角を左へ廻り、霧の戸ボソを漸く國境山稜に上り、やゝ越中側に下つて一息入れる。黒部谷も雲の動搖が盛んである。そして山らしいものは何一つ見えない。それでも約十分程休んでゐる内に、立山と劔のすばらしい新雪の姿が霧の幕と幕との合せ目から全容を現はしたが、私等の喜ぶのも束の間、僅か數分にして又潮の如き霧の大濤にばかされてしまつた。新雪は夥しいが岩稜だけは黒く露はれてゐた。サルマタの岩は粉雪で殆ど見分けられない程かくされ、カールの雪は晶々たる輝きを見せてゐた。

新雪の立山群峯、その東面の雄觀を初めて見た私は、その黒い無数の岩礁の上に叩きつけられたやうな粉雪、それが一つ／＼閃々たる光を放つてゐるのを見てすつかり喜んでしまつた。

鹿島槍の方を仰いで見たが、黒部谷から押し上げては鹿島谷の方へ崩れて行く霧の波で全くその姿を見ることが出来なかつた。

私等の登りついた處は冷の池から半町程南の方で、そこから一寸北へ降ると鞍部になつてゐる。直吉丈殘して棒小屋澤本流迄の様子を探らせる事とし、私等は荷を下ろして寫眞器のみを携へて鹿島槍ヶ岳に向ふ。

偃松や霜枯れた山草の間に冷の池の水は所々に溜つてゐた。布引の頭近くまでは大した登りはなく、一高一低上り氣味に重に信州側の崩崖、草崖につけられた一縷の山道を辿る。里の方が時々明るくなると、夕燒のやうに裾山の紅葉があぶり出され、糸魚川街道の一部が日に照され赤く光つてゐる。戸隠、妙高、火打の群山も霧の下に姿を

つらねてゐるがまだ新雪らしいものは見えなかつた。なだらかな越中側の雪の斜面を辿り、布引の頭附近になると雪は六七寸位になつて、雪に蔽はれてゐる岩の間隙や、偃松の中へ足を落すので、甚だ歩き悪い。それから折れ重なつた隆起を三つ程越えて、尺餘の新雪を踏んで午後三時二十分鹿島槍の頂點に達した。

頂點の標木に吹雪は凍つてツラ、となり、西方に向つて筈のやうな形をして、七八寸も堅く薄く凍りついてゐる。濃霧は風を伴ひ、手足は感覺を失ふ程冷たい。そこ／＼頂上を辭して元來た方面を辿つて鞍部に歸つたのは午後四時五十分。中食の残りを食して、直ちに唐槍の森林の中を樺小屋澤本流に向つて降る。

下草は少く、急斜面でも森林の中は手がゝりがあるので樂である。凹みに添つて行く内、自然にそれがヤゲンのやうな小澤となり、四方から絞り出た水はだん／＼大きくなつて遂に相當の小谷となつた。

雪は樹の枝にかかり、又林の下に二三寸積つてゐる。高度が高いのでそれが皆凍りついて表面だけは板の様に堅い。谷川を圍む石の面はツル／＼に凍りまるで鏡のやうに光つてゐる。そして水を浴びてゐるその周圍から蝦のやうな形をした氷柱が横に或ひは下に放射狀に一杯附着してゐる。

急傾斜の谷の中を、凍つた石の面を傳ひながら行くには非常の注意を要した。夏ならば最も安定のよい苔の平らな岩の面が、足を下ろすとツルツとこる、一寸でも足の踏み方が悪いと、ともすると身體は中心を失つて倒れんとする。どうかして樺小屋澤本流への落口まで出たいとあせつたが、日は何時しか暮れ初め、溪谷の夕は非常の寒さとなつた、薄暮を尙強行して谷を降つて行つた。近眼であり偉大なるスキー靴を穿つてゐる岩永君は足場が悪いので、夕暮の暗がりに冷汗をかいてゐた事だらうと思つた。



冷澤上の尾根より御岳方面を望む

岩永信雄氏撮影

まだこの澤も本流まで暫くあるのに、先の方が段落してゐるやうな調子なので、私は引返して雪の中を野營地をあさつた。細い狭い谷の底で平地などはある筈がない。先刻下りて來たとき途中で直吉が見ておいた、僅かばかりの平へ戻つて荷を下ろし、雪の上に枝葉を敷き、暗がりの中を枯木を集めて焚火を始めた、時に午後六時四十分。

狭いので天幕を張る餘地がない爲、皆の上へかけて寝ることにきめ、暖かい飯と汁を炊いて、冷えた腹の底へ鱈腹收めて勇氣を百倍し茶をすゝり、上等の菓子を味ひ、それから焚火を圍んで、谷の團樂が始まると、誰もが今日の惡闘を忘れてゐるやうであつた。今日も月は素的である。大白樺の繊細の梢の間からオリオンの星座が深い光をもつて覗いてゐる。

棒小屋澤源流より二俣の泊場まで

第三日 十月十六日午前九時出發、冷池附近から出る小澤を下り、瀧を三つ程越して、棒小屋澤本流との出合に着いたのが午前十一時三十分、廣闊な棒小屋澤本流の碛を降り午後一時五分鹿島槍ヶ岳から來る槍澤（新稱）の出合、午後二時半首澤（新稱）出合、午後二時四十分、棒小屋澤二俣泊場着、下流棒小屋澤の瀧の上附近まで見物し戻つて二俣野營。

心細い話だが、毎日夜から朝早くまでは晴れてゐる。然し午前七時、八時頃になると申し合せたやうに雲霧は一齊に起つて、晝間は殆ど陰鬱なそして氷霜の氣に閉されてしまふ。

兎に角此の夜は降られないでよかつた。水の流と野營地とすれぐで、私の身體から一尺足らずに水は流れてゐる。夜中に手を延ばせば容易に谷水が汲めるなどは振つた野營地だと苦笑した。午前二時頃目をさますと月は中天

に懸り、樹枝の影を冷たい雪の斜面に投じ、水の流は氷の動くやうに光り、奥深い大空の上を立山の方から霧の群が絶えず物凄しい輪郭をして動いてくる。蕭殺の氣に満ちた窮谷の景である、寝ながら天幕に手をあて、見るとその上は霜で凍り、砂のやうにカサ／＼音がする。

こんな惨めな野營地でも、食料が充分なのと、焚木が澤山あり、谷水の清麗な爲に、私等は食物の美味から得た慰安丈でも大したものであつた。

午前六時半起床。氣温は攝氏の氷點下二度半、野營地を始末して午前九時少し過ぎ漸く出發する。谷は雪と氷とツラ、で一杯である。朝だけに氷は一層堅く迂り易い。水の中を注意しながら降つて行くと、昨日戻つた處から僅か十數間で流は三丈位の瀧になつてゐる。夏ならば少量の水の中を、石の段を下つて行けば造作ないのであるが、今は石の上は滑るのでとても降りられないので、瀧の横の草崖をへつて瀧の下へ出て、少し降ると又同じやうな瀧の上に出た。右横の崖を藪傳ひに廻つてその下に出て、暫く水の中を行く中に本流の出合近くで四五丈の瀧に又前進を阻まれた。今度のは可なり大廻りになるので、ラインを出して大白樺の幹に結び、瀧の落口から二十間も下流に降り石の間を少し行くと、もうそこは棒小屋澤本流との出合で、下流に出ると左右の大尾根の間から立山と劔が立派に見えてゐる。新雪の輝いてゐる連峯、右から毛勝、劔、別山、立山の順に肌寒い雪の姿を連ねてゐた。

廣闊な棒小屋澤の磧に立つて、私はその源頭を顧た。爺ヶ岳の懐から急峻に薙ぎ落ちてゐる本流は中々峻險で、新雪は谷を埋めて可なり積つてゐるらしい。昨日私等の降りた處が最もよい場所であつたことが分つて、矢張り好い處を來てゐるのだと皆で喜んだ。

昨日國境山稜の上から見下ろした棒小屋澤兩岸の長大な尾根は、左程高いものとは思はれなかつたが、今日、本谷の底に辿りついて打ち仰ぐと、どれもく皆恐ろしく高大なのに驚嘆した。雄勁な針葉樹林の密生せる尾根の中腹、それから下の紅葉に燃えてゐる尾根先を見ると、私はうつとりと時のたつのさへ忘れて眺めてゐるのであつた。棒小屋澤本流と西澤小澤との間にある峻高の大尾根、その先に黒部川を限つてゐる棒小屋澤左岸の長大なものの重なりは如何にも幽深壯大で、私等ももう黒部中樞の景勝に入り込んだことを否むわけにはゆかなかつた。

廣い積を行く。雪は浅いが石原や草木の上に積つてゐる。進むに従つて積は愈々闊くなだらかなる。劍も見える。黒部別山も見える。恰度私等の今歩いてゐる附近一帯は劍、立山、黒部別山、仙人山の上からよく見える處で、去年の春立山側から望んだ時、残雪の中を溪流が幾筋も美しく見えたのはこゝらであつた。

午後〇時五分。右より小澤が入り、左からも小澤が入る。積に雪が少くなるともう私等の行く手は、紅葉の山が錯交してとても氣持のよい秋色がつづいてゐる。何時もなつかしく眺める棒小屋澤左岸の丸い堤のやうな尾根の色などは、其美、其麗譬ふるに物がなないと云ひたい程だつた。

午後一時五分。右岸の尾根が大きく口を開いて、鹿島槍ヶ岳からくる大きな澤が、可なりの押し出しを本流に突き出して流れ込んでくる。さすがに深い谷で源流は随分荒れてゐるやうだ。今日迄名がないので「鹿島槍澤」或ひは「槍澤」とつけたらばと自分は思つた。

それから一時間弱で、左の大尾根が正につきんとする處で、右岸の尾根の間を深く落ちてくる澤の落口に來た。それは牛首岳からくる牛首澤（新稱）で、その源流は随分悪いタル續きとなり、崩れも連続して見える、ヤゲンの

やうな澤である。

もう二俣（西澤小澤と棒小屋澤との出合）はすぐ下だと思つて下つて行くと、牛首澤の出合から少し左へ曲り、それから本流は右から左へうねつて、約二十間の間谷は急に狭く兩岸が壁で壓せられ、鬱蒼たる森林の下を瀧となつて奔出してゐる。

川通しは通れなくなつたので、右岸の崖の上を林の中をへつて行く。切り開けがしてあるので人夫は不思議な顔をしてゐた。私はそれは去年山崎和一君が、二俣から牛首澤へ上つたときの、長次郎のナタ目であると説明してやつた。

瀧の下へ出ると、西澤小澤は奔川となつて落合つてゐる。その下が二俣で、廣い河原には榻や榛の矮林が藪を爲し、霜枯れた草は算を亂して倒れてゐる。今夏大勢で泊つた跡らしく敷きつめた葉は黒く朽ちて、石の竈、枝を組んだ自在などそのまま残つてゐる。私等は今日の泊場をそこ定めて、野營の仕度にとりかゝる。午後二時四十分。棒小屋澤の水量は夏に比して倍位はある。そして夏の如く濁らずに美しく澄んでゐたのは嬉しかつた。

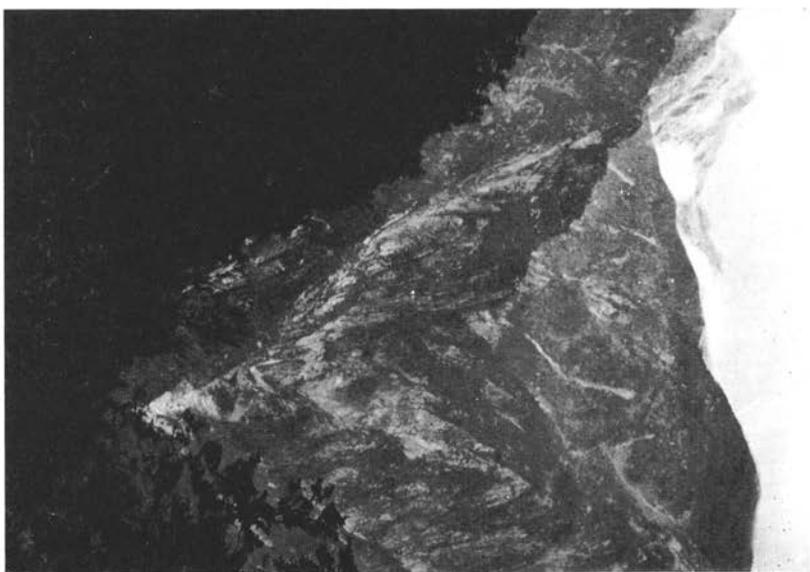
まだ時間があるので直吉を連れて私と岩永君とは二俣から下を見に行く。泊場から右岸を辿り、半町程小藪の中の石原を抜けて、右へ曲つて行くと大ナギの下へ出る。牛首つゞきの黒部の方へ出てゐる丸い大きな峯の中腹から谷底まで山の地肌は露出してゐるので、二俣の泊場から下の棒小屋の小屋場まで通ずる東信道は、道が崩れて泊場の先が暫く悪い爲、今ではこの崩れを左上に廻つて山側の道へ出て行くやうになつてゐる。

ナギの下を十數間も行くと崖になる。その上を横にへつて又川へ降り、右岸が行けないので、左岸に徒渉し尙



鳴澤附近よりオホカタカベン、内蔵之助平、御岳を望む

岩永信雄氏撮影



東信歩道より御澤の大布瀑を望む

岩永信雄氏撮影

暫く下つて行つて又右岸へ渡り直ちに左岸にうつり、草崖を五六丈上り、そこを乗越して澤へ降る。

もう棒小屋澤の廊下の入口に突き出てゐる山の鼻は赭黒い絶壁となつて迫つて來てゐる。谷の幅は僅かに二間乃至三間で、右岸の尾根先は百餘米突左岸の尾根先は數百米突の上から、美しい紅葉の山はブツツリと斷たれて、棒小屋澤の廊下を圍む斷崖となつてゐるので、岩壁と紅葉の對照は黒部らしい壯美の感を現はしてゐる。

峽谷は又左から右へと曲折してゐる。水が深いので私等は左岸の崖を匍ひ登り、巨岩の上を僅かばかりの磧に下りたが、そこで前進を阻まれてしまつた。もう瀧はすぐ下から始まるらしい。流木でもあれば對岸に渡つて更に數間は下れたのであらうが、それも得られず、又兩側の壁が高い爲に架橋に供する木もないので、戻ることきめる。上流を顧ると、兩岸から迫つてゐる灰鼠色をした立壁の中を、僅か二間程に狹められた奔流は滔々として落下してくる。壁の色彩、廊下の有様は此の澤の黒部落口附近のそれによく似てゐる。勿論規模は小さい。

往復一時間餘で、野營地に歸つたのは午後五時過。もう天幕も張られ、蒼茫たる谷間に露營の煙は悠々と立ち上つてゐる。泊場の周圍をとり圍んでゐる紅葉の美觀を賞しながら夕餉を終ると、夕星は靜かに淡碧の空の奥からまばたきを始めた。雲霧は斂まつた。今夜も明月であらう。

棒小屋澤二俣から新越澤の二俣迄

第四日 十月十七日棒小屋澤二俣から東信道を下流に辿り『釧ノ大瀑』を見物、戻つて棒小屋澤左岸の尾根を越して新越澤に下りその二俣で野營。

○附錄 紅葉と新雪の黒部流域 冠

雲が多く天候は思はしくない。その爲か気温は著しく高い。今日は朝の中に、劔澤廊下の中央部にある劔ノ大瀑を見に行く豫定なので、野營地はそのまゝにして、寫眞器のみを携へ、東信道について右岸の山嶽を横に登つて行く。

大正十四年の夏初めて出来た東信歩道は、こゝ二年の間全く手入れをしてないので、崖崩れの爲に道の幅は僅か一尺位に狭まり、谷の方に向つて傾斜してゐる。この道もこのまゝで置けば一二年内には完全に荒廢してしまふが惜しいものである。殊に草崖につけられた處になると、今では皆かなりの難場になつて、なまじいの山登りよりも遙かに悪い。

大難を横ぎつて崖側に上り、尾根なりにその出入を廻つて行くと、目の先に連なつてゐる棒小屋澤左岸の尾根が漸次に左へ廻つて、それがつきるあたりから、黒部別山の峨々たる山骨が威容を現はして來た。そして約一時間程歩いてゐる中に、私等は恰度十字峽の眞上にあたる邊にまで辿りついた。正面に黒部別山と仙人山の嶮壁が大きく口を開いて、その割れ目から劔澤中央部の瀑布「劔ノ大瀑」が夥しい水量で、立ち騰る水煙の中をキラ／＼と奔落躍動してゐる。

今夏私はこゝで劔澤を見て、天下の絶勝と叫んだ。慾を云ふと少し遠くはあるが、日本隨一の峻峻劔澤、その大瀑布や岩壁の雄大とを併せて見られるこんな景勝の地は又とあるまい。

「劔ノ大瀑」を眺められる處、それは全く東信道が與へてくれた資である。

あの美しい棒小屋澤左岸の丸い尾根が、ブツツリと先が截たれて、黒部川に向つて薙ぎ落ちてゐるあたり、走馬

燈のやうに黒部別山の太岩壁は姿を現はす。劔澤中央部へ乗り出してゐるそのトサカ尾根の絶壁と、仙人山の南峯二一七三米突の劔澤寄の斷崖とが膝を交へてゐる處で、「劔ノ大瀑」は約百五十米突に達するその全長が大略四段に分たれ、劔澤全流の驚く程の水量が、水煙を騰げて水車のやうに動いてゐる。その釜は濛々たる水煙の爲に見えないが、瀑布の下からつとくヤゲンのやうな深流が、稍廣い奔流となつて落口の尾根の大森林の裡にかくれて行くのがよく見える。

深秋の今、黒部別山の太壁も、トサカ尾根や仙人山の斷崖も、その赭黒色の壁の面には蔦葛や灌木がまるで巨人の體から血がにじみ出たやうに、眞紅の紅葉を一面に點綴してゐる。

トサカ尾根と仙人山の壁とが交錯した上から、劔澤上流の大雪溪は白龍の如く天上に向つて躍りあがり、小窓に於てつきてゐる。新雪に粧はれた小窓の頭も、大窓の頭も、壯麗を極めて、日に輝いてゐるその晶燦たる光は、劔澤の豪景に一層の光彩を添へてゐる。

新雪に輝く峨々たる山骨、小窓の雪溪、大絶壁の錯綜、瀑布の奔落、釜、奔流それから目のとどく限り紅葉黄葉は山を埋め谷に涉つて、雄大なる黒部流域を錦繡の一大畫巻物とし、恐らく秋の見せる最も大いなる景觀を私等の眼前に現はしてゐる。

黒部の秋は大きいなあ！ 友と共に思はず讚嘆の聲を洩らした。

この夏群猿のたはむれてゐた處はすぐこの先であると云ふと、人夫はその方へ廻つて行つたが、今度は空しく歸つて來た。

私等はそれから元來た道を野營地へ戻つた。瀑見物に二時間程を費して、午前十時三十分旅装をとりのへて、新越澤の方へ向つて棒小屋澤を涉り、それから棒小屋澤左岸の尾根を登り始めた。

瀑を見に行つた間にはよく晴れてゐたのであつたが、陰晴定めない秋の空は、又一面に密雲の蔽ふところとなり、濃霧は山峽を繞つてその間から時雨が絶えず襲つてくる。里ならば雨の筈であるが、この深溪では時雨も雪となつて粉のやうに森林の間を旋つては私等の旅衣にふりかゝつてくる。手足は悉く冷え、休むのさへ寒さの爲に容易に出来ない。

靜かなうら淋しい深山の道では、さら／＼と降りかゝる雪の音と、遠く脚下に鳴る棒小屋澤の瀬音だけが聞える。ヂクザクに登る急峻な道、大分崩れたその跡を病葉を踏んで行くと、次第に傾斜は緩くなり、約二時間にして尾根近くの緩傾斜地に達した。枯枝を集め、紅葉を焚いて身體を暖め、漸くにして中食をとる。一羽の大鷲が大きな輪を描きながら、不時の侵入者達をのぞきにきた。

霧がはげると脚下に棒小屋澤の清瀬が紅葉の間から光つて、當面に牛首につゞく二三〇二米突の丸い峯が大きく見える。谷で見た時には殆ど山頂からかゝつてゐるものとさへ思つてゐた大きな崩れが、こゝまで登ると僅に四分の一位の高さから曝け出してゐるので、紅葉はその周圍を包んで美しい。そこばかりではなく棒小屋の谷を中心として見渡す限り山々は燃えるやうな色を埋めてゐる。

やがて尾根上へ出て、唐檜の森、白樺の太木の間を南に向つて迫つて行く。もう立山も剣もよく見える處まで出てゐるのだが、雲霧に閉ざれてすぐ近くの黒部別山さへ見ることが出来ない、こんなよい尾根道へ出て私等がこの



(上) 新越二俣野營地より黒部別山を望む 岩永信雄氏撮影
(下) 御山谷小屋場より新雪に輝ける立山全峯を望む 同

旅行で最も期待してゐた景色の唯中へ入つてゐるにもかゝらず、その美しい山の姿一つ眺めることが出来ず、私等が會つて辿つた下廊下の中心を爲す激流の一部すら見ることも出来ず、空しく行き過ぎなければならぬと思ふと、
く幽鬱の感に襲はれるのであつた。

今辿つてゐる尾根は、岩小屋澤岳支脈の一峯、二〇六七米突の峯から棒小屋澤と黒部本流との間に割り込んでゐる長大なもので、私等はこの尾根を登つて二〇六七米突の峯の西側を廻り、下ノ垂澤の上を横ぎつて、同じ峯から黒部別山澤に向つて出てゐる尾根に移り、それから間もなくその尾根を離れ新越澤の谷へと降るのである。

尾根上を辿つて行く中に、下ノ垂澤の上にあたる大崩れの上縁に出て、それを廻つて尙上つて行くと、漸くにして、黒部別山澤の方へ出てゐる尾根に移つた。下が晴れてゐればこの邊から、下ノ垂澤落口の下流から棒小屋澤落口の上手までの奔流がよく見える筈である。

この尾根を降ること三四十間で、東信道は尾根に岐れて新越の谷に向つてつけられてある。そこを廊下の追分と云つてゐる。尾根に添うて黒部川の方へ降れば下廊下の徒渉點に出られる。然しこれは八月下旬か九月上旬の水の少い時にかぎるので、夏でも何時でも通れると云ふ譯には行かない。

新越澤に向つてこの尾根の出入を迂回して行くと、森林は益々美しくなる、栂が最も多く、檜、白樺が交つて、梅、姫子松、落葉松の大本は、蟲々として廊下の壁の上までつゞいてゐる。落葉松の紅葉はまだ少し早い。

山がよい爲に道は中々抄つて、幾つかの尾根の出入を廻つて行くと、もう新越澤の大きな谷は脚下に見え、その泊場まで鮮かに指摘出来る。紅葉は矢張り素晴らしい。尾根から斜左に下つて崩れを越し、小流に添つて藪の内を

○附錄 紅葉と新雪の黒部流域 冠

一一八

礮に降り、夏のまゝであつた丸木橋を渡つて、午後三時三十分泊場についた。棒小屋澤の二俣から約五時間、廊下の追分からは一時間行程である。

空は依然として悪く、時雨は時々襲つてくる。間近である黒部別山も國境の山稜も姿を見せない。天氣の悪いのは今日で四日である。東京を發つてから山日和にはまだ一日も出會はないので、私等は少からず氣をくさらせてしまつた。これで十日も続いたならば今度の旅行の收穫は誠にみじめなものであらうと思つた。信州の方では十日も天氣が悪かつたので、もう天氣になつてもよい時分だがな！と直吉達もつまらなさうであつた。

闊い礮に天幕を張つたが、時間があるので焚火を圍み茶を入れて山の話に興じた。夜に入ると空は益々暗くなつて、氷の粉末のやうな雪がさらさらと天幕に降りかゝつて來た。

新越澤二俣より平の小屋迄

第五日 十月十八日、午前八時四十分野營地出發、午前十一時鳴澤と新越澤との間の尾根上一八〇〇米突附近、午後一時鳴澤、午後三時瀧の連続せる澤、午後四時半赤澤落口、午後五時十分御前谷、午後八時十五分平小屋泊。

朝起きて天幕から出て見ると、四邊は昨夜の雪で眞白になつてゐる。雲にかくれて尾根上は見えないが、雪は森林一面に降り積つて、その下に紅くくすんでゐる紅葉は如何にも物寂しい。落葉はもうまたゞく中で、嚴寂な冬の手に壓へられてゐるやうに見える。

天幕の周りの礮に茂つてゐる灌木の藪、草の葉などに付いてゐる雪は、平地の新雪のやうな軟かさはなく氷のや

うにへばりついて振つても容易に落ちない。

朝早く出發する考へでゐた私等は、空具合が心配な爲自然と遅れて、午前七時半に漸く朝食をとり、代る代る空を眺めては今日の天候を氣遣つてゐた。風が後立山の方から吹き降りてくると稍愁眉を開き、天上に碧空の覗くのを見ては喜んでゐると、何時の間にか濕つた風が黒部谷の方から吹き上げてくる。この澤の落口附近から雨雲が尾を曳いて後からもく登つてくる。そしてちらちらと粉雪を落しては、谷中を陰鬱な寒冷な空氣の中に閉してしまふのを見てがっかりする。

然しよいあんばいに午前八時頃になると上空が明るくなり、薄雲の間から碧の色が輝いて來た。漸く雲が千切れ始めたらしい。

その内に谷向うの黒部別山の壁が見えて來た、大岩壁でぎつしりと鎧はれてゐる黒部別山も、その菱壁の表面までも昨夜の雪で肌寒い程の白さになつて、新雪も壁も共にきら／＼と輝いてゐる。丸い頂上は雲にかくれて、筍立してゐる大岩壁が雪の爲に浮び上り、この山を想像も出来ない程立派なものとした。

光る／＼、何處を見ても朝日に照射されてゐる山稜や山側はまぶしいやうだ。新越澤の上流を願ると、そこにはもう岩小屋澤岳が姿を現はしてゐた。一昨日見たときにはゴマ鹽をふりまいたやうにしか見えなかつたこの國境の山々は、今朝は何と云ふ美しさであらう。

晶燦たる白雪の輝き、新雪でなければ見られない、純白なそして潑刺たる光と澤とを帯びてゐるその山稜の下を埋めて、落葉し盡した白樺、ナナカマド、ミヤマハンノキなどの密林は全く樹氷に蔽はれて、枝が一本一本水晶の

やうなツラ、となつて磨き上げられてゐる。その下から新雪に粧はれた梅、唐檜、黒檜、姫子、五葉の雄勁な針葉樹林がつゞき、それから下は延々として黒部谷の底まで。燃ゆるやうな紅葉は、山頂、山坂、溪側に渡つて、深秋の最後の光彩を、まばゆい程の華々しさを飾つてゐる。雄麗とも華麗とも形容の出来ない深秋の粧ひ。

大きな黒部の秋！ こゝでも私等は嘆美の聲をもらしたのであつた。

見てゐる中に空は晴れ渡り、雲は何處へか消散して、私等が幾日も豫想し、待ち構へてゐたやうな朗かな秋日和が、空にも山にも谷にも充ち満ちてきた。

午前八時四十分出發。左岸の大尾根につけられた道を登り始めた。道は割合によいがひた登りになる。灌木、笹、草叢に雪が積つてゐるのが解けかゝつてゐる中を分けて行くので、少し登ると服にもリュックサックの上にも瞬く間に二三寸も積つてしまふ。然し天氣がよいので殆ど冷さを感じない。

森林の中を射し込んでくる陽光を一杯に浴びて、谷向うの國境山稜の雪尾根や樹氷などを眺めながら、昨日や一昨日とはまるで違ふのんびりした氣分で、急峻な道を右に左に登つて行く。尾根近くになると白樺の大木が目立ち、やがて私等は針葉樹の域に入った。

山稜に登りつくともう黒部の深壑を隔て、立山連峯の雪は木の間にぐれに光つてゐる。恰度森の切れ目へ出て、雪山を見ながら一息入れる。

新雪の影しく被ひかぶさつた梅、黒檜、五葉、などの大木の間から、明るい黒部谷は眞紅の霜葉に燃え立つてその中からトサカ立ちに黒部別山と丸山の山骨が豪然として聳えてゐる。その大壁を壓して我が日本北アルプスの王



東信歩道より丸山を隔て、新雪に輝ける立山東面を望む

岩永信雄氏撮影

者、立山群峯は、きらびやかな新雪と、峨々たる無数の菱壁とをもつて山體を埋め、雄山、大汝、眞砂、別山から劍に到る空線の抑揚美と、その雪山とその懷にねむる高原及び縦谷の綜合美とは、日本アルプス中の第一美觀を形造つてゐる。觀望に最も好い位置にあるのと立山がその最も複雑な東面を展べてゐる爲とではあるが、この眺望こそ今秋の旅で、私等を満足せしめた第一のものであつた。

時は秋である。草は悉く凋倒し、尾根上の闊葉林の葉は既に地に委してゐる爲、夏に比して眺望の自由なのは勿論で、大氣の澄明、新雪の華やかさは、私等に與ふる印象を一層壯麗のものとした。

少し登つて後立山の方を顧ると、棒小屋澤左岸の大尾根の上に、何時の間にか鹿島槍が胸から上を挺んでゐる。二三日前登つた時にはまだ頂點の外は、偃松や森林が出てゐた爲大分蒼黒いアザを残してゐたが、昨夜の雪に蔽ひつくされたのであらう、今朝はまるで眞白で、日を受けて光つてゐるその色は、純白とか白妙とか云ふ言葉ではとても云ひ現はせない程の輝きをもつてゐた。

牛首も眞白くなつて、その下の二三〇二米突の丸い峯も、棒小屋澤左岸の尾根も、可なり低い處まで雪で薄化粧をされてゐた。目の届く限り山坂を埋めてゐた紅葉も、もう雪の下に凋落を待つてゐるのであらう。

奥鐘山、東谷山、北仙人山、ガンドウ尾根などが下流にあたつて遠く霞んで、その間からハツバの音が聞える。日電の工夫等はこの短い秋の日を雪のくる迄、セッセと道を開いてゐるのであらう。左上に毛勝連峯、右上に清水平附近の雪が夥しく光つて見える。

この二三日天氣の悪い爲に苦しめられた私等は、今日半日の快晴ですつかりそれを償はれて、觀賞に撮影に時の

たつのをさへ忘れてしまつた。

新越澤から鳴澤へ横ぎるのには、随分高い約一八〇〇米突位の尾根上まで登らなければならぬ。その爲に眺望は頗るよいが、可なりの昇降をつゞけることゝなる。

尾根先の出入に沿つて森林の中を、落葉松の黄葉の美を賞しながら降つて行くと、鳴澤の流水が見えるあたりから、大きな草の斜面になつてゐる。夏は草が深く茂つて日射が強草いきれのするいやな處であるが、今はそれが皆倒れ朽ちて身體一杯に暖かい秋の日を受けて行くのが却つてうれしい。

草崖の中を折れ曲つてつけられてゐる急な道を行く。鳴澤まで降ると日影になるので寒い爲に、日當りのよい處を選んで腰を下ろし中食をとる。位置が随分低くなつたのだが、倒れた枯草の中で遮蔽物が全くない爲に眺望は素晴らしい、黒部別山の大大タガピンと丸山の櫓岩の上に新雪の立山本峯は翼を擴げて高く大きく颯爽たる雄姿を連ねてゐる。鳴澤附近は棒小屋澤や新越澤に比して紅葉は劣るが、落葉松の黄檗色は漸く目立つてくる。

草藪を下つて崩崖を鳴澤に降り、直ちに又草崖をへつて鳴澤左岸につけられた道を辿つて行くと、もう道はそれからは大して登りにならない、草藪の域を脱すると森林は又鬱蒼として美しくなる。顧ると新越澤から乗越して來た尾根の高みは五十度以上の仰度を示してゐる。

その大尾根の黒部川へ低下してゐる後から、下ノ垂澤左岸の尾根、即ち岩小屋澤岳の支脈の黒部別山澤に向つて下つてゐる廊下の壁尾根の先が、膝を立てたやうになつて乗り出してゐる。上流から見ると全く岩壁を見せない闊葉樹の森林の濃密なこの尾根は紅葉が眞盛りで、まるで朱の絨氈のやうな色を染め出してゐた。

鳴澤の谷の上を暫く廻つて行くと私等は廊下の上半部をよく縦観する位置に出られる。こゝも夏通つたときには草や灌木の茂りに遮られて、黒部の水などは全く見られなかつたのであるが、秋の有難さはこの澤の出合の下手から廊下の徒渉點まで、尙その行きづまりの黒部別山澤と、その左岸の壁まで鮮かに見える。新雪が非常な勢で解けて落ちる爲、黒部の水量は夏よりも遙かに多く、徒渉點附近の美しい澗はかなりの波を上げ藍靛の水は刷毛でかすつたやうに白く泡立つてゐた。

垂直にそゞり立つた赭黑色の雄大な新越の壁、新越の瀑の落ち込む附近の岩壁の面白い曲折などが手にとるやうに見える。ハンノ木平の紅葉は今が絶頂であるが、それから下流の兩岸は四季を通じて壁の世界である。

小尾根の先を廻つてナル澤小澤（瀧の多い澤）に降ると、すぐ上に十數丈の瀧が二段になつて落下してゐる。水の多いのと形の優れてゐる爲に中々壯大であつた。

赤澤の方へ尾根を廻つて行くと、大タテガビンの層壁と丸山の壁との間から、内藏ノ助の窓が見えて來た。その奥を塞いでゐる眞砂岳つゞきのなだらかな尾根の上から、ハツ峯が第一峯から順々に、そして離れ々になつて菱形の頭を立て並べて、最後に劍のゾコが丸く大きく飛び出してゐた。

赤澤に乗越す最後の尾根のくびれの處までくると、又廊下がよく見通せる處へ出る。こゝは夏にもよく見えた處で、内藏ノ助谷落口からナル澤小澤の落口を経て鳴澤の落口に到る奔流が面白く見え、鳴澤落口の上手の壁とその左後へ丸く大きく削立してゐる新越對岸の嶺壁は随分壯大であつて、その壁の突出の爲に下流の屏風岩や、徒渉點の方はかくされてゐる。

○附錄 紅葉と新雪の黒部流域 冠

二二四

赤澤の支脈が恰度内藏ノ助谷の落口に向つて斷ち落されて、赤澤の壁が高く聳えてゐるあたりは、森林岩壁の様は中々雄大で、落葉松の林は目立つて美しい。東信歩道はこの壁が黒部川へ出てゐる二町ばかり尾根寄のくびれを通つてゐるので、そこを乗越すと私等はもう赤澤の流域へ出るのである。

少し降ると、丸山が右前に、黒部谷を隔て、大きく屏風立ちになつてゐる。圓錐形の同じ大きさと形をもつてゐる二ツの山を、緩いつり尾根が聯絡して、如何にもゆつたりとした面白い形を見せ、岩壁の上を針葉樹は尾根上まで濃密に茂り、山の輪郭は夕空にくつきりと浮び出てゐる。

その上に、その丸い山と鍋づるを逆しまにしたやうな柔かな山稜の上から、幾つもの寶玉が、立山本峯、眞砂、別山、劍岳が皆その頂點近くだけを、まるでダイヤモンドのやうに、きら／＼と夕陽にきらめかしてゐる。

まるでアルペンのやうだ！ それは岩永君と私とが同時に叫んだ言葉であつた。

内藏ノ助谷寄りの壯麗な蟻壁と、廊下に出てゐる高大な絶壁とがつきる邊から、紅葉は丸山の中腹以下を埋めつくして、針葉樹の間に落葉松の金樟色は夕暮の谷間に光を放つてゐる。

尾根から赤澤に向つて斜左に降つて行くと、左上に赤澤の叢峯が見えて來た。これも昨日の雪で第一第二第三峯とも皆薄白く山の窪を彩り、その新雪も嶺岩も夕陽を浴びて素的な山の色、奇抜な山の容を連ねてゐた。

もう午後四時で、夕日は尾根上に輝いてゐるが溪谷は既に黄昏れんとしてゐる。下を見ると黒部の清流は滌々として眼下に大きくくねり、その流を圍んで無限につらなる紅葉の美しさ。

私等はとう／＼黒部の秋の唯中へ入つてしまつた。何と云ふ美しいそして大きな秋榮えであらう。白いものは黒



東信歩道よりハンノキ平下流の本流

岩永信雄氏撮影



ハンノキ平手前の岩壁と清流

岩永信雄氏撮影

部の流と十重二十重の重錯してゐる尾根のかき合せから見ゆる雪の山だけで、見渡す限り谷も山も濃紫色の深い色は大溪谷を埋めて閑寂としてつゞいてゐる。

私等は秋の女神の奢餐を満喫した勿體なさをさへ感ずるのであつた。

仰げば空のみは淡碧に澄み渡つて、金樺色の夕陽の光芒は長く黒部谷の上にその幾筋かを放射してゐた。

赤澤へ降つたのは午後四時半。短い秋の日はもうほの暗くなつて來た。それから澤を横ぎり、本流に沿つてつけられてある東信道を暫く行くと御前谷の落口の前に出た。こゝでも立山の富士ノ折立の峨々たる山骨と、その隈を埋めてゐる新雪が夕日に光つてゐる姿を見た。御前谷の上流を歴して聳えてゐるその勇姿、私は夏通つたときに氣づかなかつたので、今日は意外であつた丈に非常に嬉しかつた。

私が立山につきまゝとつてゐるのか、立山が私につきまゝとつてゐるのかは、どちらでもよい。然し立山も黒部川も季節それ／＼の變化を以て、雄大を以て、私を慰めてくれることを思ふと、私は感喜の念に涙ぐましくなつた。

川へ降りて左岸を日電の小屋場の前に出て見ると、小屋は屋根をはづして骨組だけになり、天幕も取り去られ、川中にあつたボーリング用の船も岸邊に上げられ、全く人影も見ない。

私の豫定では今日は御前谷に泊り、米を補充して明日下廊下へ下り、又戻つて平に一泊して、更に上廊下へ行くつもりであつたので、日電の人達が引き上げてしまつたのを見て少からず失望をした。後に聞くと十四日に雪が谷へ來たので、皆そこ／＼に小屋をたたんで十六日にザラ峠を越えて引き上げてしまつたと云ふ。

私等は此方岸から立山側の方へ渡してある鐵線へ、持つて行つたラインを控へ繩として添へ、約三十分程費して

對岸に移り、それから暗がりを二つのランタンの光をたよりにして、平の小屋に向つて歩いて行つた。晝ならば景色を見ながら時のたつのさへ忘れて行ける程の處であるが、夜道は中々悪い。眞暗がりの中を僅かに蠟燭の細い光をたよりに、御前谷から平まで約二里の間、峠道を皆で注意し合ひながら、先行者の跡を踏んで行く。道とは云ふものゝ石は到る處に凸凹の坂を造り、棧道、釣橋、礮、崩れ、崖側などを行くことは容易でない。實際一足踏みはづしたならば命のないやうな處が、幾ヶ所も連続してゐるのであるから。

御山谷の丸木橋を渡り、本流にかけた四十數間の大釣橋の上に、鐵線を掴みながら行くと霜で手がちぎれさうになる。暗に光る激流を脚下にして、遙か上流を仰ぐと、天の川は恰度木挽山の上から黒部谷を豎に私等の頭上に迄高くかゝつてゐる。

霜夜の寒さ、私はビツケルの頭へそつと手をあてゝ見た、そこにも霜らしいものが掌の下で沁るのであつた。

御山谷の釣橋を渡つてから中の谷の釣橋迄隨分道のりが長く、中の谷近くなると狭い崖道は案外悪かつた。釣橋へかゝるともう平の小屋の燈火が上流の森林の間から、星の降るやうな空と、白く大きくカーヴを描いてある黒部の大流との間に壓せられて、お伽の國の山小屋のやうな、なつかしい然しながら寂しい影を投げてゐた。

釣橋を渡り終り、小さな峠を越して山坂を降り、小屋を訪れたのは午後八時十五分、戸を叩いて案内を乞ふと中から出て來た人は、私等があまり遅く暗がりを訪ねて來たのに驚いたやうであつた。私等は一夜の泊りを頼み、大町出發以來初めて立派な小屋の疊の上に打ちくつろいで、疲れた四肢を延ばして寝ることが出來た。

平より下廊下へ

第六日 十月十九日、午前八時出發、御山谷、御前谷、内藏ノ助谷の落口を過ぎ、鳴澤落口の手前より平に戻る。

昨夜は遅く迄、暗がり道を歩いたので、大分疲れて、曉方まで一度も目覺めずによく寢入つてしまつた。

午前六時に起きて見ると外は霜が雪のやうに白く、四方の山の紅葉は澄み切つてゐる秋晴の空から浮び出てゐる。そして何時の間にか小屋近くまで歩み寄つて來たやうに、すぐ鼻先につゞいてゐる紅葉の尾根の上から南澤岳の頭が白く尖つてゐる。

顔を洗ひに川原に降りて行く。素足に下駄をつつかけると足が冷やりとする、まるで東京の寒中の寒さである。ふく霜は草の上にも、木の葉の上にも、無造作に置き捨てゝある粗板や庖丁までを凍りつけて、小屋から洩れる朝餉の煙は如何にも秋らしい静けさと寒さを感じしめる。

磧も見渡す限り霜で白い。悠々として流れ去る汀の水で嗽ぎ顔を洗ふ。水は思つたよりは温かで、紅葉清川のたゞずまひ、夏とはまるで違ふ、落付きのある大きな眺めにうつとりとして、大空を仰ぐと、日は高く尾根の頂を照して鬼ヶ岳につゞく獅子の岩峯の雪を淡紅うすあかに染め出してゐる。

今日は下廊下を見に行く豫定なので朝早く出發する積りでゐたが、夜明の遅い秋は中々早く仕度が出来ず、飯をすませて出かけたのは漸く午前八時半、不用の物は皆預けて行く。

左へ林の間を行くと、榛の太木の間から赤澤岳が見える、昨日迄の雪は殆ど消えて跡方もない。

顧ると木挽山の頭は随分白い。春新緑の最も鮮やかであつた處は、紅葉も又頗る美しい譯で、針ノ木澤左岸の黒部寄の丸い山、中の谷から御山谷に到る間、御前谷と赤澤を中心とする附近などは、何とも云へない雄大な秋色を展べてゐる。

昨夜歩いて來た道を、中の谷の釣橋を渡り、元ザクボ澤の處から礮に降りて、川一杯に峨々として連なつてゐる赤澤岳を撮る。

小スバリ澤を横ぎつて、岨道から上流を顧ると、新雪の木挽山を中心に紅葉の深い兩岸の山を配して、黒部川は二三町の幅をもつて快闊な礮と、きらめく清流と、大きく描いたカーヴの優美とを以て絶景を形造つてゐる。

御山谷の落口の平にある小屋も骨組だけ残してすっかり片付けられ、その後の紅葉や針葉樹の森を壓して立山本峯の雪の姿は恐ろしく大きい肩幅をもつて聳えてゐる。

昨日夕暮龍渡しで漸く辿りついた御前谷の小屋で暫く休み、それから立山側を御前澤を横ぎつて川沿ひに降つて行つた。高い／＼後立山の尾根から、針ノ木岳、スバリ岳の岩頭が首を並べて、その立派な岩壁の皺や棚に新雪の吹き溜りが可なり見えてゐる。

御前谷から下の歩道は日電の工事が入らないので、草が茂り、崩壊した所もあつて、上流よりもずつと悪くなる。逆光線に輝く谷川程美しいものはない。顧ると針葉樹の蒼林、紅葉の山側は煙るが如き蒼紫色或ひは紫褐色に變じ、谷川のみまばゆい程の光に満ちて、流動する水、奔流する流は水晶の如き輝きを放ち、然もその陰影は極端な

赤澤岳猫の耳の岩峯

岩永信雄氏撮影

クラノスケ澤落口附近より撮影したるものにして、新雪に輝ける赤澤岳の亂峯とその山壁とを窺めるものなり。

昭和二年十月十九日撮影

即辟二平十日十式日辯邊

の山巒をま監ゆるよのむり。

のこじつ涼雲に賦ける赤髭岳の巒峯とち
くまへスヤ碧蒼口樹茂より巒邊」たるよ

崇永言華刃巒邊

赤髭岳巒の耳の巒峯



る碧黒色や藍紫色に汚れてゐる。

黒部谷底の紅葉の雄麗なのは、後立山側は赤澤を中心として、立山側は御前谷から下流數丁の處で、流水の走向や曲折も大まかで立派である。

赤澤の落口からすぐ下で、黒部川は大きく左へ曲つて行く、そこは日電の工夫たちが「大曲」と云つてゐる處で、恰度その邊から丸山の壁は高大な露出となつてゐる。右に赤澤の壁（これは日電のものが天狗壁と云つてゐる）が現はれ、左に丸山の壁が丸く折れ廻つてゐるあたりから、雄大な壁の立派なのに引き付けられて、私等は何時の間にか紅葉の美を忘れてしまふ。

丸山の大崩れの横を廻つて岩場にうつり、爆破された峠道を行くと、どつしりとした赤澤の壁の稜角は、内藏ノ助谷の落口の前から高く天半に聳え立つて、その後から大タテガビンの下を埋めてゐる紅葉が、雄大と幽靜との對照の美を爲してゐる。丸山は落葉松の名所で秋はその黄樺色の蟲々と立ち上つてゐる叢林の美は何とも云へない。

黒部谷にふさはしい木、廊下を飾るのに最も適當なる樹木は落葉松と、黒檜とを置いては他にあるまいとさへ私は思つてゐる。榎、姫子、五葉なども勿論よいが、寧ろ林相に變化を與ふる意味に於て私はそれを賞美する。

顧ると、上流に同じ赤澤の大壁の岩稜の後から、鯨の齒のやうな赤澤岳の亂峯が聳えて、時雨模様の叢雲はその峯頭をからんでは後立山の方へ流れて行く。

壁から川へ降りて内藏ノ助谷の落口に廻り込み、それから丸山の壁を撮りに三十分程内藏ノ助谷を溯つて行くと、時雨雲は谷上一杯に亂れ擴がつて、大粒の雨がばら／＼とかゝつて來た。

午後一時。大急ぎで落口に戻り、私等はそれから危い丸木橋を渡つて廊下に入り、岩壁と激流とを賞しながら降つて行つた。

峻高壯麗の岩傳ひ、幾度來ても飽きると云ふことを知らない廊下の美景は、秋色も亦捨て難い處がある。殊に木の葉が疎らになり、草が倒れて脚下に奔落する流は夏よりも遙かによく、殆ど全流を見通すことなく見らるゝ便利がある。夏よりも水嵩は遙かに大きく、岩壁は益々その雄大を發揮する、水落ちて石露はると云ふやうな景色ではなく、水多く淵深く、木疎にして岩壁益々その大いさを加へるとも云ふべきで、これが秋の下廊下の特色であると思つた。

内藏ノ叻谷の落口の處で右に曲走してゐる奔川は、その下敷町で又左へ曲つてゐる。そしてそこで大きな瀧津瀬を爲して流は狭められ、その下が立派な淵となつてゐる。深淵は又奔流となつて、ナル澤小澤の落口を経て鳴澤に至る迄S字形を爲し、壁はナル澤小澤と鳴澤の落口との間で約百米突を超えて中々壯大である。

岨道は梅、黒檜の森林の中を通じて頗る深邃な趣きをなし、鳴澤上手の壁とその下流で黒部別山から突き出てゐる更に高大なる壁とが交錯する處で、この附近での最も豪宕なる景色を爲してゐる。

道は森林から草崖に出でやがて崖崩れの横を行過ぎ、川へ降つて又岨道を登る。もう一廻りすれば鳴澤の落口に出来る處迄入つたが時間は午後三時を過ぎ、時雨は絶えず襲つてくるので前進を止めて引返すことにする。

歸途は大分強い降りになつたので合羽を羽織り、奔流の上を渡り、岩場をへつり、紅葉の林間を縫つて急いで降つた。

風の殆どない大きな谷間、無数の銀線を垂れたやうに靜かに落ちる瀟々たる山雨の中に、山隈、峽間に漲る紅葉は、或ひは横に、或ひは斜に、糝糊として變幻の美を呈してゐる。

涼々たる黒部の流は、その表面に沿つて寶鏡に靈氣がかゝつた程の曇りを騰げ、落走して行く冷たい水の色は、そのすさまじい瀬音の叫びは、秋雨に煙る周圍の壯大な景色と調和して、その中を蠢動して行く私等の一行をさへ、あらゆる山水畫を束ねたよりも美しい、自然の一大畫幅中のものとせずにはおかない。

平の小屋に戻り、久しぶりで湯に入り、夕餉の膳について、美味い味噌汁や蕈の菜に、自分で驚く程鱈腹つめこんで、枕頭に寄せる山水の便りを聞きながら靜かな眠についた。

上 廊 下 へ

第七日 十月二十日、午前七時五十分發、午前十時五十分東澤、午後二時五十分口元ノタル澤（シリナシ澤）、午後四時十分廊下澤落口下手の泊場。

今日も天氣はすばらしくよい。顔を洗ひに川原へ出て、獅子ヶ岳を仰ぐと、その頂上をかすめて立山の方へ赤雲が長く動いて行く。今朝こそ早立をするつもりで急いだが、出發は結局午前八時近くになつてしまつた。

去年籠渡しの處へ出來た釣橋を渡つて對岸にうつり、針ノ木澤に架けてある丸木橋を渡る。草藪を抜けて大崩れの崖横を行くこと約一町にしてそれから先は暫くの間、榎、白樺、榛などの森林で、草や笹を分けて行くと又崖道となる。

○附録 紅葉と新雪の黒部流域 冠

一三二

口元木挽の落口附近から顧ると、下流の尾根の間から眞白な山が頭を出してゐる。それは確かに黒部別山だが、あまり白いのに驚かされたのであつた。昨日まで眞黒であつた大タテガビンの岩峯まで、今朝は全く雪に蔽はれ朝日を浴びて光つてゐる。昨夕私等の遭つた時雨が山上では雪で、餘程澤山降つたらしい。

季節違ひの登山ではこの新雪の頃は雪の状態は最も悪く、あまり雪が軟かなのでカンジキは用を爲さない。それなのに一夜に数尺の積雪は珍しくない。一度黒部へ入ると里へ出るのが容易でないことが往々ある。越中の入夫も信州の入夫も、この頃に山へ入ると云ふことは稀なので、直吉なども二十數年間案内をしてゐるが新雪の頃は黒部へ入つたのは今度が初めてであると言つてゐた。

これから東澤までは右岸は急傾斜の崩れが多く、可なりの難道になつてゐる。私は道のない時分、大正六年の七月だかにこゝを通つてひどい目に遭つたことがある。平を晝頃發ちその日の中に東澤まで出られずに、漸く東澤手前の小澤の落口で泊つたことがあつた。大正十三年に左岸を東澤から平まで僅かに一時間四十分で着いたことを思ふと、まるでうそのやうな話である。今この右岸の崖道を通つて見ると、矢張り崩崖が多くその時分の困難が思ひ合はされるのであつた。

東澤の出合まで恰度三時間を費した。最も馬鹿／＼しいのは、東澤の落口の處で、二三回徒渉すれば十分位で引きつける處を、崩れを避けて高廻りをする爲に、三十分程を費したことである。水の多い秋には徒渉は困難であり、股以上水に浸すといふことがいやさにこの高廻りを餘儀なくせられたのである。

東澤手前の崖道から越中澤岳の黒部寄の一角と同じく赤牛岳の一角が、新雪を浴びて随分雄大に見えた。道は東

澤落口手前で一度川へ降りる。そこは川原が廣闊で、黒部の左岸は楊や榛の森林に蔽はれた廣い平地になつてゐる。もう落葉し盡して落葉松のみ美しく枯林の間から光彩を放つてゐる。

流水もこの附近では無数の低い階段を爲し、幅廣く進つて午後の日射に輝いてゐる。兩岸の山足は緩くつゞいて、まだ暫くの間は廊下になる形勢は見えない。

午前十時五十分。落口から十數間上で東澤に出るとカゴ渡しがかゝつてゐたが、壊れて用を爲さないで、その上手の岩の間に流水を渡して澤を横ぎり、闊葉樹の裾原を東澤左岸に出てゐる尾根に上り、そして崖側を廻つて行く。

東澤から口元ノタル澤の間には小さな割れ谷が二つ程ある。その澤へ出る度に足場が悪いので可なりの高さを昇降する爲に、川通しを行くのよりも遙かに距離が長い。

上流が開けると行く手の尾根を壓して、越中澤岳の頭が、すばらしい新雪と岩稜の露出とで、夏には想像するよりも出来ない程壯大の姿を横たへてゐた。

進むに従つて對岸の壁は益々高大となる。木挽山から廊下へ突き出てゐる山側が、一面の壁となつて六七十度の急角度をもつて削聳してゐる。これが黒ピンカの山壁であつて、恰度下流の奥鐘の壁を小さくしたやうなもので、壁の色彩や節理、皺折の具合までよく似てゐる。奥鐘に比して頂上が丸く、高さは大分劣つてゐる。

口元ノタル澤へ出るのには、随分高い登りをして尾根を越えなければならぬ。實際この道程くどい廻りの處は少く、澤のある度にその底まで下り、又尾根へ上らなければならぬのは馬鹿／＼しく感ぜられる。夏の減水期に

は川通しを行く方がどれ丈面白いか解らない。一體この東信道は尾根と枝澤を昇降して行くので、谷より寧ろ山の方がよく見える。山を見る道と云ふ方が適當かも知れない。部分的に谷に降る處も、谷を見通せる處もあるが、廊下を爲す様な狭く峻しく、そして岩壁が直立してゐる處になると、必ず高い處を廻つて道はつけられてある。それだからこの道を辿つたのでは、上廊下の溪趣をよく味ふことは到底出来ない。廊下の壁のデイトイルや、その溪水の流動の面白さなどを觀賞することが出来ないの、上廊下のやうに水量の少い溪谷は、矢張り川通しを行かなければ、溪谷徒渉の意味を爲さないし又面白味もないのである。この道を通つて上廊下を通つたと云ふことは、恰度赤澤から下の東信道を通つて、下廊下を通つたと云ふのと大した相違はないやうである。

黒部本流も平から口元ノタル澤の間は、まだ廊下らしいものはなく、川中も闊く、兩岸に礫がつゞいて、森林は川まで低く下つてゐる。従つて溪観は闊大で優美である。

口元ノタル澤の下手の尾根先から急に本流が狭くなつて、そこで初めて兩岸に壁が現はれてくる。高くはないが直立した壁、組み合はされた壁が函のやうに溪水を圍んでゐる。その中に深淵は小波を立て、水は翡翠の如き色を流し、透明澄徹、眞に底の石一つ／＼が數へ得られる。落葉松、黒檜の森林に闊葉樹が交つて川近くまで乗り出してゐるので廊下は可なり暗くなつてゐる。

道は谷から二百米突も上を廻つて行くので、途中から針ノ木、スバリ、赤澤の連嶺が見え、更に右へ廻つて願ると、烏帽子岳に連なる岩峯が現はれてくる。共に雪は殆ど消えて偃松と岩稜のみ美しい。

漸く尾根を越して口元ノタル澤に向つて降る。この附近は澤へ降るところは何れも崩石や土砂の崩壊で中々悪く。

道が澤へ降りた處のすぐ上で狭い岩間を瀧が落ちてくる。その下の稍廣い處を道は横ぎつてゐるので下流は又岩樋の中を曲折して、奔流と飛瀑を連ねて黒部本流に向つてゐるが、岩が高い爲にその落口は見えない。土地の者がこの澤をシリナン澤と云ふのもその爲であらう。

赤牛岳の北に向いた大きな窪に源を發するこの澤は、黒部近くなると森林が鬱葱として流は狭く、随分暗い割れ谷となつてゐる。澤の上から黒部を見るとその廊下のタルの青みどろが凄い色をして淀んでゐる。

尙進んで行くに従つて柵の森林が立派になつて、落葉松の霜葉は益々光彩を放つてくるが、その外の落葉樹の紅葉は殆ど云ふに足らなくなる。上廊下の秋は落葉松の秋であると思つてゐた私の豫想は矢張り適中してゐて、これから水源地迄この谷を飾る紅葉は落葉松の獨舞臺である。

崖道から又川筋が暫くの間よく見通せる。今夜の野營地である廊下澤の手前迄、川瀬は殆ど直線的に黒木や紅葉の間を潺湲として流れてくる。

廊下は口元ノタル澤の上手の尾根を廻る迄で、それからは又可なり廣く、廊下澤の下までは好い流域を爲してゐる。崖崩を三つ程越し、崩れの爲地盤の脆弱な山側を梯子や棧道を通じて、道は漸次下りになり、最後に草崖を横に下つて川寄の稍廣い闊葉樹の中に出た。時に午後四時十分。そこは赤牛側である。

平の隅の處に三人位泊れる岩屋があり、岸邊へ出ると黒部の清流は巨岩の間を溢れるやうに流れてゐる。後方の山はなるく、水は近く、焚木の充分な好い泊場で、私等は皆荷を下ろして野營の仕度にかゝる。

今日藥師中央部の赤牛側の廣場まで入つて見たいと思つてゐたが、秋の短い日を寫真デーで可なり無駄をしたの

で、そこまでは覺束なく、寒い夕暮、くらがりの中を泊りの仕度をする惨めさを考へて先行を止めたのであつた。日が後の尾根にかくれると、透明な秋の高空、玲瓏たる谷の大氣は、靜かに渡る谷風の流さへも見られる位爽かに、そして一しきり流水の色調は一層鮮かになる。私は岩永君と共に積の巨岩の上に坐して日暮れ近くまで溪觀を恣にした。

上流の尾根のかき合せから、越中澤岳の一角が夕日を浴びて薔薇色に輝いてゐる。黒木の鬱葱たる尾根の隈を、金茶色の寂しい光を放つてゐる落葉松は幽谷の秋を飾るにふさはしい。

對岸には低いが處々立壁が屏風立になつて、溪水はその壁の下を巨大な岩の間を悠々と流れて行く。下流はすぐ下で一段落ちて大きな淵を爲し、それから美しい流は右から左へと曲走して、つゞまつてゐる尾根の峽間にかくれてしまふ、その水の行方、谷の曲り目の有様は谷好きの私等の心を無限に誘ふ程の魅力をもつてゐた。

水が大きい、水量が多い、これは初めの日から私は氣がついてゐたのだか、上廊下へ入るに及んで、痛切に秋の水嵩の大きいのに驚いたのである。鹿島川、冷の西俣の水の大きいのを直吉は不思議に思つてゐた。鹿島槍ヶ岳から棒小屋澤へ降つて二俣へ出たときも、新越澤の二俣で泊つた時にも、夏より水量が遙かに多いのに氣がついた。

尾根上、山側、それから谷の上流を蔽うてゐる新雪がまだ暫くの間根雪（來年の解雪期まで持ち越す雪）にならないので、晝間の暖かさでどん／＼溶ける。四方の山肌から谷へ集る水は非常なもので、水嵩の驚く程大きいのがこの旅行でよく解つた。内藏ノ助谷落口附近の水量、下廊下の徒渉點附近の水勢は夏に比して幾倍の激しさをもつてゐた。東澤落口附近の黒部本流の水、上廊下の流の壯大なること、八月下旬の水量の二倍大の増水であるのを見て私



落葉松と立山本峯

岩永信雄氏撮影



小ヌバリ潭上手の廣河原より赤澤岳を望む

岩永信雄氏撮影

は驚いた位で、歸途は川通しを平へ出て見るつもりであつたのも斷念してしまつた。まして秋、上廊下を源流迄溯行することなど全く無謀な考へであると覺つて、深谷の秋の旅に慣れない私は却つて好い經驗を得たことを喜んだ。今夜も空はすばらしく澄み渡つて、午後八時頃下弦の月は、下流のV字形谷の間を昇り始めた。その青光は霜夜の谷底を照し、萬物皆凍るが如き冷たさを感じしめた。

上廊下より平へ

第八日 十月二十一日午前七時四十分發、同八時二十分口元ノタル澤、同十一時二十分東澤、午後二時四十分平小屋、同

四時半針ノ木澤の南澤出合上手の林間夜泊。

氣温攝氏氷點下五分、昨日に勝る好天氣で霜の深いこと、寒さの鋭いことが却つて私等の心氣を引きしめる。破へ降り顔を洗つて上流を見ると、越中澤岳の一角が光つてゐる。谷の中がまだうす暗いのに落葉松だけは既に夜が明け放れたやうに明るく輝いてゐる。

下流の谷間から差し昇つてくる日の光が水に映じ、谷の中が陽氣になると、連れて來た犬までも喜んで飛び廻つてゐる。

朝餉を終るとそこへ、野營地に禮を述べて、一行はまたもと來た平の方へと戻るのであつた。

午前七時四十分。昨日通つた草藪、崩崖を戻り森林の間を辿る、顧ると野營地より下流、口元ノタル澤の上手に到る清瀬は脚下に展開されて、廊下とは思へないやうな優大な溪趣を展べてゐる。落葉松の集團は到る處に美しく、

梅、唐檜、黒檜の雄勁なる深林の間から越中澤岳の雪の姿が壯麗を極めてゐる。

午前八時二十分口元ノタル澤について、それから小澤を三ツ、崩崖を幾度もへつって十一時二十分東澤の落口に戻つた。眞晝近い日は温に身體が汗ばむ位で、東澤の源頭から吹き落ちてくる風は駭蕩として、小春日和の麗かさがある。東澤の上流を見ると山も谷も緩かに開いて、こゝばかりは青空は非常に大きく、山側も森林もゆつたりとした窓と空に連なつてゐる。宛かも源流地は廣い／＼高原でもあるかのやうに。

直吉は天氣が變ると云ひ出した。それは木の葉の裏が見えるからだと云ふ。見るとなるほど峽風に煽られて木々の葉は皆その葉裏を見せて上に向つて戦いでゐる。上天氣も四日程續いたので、北の山地の秋としては先づ上出来であつたのかもしれない。

然し空を見ると雲影は全くなく、澄み渡つた秋の天空はどこを見ても雨など降る氣配は更に見えないので、降るまでは大丈夫ときめ込み、平に向つて、行程を進める。大きな尾根の窓から落葉松の森林の上に、突如として立山が大きく現はれた。雄山、龍王、鬼、それから雄山と龍王との間に大きく刻られてゐる御山谷の源頭は、新雪かべつたりと塗り上げた様に積つてゐるので、そのカールは夏とは全く別箇のものと思はれる程壯大な感じを與へる。

往路に眞白だつた黒部別山も、雪は最早大分解けて、大タテガビンの岩骨は全く雪を留めてゐない、秋の雪解けの激しいのはこれを見ても分る。

晝頃から風は強く吹き荒んだ。下るに従つて溪谷は益々廣く、對岸に奥木挽澤を見て口元木挽澤の附近に出ると、まるで谷底は原の如く闊く、二町餘りの幅をもつて、その廣い洲の上には川楊の集團が、烈風に煽られておどろと

亂れてゐる。

落葉が、峽風に吹き散る無数の紅葉が、夕日にきらめいて火花のやうに美しい。對岸の山側まで數町もある溪間を、闊い川底に向つて流れては旋り、舞ひ上つては又吹き落ちてくる、その中を辿る私達はまるで木の葉の雨を浴びて行く思ひがする。

この落葉を運んで行く黒部の大流、やがて廊下の峽間をもまれ落ちて行く木の葉の行く方は、日本海へ、荒茫たる無限の海へ、何時かは寂滅の大海に吞まれて行く私等の運命と同じやうに。

平の小屋に歸つたのは午後二時四十分、小屋の人は出拂つて、晝尙ほ閑として留守番の犬ばかり私等の足元にまづはつてくる。二日たゞぬ間に小屋の周りの山々はからりとして、あんなに美しく飾られてゐた森林は、多くは枯木の姿となつてゐた。

黒部の秋も老いた。仰ぐと空は碧瑠璃の色を流し、西の空に連なつてゐる獅子の頭は白く光つてゐる、カリヤスの方に當つて森林の中から炭焼の煙が靜かに立ち昇つてゐる。長い半年以上の冬營の仕度に、小屋の人達は日和のよい中にと炭焼や焚木を集めるのに忙しいのであらう。

恰度歸つて來た平の小屋の主任の横田さんに厚く禮を述べ、そこを發つたのは午後三時で、私等はそれから針ノ木澤を溯り、大南澤の上手の廣い林の中の平地に天幕を張つた。夕方から雲霧が谷中に徂徠して、霜枯の窮谷は寒さと暗さの爲いたく陰鬱となつた。

夕餉をとつてゐると、到頭雨が襲つて來た。夜は可なりの吹降りになつたので、私等はこそ／＼天幕に入つてま

どろんだが、この雨が雪になつたら明日の針ノ木越は容易でないと案じてゐた。然し幸に温度が高かつた爲に降雪のけはひはなかつたのである。

大南澤より大町まで

第九日

十月二十二日午前七時三十分發、同十時四十五分針ノ木峠上、午後〇時二十分大澤小屋、午後六時大町歸着。

今日は大町へ出る豫定で、可なりの道のりがある爲、午前三時半頃起きて見たが雨が歇まないのも又一しきり寝に就き、午前六時に起きて人夫は朝食の仕度をする。雲行は早い雨が上つて天氣はやゝ良くなる様子である。日が當らないので谷は非常に寒く、狭霧は黒部谷の方から時々騰つて來ては野營地を包んでしまふ。飯をすますと大急ぎで野營地を撤して出發する。針ノ木澤も落葉松の黄葉は中々美しく、見上げるとこゝにも谷の上から落葉は雨の如くに降りそゞいでくる。川に沿つて道の跡、崖廻り、浅い徒渉などして流を縫つて上つて行く。ガラ谷、川田の泊り場を過ぎて溯ると、^{ツバククイハ}燕岩の大岩峯が左手から聳え立つてゐる。直立數百尺針ノ木澤中での偉觀である。

美しい落葉の舞踏を眺めながら登つて行くと、追々山々が見えて來たが、何しろ雲が低く垂れてゐるので頂は殆どかくれてゐる。重苦しい雲の幕の下から堅に幾筋も下つてゐる雪の縞を見せて、赤牛岳につゞく山の根張が見え、烏帽子岩だけは頂を出したが、三ツ岳、野口五郎岳は山稜を見せない。槍も穂高も見えず、燕岳のみが高瀬川に向つて大きな雪溪を垂れて高く聳えてゐた。そしてそのみは日が雪を照らしてキラ／＼と光つてゐた。間近かだけ南澤岳、不動岳、不動堀澤岳、七倉岳などは手のとゞく様に迫つてゐる。然しこの一脈には雪は殆どない。

午前十時四十五分針ノ木峠の鞍部に着いたが、眺望は雲霧に遮られ、氷雨を交ぜた烈風は私等の休むほどのゆとりも與へない。そこ／＼に信州側に向つて新雪の急斜面を下り始めた。峠附近は越中側には殆ど雪は積つてゐないが、信州側には五寸以上の積雪があつた。

それから暫く下つて行つて私は驚いた。谷の中は到る處水を交へた脆弱の崩岩や崩土の押し出しで甚だしく凸凹の堤を築いて、美しい針ノ木の雪溪は荒廢の甚だしい、亂暴極まる惡場となつてしまつた。今年八月末もう登山期が終つた頃、針ノ木岳とスバリ岳の間から出るマヤクボの崖谷、蓮華岳の方からくる赤石澤が大崩壊した爲に、針ノ木の雪溪の上へ一杯に大石土砂を堆積したので、それに新雪が積りそれが又氷つてゐるので、大澤の小屋の一二町上までは全く難澁の行路となつた。

私等は大澤の小屋へついて漸く平安の思ひを爲したくらゐで、そこで中食をとり、爐に火をたいて暖をとつた。今まで降つてゐた雨の雪が風にゆり落されてコト／＼とトタン屋根をたゞいてゐる。休みながらその音に耳を傾けてゐると、今度はカラ／＼と屋根の上を轉び落ちて行く音がする。それは落葉の音だ、遠い谷川の音、林を渡る風の響きなど深山の晝は何とも云へない静寂の味ひがある。

大澤の小屋から下は道もよくなり、森林もひとしきり立派になる。範川の谷は今では扇澤の出合を中心として森林の美觀が残つてゐる。今年の春殘雪を踏んで扇澤を降り蓮華岳の雪の姿を見入りながら範川の出合へ出て新緑の美しさを喜んだが、この附近は紅葉も又頗る壯麗で、榎、檜、七葉樹、楓、イタヤ、白樺の大木が鬱葱としてゐるので、紅葉は谷にかゞやく夕日の光を反映して實に立派である。

急いで行く私等の足音に驚かされて、すぐ左の藪の中から大きな白兔が飛び出して、林の中を山裾の方へ駆けて行つたが、やがて空澤の石の間にかくれてしまつた。

白澤を過ぎると裾原が廣くなつて、川幅も川原も闊々とした景色となる。天氣は漸く恢復したらしい。顧ると龍川の源頭に當つて夕雲は高く噴煙の如く渦巻き、その下に峨々たる峻峯、鳴澤岳の天上が精い皺を刻んで聳えてゐる。大出近くの茫々たる裾原、黒松や、落葉松の矮林の中を行くと、澄み切つた秋の空氣、颯々たる秋の風は私等旅人の周りをさはやかに繞つてくる。

紅葉は恰度この附近が眞盛りで、出發のとき随分早かつた山々の色も、今では燃え立つやうに照り榮えてゐる。冬ももう里近くまで迫つて來てゐるのだ。今頃は棒小屋澤や新越澤の紅葉も跡なく散り盡して梢は枯木の如く、やがて來るべき眞夏の輝きに浴する迄、嚴冬の下に深雪に埋めつくされて沈黙の中に黎明の來るのを待つのであらう。秋の日は大出を過ぎる頃とつぷりと暮れて、大町へ着いたのは午後六時二十五分、樂しかつた秋の旅も、主人の愼太郎君と岩永君と三人鼎座して微醺に乗じて語り合つた、その時には既になつかしい思ひ出の種となつてしまつた。

雜錄

○毛勝岳

冠 松 次 郎

劍岳の頂稜は、大窓より白兀、赤兀の岩峰を経て、白萩山、赤谷山を越し、片貝川源頭に到つて、猫又山（二三七八米突）、釜谷山（二四二〇米突）、毛勝岳（二四一四・四米突）の大山塊となり、西谷ノ頭（一九八四米突）、三名引山の岩峯を連ねて駒ヶ岳（二〇〇二・五米突）、僧ヶ岳（一八六五米突）に到つて北方に延び、雌伏して烏帽子岳（二二七四・一米突）となり、黒部川の左岸を富山平原に到つてつきてゐる。この長大な主稜の一部、毛勝岳を中心としたる毛勝、釜谷、猫又の三峯を併稱して毛勝三山と呼んでゐる。

越中平原から見た毛勝岳。泊、三日市附近から車窓

に最も近く雄大なる山容を運んでゐるものは、毛勝岳を中心とせる片貝川の奥山である。

日本海に近い爲か、標高の低い割に雪が深く、残雪も饒であるが、新雪も早くから山頭を飾り、壯大な山體を平原に向つて構へてゐる。

立山の室堂や地獄谷附近から、或は大日山塊の頂稜、劍の巔や、早月尾根等から眺めたこの山の姿態、色調、光彩の美しさは、恐らくこの方面に親んでゐる旅客の忘るゝことの出来ないものであらう。

この山は平原に最も近く、登行も頗る樂であるのに係らず、登山者が少なく、日本アルプスの旅客が終驛として立山群峯や、大蓮華連嶺を訪づれるのに比して、甚だ人氣が少ないように思はれる。

この山の登行の紀行を見たのは、山岳第五年第三號の田部重治氏が初めてであつて、流石に越中に生ひ立つた郷土人の然も山岳熱愛者である同氏の着眼點の優れたのに私は私に敬意を表したのであつた。

魚津から途中二泊で往復出来る山、東京からでも夜

行を利用すれば中二泊で登山して來られるこの山は、私等に優れた山岳の景觀、黒部上流の山々、立山、劍岳、鹿島槍岳を中心とした壯觀を指呼の間に收めしむる素晴らしい展望臺であるから、愛山家は是非數日の暇をこの山の登行に利用されんことを御勧めする。

北陸線の魚津驛で下車して自動車にて片貝川に沿つて山峽に入り、約一時間にして、奥平澤より下半里程の黒谷と云ふ部落につく。

それから徒歩片貝川に沿つて、山女、奥平澤を過ぎ、約二里にして片貝川上流の東又南又の合流點ヲノマに着く。魚津より三時間弱、現今ではこの出合に、水力電氣の取入口が出來てゐる。

ヲノマで道が二つに岐れる、一つは東俣谷より阿部木谷を上つて直ちに毛勝岳に到るもので、他は南俣谷より釜谷を溯つて釜谷山に登り、毛勝岳に到るものである。

一 阿部木谷道

東俣谷へ入り、左岸の矮林や草藪の中の岩高道を行くと、數町にして山懐が非常に闊くなつて、炭燒の伐採した跡の谷筋は、木が疎らに残つて、草坂が大きくつき、岩石が處々から露はれてゐる。地形圖の成谷の出合邊で橋を渡つて右岸にうつり、崖側を辿ると谷筋は稍狭くなり、道は崖上の密叢の間を僅かに物色しながら行くやうになる。

タバコ谷と云ふ小溪を對岸に見て、阿部木谷の流域に入る、ヲノマより約二時間、

成谷から奥には今では炭燒が這入つてゐない爲に、路は辿るに難い程壞滅してゐる。

尙阿部木谷の右岸について上ると、途中に炭燒小屋の廢趾を三つばかり見る。その最後のものからは道が絶えてしまふ。

この附近で右手から澤が這入つてゐる。約三十分程行くと山溪の森林が頗に立派になつてくる。その附近が國有林と民有林との境界らしい。

谷が右方に曲る處に右岸から大きな壁が見える。や

がて兩岸の崖側が雄大になつて、行く手に毛勝岳、その右に大明神岳が頗る立派に見えてくる。阿部木谷入口より約二時間半、残雪の上を辿るやうになると、暫くして谷が三つに岐れる、皆非常な荒れ谷である。その中の道をとりに尚雪上を登る、願みともう駒ヶ岳、僧ヶ岳につづく大きな山稜の向ふに富山平原、早月川、片貝川が速く銀蛇をくねらせてゐる。

傾斜が急激になると、山上は益々近くなり、左手に毛勝岳を見て行くと、谷が二つに岐れる。左のは直接毛勝からくる嶮惡なもので、その方には地形圖に記入してある上方のガレが見える。右のは毛勝岳より一つ右にある丸い隆起の右の鞍部に上るもので、左方のよりは遙によく、巨岩大石の累積された荒れ谷を上りつめると、ミヤマハンノキの藪となり間もなく毛勝岳の頂稜の一部、中の谷乗越の鞍部へ上るのである。それから中の谷側の緩斜面を横に廻り約十分にして毛勝岳の嶺につくことが出来る。

二 釜 谷 道

ヲノマから南又を溯ると、約一時間で岩屋のある所に出るとその附近から残雪を所々に見るやうになる。尙一時間程で坂様谷サカサマダの落口に辿りつく。それから郡境迄數町の間は炭焼が遣入つてゐるので道がついてゐるが、その先は道が全くなく、川床を縫つて行くことになる。

二時間餘で右岸に大残雪を見て、間もなく猫又谷と釜谷との合流點に達する。毛勝岳へ登るのには、釜谷の方へ道をとる方が近いが、猫又谷に比して遙かに悪い。

釜谷に入ると兩岸が狹まり岩壁が峻高となる。雪溪を辿ること三十分にして、雪溪がつきると三段の大瀑布が落下してゐる。左岸の崖頭を搦み約一時間を費して瀑布の上に出ると、その先は又雪溪となり、雪溪がつきる頃谷が二分する。右方のを辿つて約一時間にして釜谷山頂上につき、左方へ毛勝岳の頂稜を中ノ谷寄

を辿つて、一時間程で毛勝岳の頂に達する。

阿部木谷入りも釜谷入りも、魚津を早朝たつて途中の谷筋で泊り、毛勝岳を極め、歸途又一泊して魚津に歸着するのをよしとする。上野からは丁度これに都合よく連絡する夜行列車が通じてゐる。

毛勝岳の登山は釜谷よりも阿部木谷を上る方が遙に樂であるし、その頂上近くへ登りつく事が出来る。

片貝川を溯つて毛勝岳を極め、小黑部谷の支流、中ノ谷を小黑部谷に降り黒部本流に出て、鐘釣温泉を宇奈月に降るのには、尙二日の日程を費す。これは中ノ谷の下りが非常に悪いので相當の準備を要する。

三 劔岳に通ずる尾根道

毛勝岳頂上より中ノ谷向きの草の斜面を辿つて中ノ谷乗越の鞍部に出て、尙草地、笹藪、偃松などを縫つて約一時間にして釜谷山の頂に達し、更に下り三十分にして猫又山との鞍部に到り、山稜を登ること一時間餘、猫又の山頂に達する、猫又山は頂上が廣い平にな

つて、南東に向つて緩傾斜を爲してゐる。降り一時間で猫又池と云ふ小池のある處に出る。尙一時間半程ひどい密叢を下つて櫛倉峠フナクラにつく、こゝで折尾谷に降ると適當な野營地がある。

櫛倉峠は早月川上流白萩川の支流、ブナクラ谷を登つて、小黑部方面の折尾谷に下る乗越しである。

櫛倉峠より約一時間半で、窪地の所々の水溜りのある餓鬼の田式の所に出る。それより山稜を辿ると根曲り笹の密叢から偃松帯に入り、餓鬼ノ田より二時間を費して赤谷山の頂に達する。赤谷山の頂上は猫又山程の廣さはないが、盆地狀の平になつてゐる。もうこゝまでくると正南に劔の威容が迫つてくる。

途中で片貝谷より仙人ノ湯に通ぜし道の跡を見る。

赤谷山頂上より六七町先の雪の多い雜木の茂つた一峰、即ち白萩山の頂上を経て、白萩山アカハゲと赤兀アカハゲとの鞍部までは一時間弱で、そこには稍大きな池がある。

鞍部から二時間餘で赤兀の頂上に達する。この附近は山稜險惡を極めて歩行は非常に手間どる。赤兀から

白兀の頂(二三八七米突)までは三十分程で、それから約一時間を費して大窓の鞍部に達することが出来る。

以上は縦走に要する大體の時間を書き附けたので、この外に休憩、申食等相當の時間が必要であるから、この頂稜を毛勝岳から大窓を経て池ノ平まで行くのには、少なくとも途中一泊の準備をしてかゝらねばならない。

四 小黒部方面中ノ谷の登路

北陸線三門市驛より黒部鐵道に乗替へ、約一時間にしてその終點宇奈月に到り、更に日本電力の輕便電車を利用して、同じく一時間で猫又谷の落口まで入り、それから約四十分にして黒部奥の鐘釣温泉に達する。鐘釣を起點として、四日分の食糧を携えて黒部川の峽道を通り、ガラ谷、ウド谷、小屋ノ平を過ぎて、約二時間にして小黒部落口に到り、釣橋を渡つて山坂に登ること約三町、道は二つに分岐する。左方に谷沿ひを行くものは、猿飛を経て黒部奥に通ずるもので、右

方は小黒部峠を上る立山道である。

道を右にとつて急坂を登り、山稜に達し約四十分、峠上に出ると、そこで道は又二つに岐れる。尙山稜通しを登るものは池ノ平に通ずる北仙人の尾根道であつて右方小黒部の谷に向つて降るものは、同じく池ノ平に通ずる立山登山路、即ち小黒部谷入りである。

小黒部谷に向つて、この峠道を少しく降ると、深谷を隔て、すぐ鼻先を、毛勝岳を中心とした西谷ノ頭、釜谷山、猫又山の全容が大手を擴げて延び上つてゐる。

雪の少ない夏期には、旅客はそこ／＼に通り過ぎてしまふので、あまり注意を惹かないけれども、残雪に飾られた晩春或は初夏、新雪に美裝された秋の半には、足を付めてつく／＼と眺め入らなければならぬ程壯麗の姿を連ねてゐる。その時こそ旅客は必ずこの方面からこの大山塊に匍ひ登つて見たくなるであらう。

峠から小黒部の廣河原までは一時間餘にして達せらるゝ。途中小黒部の溪流の最も美しい部分、南平の喬木林の美觀を賞することが出来る。

廣河原を下流に向つて二町程下ると、對岸から森林を押し分けて瀧の如き奔流が入つてゐる。これは猫又山の東面から出る折尾谷で、源が遠いだけに水量も随分多い。折尾谷落口の傍に橋が架つてゐる。日電の測量班の架けたものらしいが、若しこの橋が落ちておれば徒渉しなければならぬ。

折尾谷の出合からすぐ下で中ノ谷が合流してゐる。折尾谷とは比較にならない程大きな谷である。合流點附近は小黒部も素晴しく立派であつて、谷幅は非常に闊く、下流に當つて壯大な山峽の間を落走して行く奔川の趣き、谷の明るさなど、頗る快闊な感じを與へる。左折して中ノ谷へ入ると、こゝも亦森林は鬱蒼として美溪は潺々溢れてゐる。出合から二町程で岩壁はとりつぎに現はれてくるが、その下に沿ひ、或は川瀬を自由に徒渉出来るので、殆ど高廻りをせずに行ける。

深邃にして、清麗な溪谷は、奥秩父の源流地を思はせるが、然しこの方が遙によい。

大體右から左へと大きく曲折して、最後の右岸の壁の處で谷は著しく左折してゐる。それから半町程先で右から西谷が合流してゐる。

中ノ谷の小黒部谷落口から西谷との合流點迄一時間餘を費す。

西谷の出合附近は暫くの間礫がつゞいて、谷筋はよいが、そこから中ノ谷は漸く廊下を形造り、左岸の崩れの上から間もなく瀧場と、釜淵との連続となる。谷筋は狭いがヤゲン状の随分立派な廊下であつて、こんな處にこんな立派な谷があるかと意外に思ふ位である。

西谷の方を覗くと、これは中ノ谷よりも遙かに規模は小さいが、出合から暫く上ると同じやうな廊下になつてゐる。

ロープを使つて中ノ谷の廊下を溯るのも面白いが途中全く溯行不可能の處が三四ヶ所あるので、非常の時間を費すことゝ思ふ。

西谷と中ノ谷との間に延びてゐる緩傾斜の大尾根にとりつき、中ノ谷側を廻つて廊下を俯瞰しながら、休

みなしに約五時間で、廊下の上部から三番目の瀧の上
に降り、それから瀧の横を岩壁をへつり、雪門をくぐ
り、三箇所の瀧を上つて廊下の入口に上りつく。途中
大崩れの上からこの廊下を全部縦観して西谷の出合の
下の岩壁の邊まで眺められる。

廊下を脱すると俄然谷幅は闊く、傾斜は緩かに大雪
溪は遠く源流地に續いてゐる。上流から大雪溪を下降
して來る時には、この廊下の入口で急に溪側が狭まり
谷が斷落して漏斗狀を爲してゐるのを見て驚かされる
のである。

雪溪を上ると二町程で右手から大ワレ谷が入つて、
その上部から瀧がかゝつてゐる。この出合の巨大な岩
塊の集りの處によい野營地がある。

約二時間も大雪溪を溯ると、谷筋は大きく左折して
ゐる、そこで右からくる壯大な荒れ谷が毛勝岳から落
ちてゐるので、左折してゐるものは猫又山に到るもの
である。

右方の毛勝岳からくるものが、石瀧の如き荒れ谷に

なつてゐるのに、猫又山からくる左方のものは却つて
大雪溪が續いて、谷幅も廣いので本流と間違へられる。
然し雪溪もそこから傾斜が急になり、その源頭の猫
又山の懷を繞つて恐しい大崩れが薙ぎ落ちてゐる。兎
に角猫又山の方へ入り込むと、毛勝岳へはかなり遠く
なるのを注意を要する。

道を毛勝岳からくる右溪にとつて石坂のやうな荒れ
谷を登ると、瀧が幾つか現はれてくる。然しあまり高
くないのと、その横を岩の段について登れるので、左
程の悪場ではなく、登るに従つて谷が小さくなり、遂
には僅かの石溪となつて草地に没する。もうそこは毛
勝岳の懷であつて、顧みると劔の大頭は鋸齒狀の袖を
連ねて南方の空を限つて恐しく高く挺んでゐる。

草地の傾斜は緩漫となり、私等はその斜面をひた上
りに上り毛勝の頂上に達する。

廊下の上部より毛勝岳からくる右溪の入口まで約二
時間、それより毛勝岳頂上まで三時間を要する。

片貝川を溯つて東俣谷に入り、阿部木谷を上つて毛

勝岳を極め、中ノ谷に降つて小黒部谷に出て、小黒部峠を越え、鎖釣温泉方面へ達する路筋、或はこれを逆に行くものを毛勝越えと云ふことが出来るであらう。

然し何れにしても、片貝川方面からは阿部木谷で一晩、毛勝岳を越えて中ノ谷上流で一晩、小黒部廣河原で一晩と、都合三泊の旅行であり、黒部谷方面からは、小黒部谷の廣河原で一晩、中ノ谷上流で一晩毛勝岳頂上を極めて阿部木谷で一晩と云ふ日程になる。そしてこれは三晩とも露營であるから、毛勝越えをするには相當準備をして行かなければならぬ。

以上述べたる「毛勝岳」の中「釜谷道及劍岳に通ずる尾根道」の二登山路に就ては、木暮理太郎氏の記録に依つたものである。出所を明かにして謝意を表すると共に、若し誤りがあつたならばそれは筆者の責であることを附け加へておく。

○五月の早月尾根と八峯

高橋 健治

参考文献(早月尾根)

(冠 松次郎氏)

山岳第十二年一號雜錄

(一一三頁)
(二六頁)

山岳第十三年一號

(一六頁)

劍岳(第一書房刊)

(六九頁)
(七二頁)

同 (同)

(一〇三頁)

同 (同)

(三〇八頁)
(三三六頁)

以上の文献に依つても知られる様に、早月尾根と言へば、私は冠さんを思ひ出さずにはゐられない。早月尾根は芦峯の夫婦が絆名してゐるやうに、冠尾根と呼ばれることによつて、私達には一層ファミリアーに感ぜられる。劍岳へ頂上する毎に目に止るのはあの長い冠尾根と頂上近くの早月川側の岩のゲレンデだつ

た。既に立山川や早月川をも五月にも溯行した私は五月の早月尾根からの劔岳を計畫した。それは夏よりも遙に容易な登行である。且頂上附近の五月の雪と岩との愉快なクライムが想像される。京大山岳部員伊藤悪、西村格也兩氏と共に五月十四日（晴）夜行で京都を出立ち、滑川へと車中の夢は走る。

五月十五日晴。上市——白萩發電所

滑川驛に早朝到着。プラットホームから先づ劔岳に挨拶する。睡氣も覺めて、池ノ谷の眞直ぐな白い雪溪が異様に光る。その隣りに黙々とした早月尾根が春霞の中にうづくまる。毛勝猫又亦近し。

輕便に乗換へて、やがて靜かな上市の町につく。宗作は來て居らず、代りに佐伯由藏が長スキーを準備して來て丁寧にお辭儀して、「私は早月尾根は知りませんが案内は出來ませんが、炊事萬端だけならさして載けます」と率直に答へる。「結構結構吾々の荷物を助けて貰ふことゝ、炊事が君の仕事だ。併し君の長スキーは

登行に際して邪魔になるといけないから此處から芦峠へ送り返さう」と私は彼にたのんだ。持つて來た四尺餘の夏スキーも吾々は劔澤で使用するためであつた。

上市から伊折まで早月川の溯行は靜かな歩道に明日からの山旅の夢に浸たる。春霧の上には劔岳の白姿次第に近く、淺緑から青い裾山へ、遂には白雪の尾根までの色が次第に私の心を引立たせてくれる。櫻、スモモの花盛りが五月の山入に最も懐かしい。小又川白萩川出合の白萩發電所に泊めて貰ふことにする。午後六時氣溫攝氏十五度。五月にしてもあまり暖かすぎる。明日の天氣をあやぶみながら蚤と戦ふ。

五月十五日 雨、滞在。

早朝起出てみると曇天。早月尾根の上で一泊の豫定だつたので、天氣の確實性を見て出發せねば駄目だと主張する。雨雪に見舞はれるのも餘り有難くないから出發をよす。午後より大雨となり、小屋に一日を過す。由藏と最近の天候模様及十年度の降雪、積雪に就いて語る。本年は三月まで非常に雪少く、晩雪が多い年

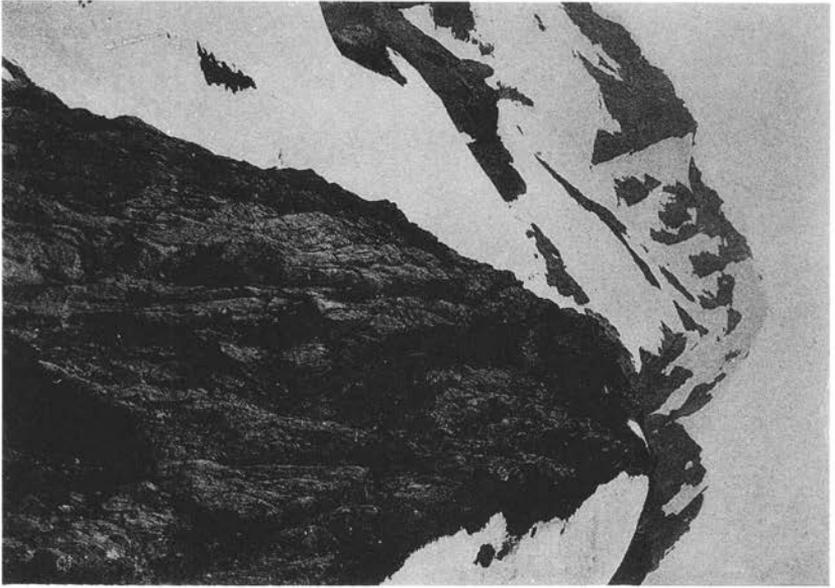
であつた。四月二十二日には室堂六尺、追分四尺、白萩發電所では一尺五寸の降雪あり、二十三日も降雪しつゞけてゐた。又五月六日には室堂三尺の降雪あり、十一日にも亦二尺は降つたといふ話だつた。この調子では未だ早月尾根の上の方は新雪で蔽はれてゐることが想像された。

午後六時氣溫攝氏十二度、バロメーターも思はしくはないが、まあこれだけ降れば明日は雨も上るだらう、雨上りの調子に依つて吾々は行動を決定すべしと、第二日目の蚤との戦ひに移る。

五月十七日 晴。白萩發電所——早月尾根二三〇〇米露營。

濕氣は空に未だ多いが、氣溫の降下とバロメーターの昇度によつて天候回復は確になつたので、午前六時卅分出發。パンバ島取入口までの道の善くなつたのに驚きながら八時十二分取入口（立山川白萩川出合）着。愈々早月尾根はこれからだ。大窓と早月尾根とが目を引く。小窓、池ノ谷は前の支尾根に邪魔されて見えぬ。

小憩の中に一人の炭焼に會ふ。「吾々は早月尾根を劔へと行くのだが、松尾平へパンバ島から藪くぐりで取付くのとキワタワラ谷（冠氏のキワラ谷のこと。伊折の者及この炭焼もキワタワラ谷と呼ぶ）を登つて本尾根に取付くのと何れが早いかと尋ねる。彼は杖を高くさし上げて、「松尾平へ行くには立山川を徒渉して右岸の窪より舊道の跡を傳ひ行くが、それよりもブナクラ谷を渡つてキワタワラ谷落口の瀬を更に徒渉してキワタワラを中程まで昇り、右手の小澤に沿うて急雪斜面を本尾根へと登つて行つた方が早い」と答へた。時に七時三十分。後説に従つて立山川を渡り、ブナクラ谷炭焼小屋へと殘雪を踏んで急ぐ。午前八時三十分ブナクラ谷を渡り、雪の河原をしばらく登ると、白萩川が急にせまらんとしてゐる。その手前がキワタワラ谷との出合になる。九時。氣溫攝氏十一度五。白萩川を徒渉す（水溫攝氏五度半）。キワタワラ谷の雪を踏んで教へられた通り冠氏のコースと略同様に昇る。荷物各自六貫以上で傾斜もかなりなのにもう雪がくさり



源治郎尾根第一峯より第二峯及び剱岳頂上を望む
岩永信雄氏撮影



五月の早月尾根
兒島勘次氏撮影

かけて歩み難い。併しやがて急登行四十度も終りを告

げて、十一時四十分には本尾根に達した。晝食中大日岳の白姿は早や霧に掻消されて行くのが残念だ。十二時十五分晝食後の少憩をすまして出發。三角點一九二〇米迄の割合に急な尾根に、藪ぐりも一二回やつた。四方に霧が立つて來たので天候の激變かとも疑つたが、二一〇〇米二時十分より二十分の少憩の中に霧は隈なく晴れて、右大日岳、左ブナクラ谷の眺め。五月の劍岳登路としてこんな愉快なルートがあるとは、と互に長嘆息する。

晩雪のため残雪線が一三〇〇米、四月の初めに私が測定したこの地方の一二〇〇米に對してわづか百米しか昇つてゐなかつた。勿論千米以下の低地では四月初旬の残雪は皆無であつた。

こんなことを考へながら登り行く尾根の青木は次第に偃松に變つてくる。ベツアードコンパスとバロメーターで二三〇〇米を示すところにテラスがあつて四人の寝るだけの餘裕があつたのでズダルスキーテントを

張つて露營する。四時。

早月尾根は尾根近くでは、概して立山川に急傾斜をなしてゐるに反し池谷側は尾根近くでは緩傾斜をなしてゐる。然るに谷底近くでは池ノ谷側は急に、立山川側は緩になつてゐる。我々も冠氏の時と同様に、登行路を池ノ谷側寄りに選んだのは當然の結果であつた。

夏スキーを持つて池ノ谷側斜面で二時間程遊び、一日の疲れを癒やす。日中我々のステップをづらしたグラニューラーハイボスノーも五時(氣温零下一度)クラストを形成して天候の順調を暗示した。

夜八時半寝についたが、夜露甚だしく、十二時には霜となり、吾々はズダルスキーテントよりはひ出して、一時焚火して煖を取つた。(零下七度。午前二時)

五月十八日 晴。

午前四時三十分再び目を覺せば東天已に白み、霜は頭髮を引きしめ、冷氣は吾々の登心を目覺ましむ、やがて朝焼となつた。風雲が東の空から西へたなびく。天候の變化せぬ中に、朝のクラストの中に、アイゼン

雜 錄 ○五月の早月尾根と八峯

でと出来るだけ朝の仕度を急いだが、人夫は割に落付いてゐて、ヤット午前六時三十分、露營地二三〇〇米を發つ。(氣温零下三度)。夏ならば随分苦勞な偃松の急斜面も今はアイゼンで朝のクラストを踏んで心地よく進む。部分的には六十度位の雪斜面或は雪壁になつたところもあつて、益々尾根は面白くなつてくる。七時三十分までに已に數回の休憩を取つたほど荷物は重し、尾根の傾斜も急になつてくる。

愈々二六〇〇米より上の岩尾根になつてくると新しい雪が積つてゐて、かなり足は沈んで來たが已にスキの使用範圍でなかつたので我々は雪壁や岩崖に、重いリュックサツクのバランスを練習しつゝ愉快的クライムをつゞける。由藏人夫はかなり困難らしかつたがヤット吾々の後に、眞面目に我々のルートに従つてくれた忠實さに感謝せねばならぬ。天候は豫想の如く少し變り氣味に、西南の強風を加へて來た。地圖の二六〇〇米突點より上は愉快的アレートと剣頂上より鶴ヶ御前への本尾根と早月尾根の接點即ち頂上より百米南

一五四

の本尾根に取行く、ネベのクローアールは吾々のフアイナルアタックといつてもいい。アイゼンもきしむネベにステップを切つて、アンザイレンする必要もなく吾々は終に本尾根に立つた。時は午前十一時二十五分。二十分の休憩を取る。西村、伊藤、高橋、由藏の登行順序は終始嚴守されてゐた。劍澤は懐しく眼前に展開し、早月尾根は將來のスキー降路として吾々を魅してゐる。

由藏人夫を一足先に劍澤小屋に遣はし今晚薪木及食事の準備にあてた。我々は頂上に向つて登る。正午頂上着。風は強いが眺めはいゝ。新雪に頂上御社は全部隠れて我々はその上で萬歳三唱をした。八峯の雪尾根が目立つ。第三峰スラブの雪が最も多く落ちてゐる。源治郎尾根も新雪の雪尾根に脊の姿を残し、少時は恍惚として互に語る言葉もなかつた。

今年はやはり晩雪のため今年の三月の寫真と比較して二四〇〇米以上の雪量は少しも減少してゐない様に見える。寧ろ最近の新雪のため三月の晴天續きに

よつて現はれてゐる偃松斜面が五月に未だ雪に蔽はれてゐることを見る。

早月尾根、池ノ谷を眺めると頂上の雪には比較にならぬ程赤い。長次郎谷はデブリ少く景色もいいが平蔵谷は雪崩の出通しだ。然しもうヒツカカリ雪の落下のみで平蔵谷の様な緩斜面では恐るゝにたらない。

風は強くなる。思ひ出した様に吾々は引返し初めた。元の早月尾根と劍木尾根との合點に引返し晝食とする。十二時三十分。氣温五度。西南風。日射なく薄曇にて、平蔵谷には源治郎尾根側よりも、前劍側の方にも十分と間を置かずに、新降雪が、第二次雪崩の形によつて落下してゐる。

吾々は平蔵谷を降ると由藏に云つて置いたので、この屢々の雪崩を目撃した彼は前劍の頂上より吾々に警戒をあたへて下つて行く。吾々も充分に平蔵谷の雪崩を観察した上で、午後一時堅雪の本尾根を下り初めた。俗に云ふ平蔵の横ばひの手前の平蔵谷へ落つる支谷を夏スキーで降る。平蔵谷を三分程下るともうデブリで

一杯だ。スキーをぬいで下る。午後二時三十五分劍澤へ降りついてデブリを観察しつゝ四時十分懐しい劍澤の小屋に入る。三月以來残して置いた食糧の中から夜は紅茶を出してヨードラにそえる。

五月の八峯（前半のみ）

今年三月の八峯を計畫して、第五峯第六峯のキレットより第六峯に向つた京大山岳部奥貞雄松井敦一隊が朝の出發の遅かりしたため雪の腐り甚だしく、引返すの止むなきに至つたのは當然であつて、私は初めから春の八峯には夜の勞働を主張するものである。雪について、特に劍澤での問題の調査旁々、八峯登攀にそなへるべき雪の準備研究をやつた。

今その結果の概要を述べれば、五月には日射と同時にクラストは比重〇・五——〇・六の腐雪に變化して、午前中に全雪を腐らして了ふ程氣温も高く日射も強し。

毎年の五月と比較して、

平藏谷。雪押出は非常なもので劍澤を溯行して最後の高さは七呎を測定した。例年よりも谷が雪押出のために非常に歩み難くかつた。

長次郎谷。毎年非常な雪押出の出るこの谷は今年もかなり多い雪押出しがあるだらうと思つてゐたが、例年と同じ程度のものであつた。

眞砂澤。これより下の劍澤の雪崩は例年より非常に少い、八峯直下の劍澤左岸の二つの澤のデブリりも小さいものであつた。

ハシゴ澤。例年最も多きな雪崩堤を作るこの澤にデブリは皆無であつた。雪量も勿論非常に少い。

劍澤岩小屋(三窓出合)の岩がめづらしく頭をもたげて非常に雪量の少いことを物語つてゐた。

三ノ窓の雪溪は毎年最も奇麗な五月の残雪と、偉大な冬のアワ雪崩の残骸の力を目撃させられるのに今年はその影もない。雪溪の雪も赤い。

芦峠の入夫達が「今年は屢々降つたが、ドカ雪がななく、結局積雪量少く、且又晩雪が屢々あつた」といふ數

言によつて以上の事實はすべて説明し得るのである。換言すれば、今年の五月は晩雪のため二四〇〇米より上の雪尾根は毎年の四月の状態に類似し、平藏谷(二一二〇米)に於て晩雪の大なるアワ雪崩を生じたに反し、ハシゴ澤(一七三〇米)あたりでは、高所では晩雪であつたものが既に雨となり、冬の積雪の少き結果、押出の痕跡だも生じ得ず、例年の六月の雪量を示したに過ぎないのである。

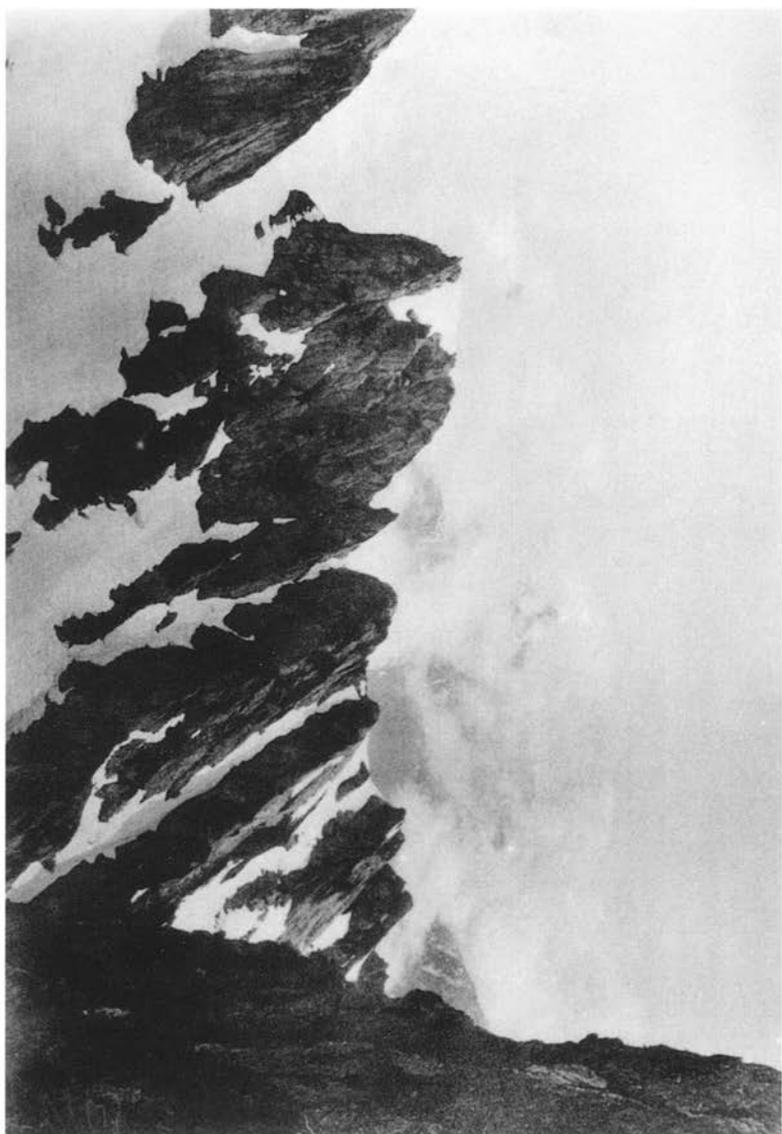
劍澤のみならず、我々は更に室堂附近及立山乗越に出掛けて、雪の變化状態及大日岳より立山川へ落つる雪崩と八峯より落つる雪崩を比較研究し八峯登路の決定に、十九日より二十一日迄、天候と雪との變化を結合して、残り少ない食糧に壓迫せられつゝも落付いて時を待つたのである。

五月二十二日 晴後雨。

深夜の月は劍澤に霞む。鶴ヶ御前の雪は何時もより凄い。沈黙の山。暖い夜。天氣の變り目の静けさが眞夜中に沈んで來てゐるのだ。吾々の食糧は已に餘す二

源治郎尾根より望める剣のハツ崖

岩永信雄氏撮影



三分となつて了つた。然し過去の天氣續きから見て、もう天氣も長くは續くまい。登攀の準備研究を全部修了した今日、天氣の變り目を知つたために登攀を企てずして引返すならば今迄の研究は實際に試めざれず徒勞に終る。八峯を全部登り得ずとも、引返すを餘儀なくされるまで、登高してみやう。人夫由藏を残し、吾々三人は出立つ。

午前一時四十五分。プレーカブルクラストを破る夏スキーのボーゲンが連續して、午前二時二十分には長次郎澤の出合をスキーデポにしたのである。長次郎澤のデブリをスキーで乗り越えて登ることは困難であつたので、スキー使用範圍を最大に擴げたい吾々も、八峯登攀にはこんな低所をスキーデポとせなければならなかつた。

長次郎澤の出合ひは已に雪はクラストになり得ず、氣温も亦七月の夜中より暖いといふ慘めな天候であつた。第三峯のスラブより落下した雪崩の裂斷面の間は堅いのを知つてゐたので日射前に第二峯第三峯の間の

雜 錄 ○五月の早月尾根と八峯

鞍部に出来る様に、ステップを所々切りつゝ登り行く。ステップもキックによつて作らるゝ程クラストも薄かつた。午前四時四十七分二峯三峯間のコルでアンザイレンして、第三峯に向ふ。五時卅分第二峯着。第二峯は雪庇を三ノ窓側に作つてゐる。それより岩峯と雪峯と二つを越えて第一峯に達する間には雪稜をリプライディング (Lip-riding) によつて通過せねばならない所が二十米程ある。吾々は斯る場所や雪庇の所は大抵ワン・アット・ア・タイム (one at a time) に動した。伊藤、西村、私の順序である。午前六時十五分——六時四十二分軽い朝食(パン)を朝焼に顔を照らし後立山脈を既に包む風雲を氣遣ひながら、吾々の積雪期の八峯第一峯に對する山行の祝福を強風に叫ぶ。雷鳥頭をかすめて飛び、曉の雪は青よりも已に樺色に朝日に映える。振り歸へれば劍岳は已にモルゲンロートに、八峯の尾根は、忠實な岩の上に狡猾な雪の山稜を頂き、吾々の心と體の合一した力によるクライムがやがて冬期に撰ばれて、彼八峯の峯々と我との合一すべき時の來

一五七

るのを待ち顔である。(寫眞参照)

今日は天氣と時間と體力とのゆるす限り、吾々は峯より峯へ勞働をつゞけて行かねばならない。八峯から長次郎の頭へ、それから劍の頂上へ、降路は本尾根を南へ前劍へやがて小屋へ、今日の夢はとめどもなく朝の樂園、この色と形と構造との中に続けられてゐた。

「ゴー・オン」の叫びに夢は破れてやがて現實の勞働が一步一步と滑らかなロープの掛きの掛聲軽く、七時二十分には已に第三峯スラブの登行を平衡の採れた連続的なリズムの許にたどる。

第三峯を降つて、長次郎澤側を絡りみ、第四の雲尖峰に達す、午前七時四十三分。クラストは已に腐れてステップは時々膝を溼す。午前七時五十五分第四峯頂上より下り始む。三ノ窓側に向つて第五峯と第四峯との間の鞍部まで下る。このコルには尾根に雪の隙間が出来るた。第五峯の登りには雪は一層腐る。八時三十一分——五十五分まで再び軽い食事をとる。第五峯第六峯の間のキレット迄の直接の下りをさけて、第五峯の

長次郎側のフェースの急雪斜面(六十度)を確保しつゝ、一人づゝ下る、午前十時三十二分——四十分第五峯のフェースを降り切つて一休する。この時斜面は未だ日射を受けてゐなかつたが温度の上昇により少しは融雪になつてゐた、然し雪崩迄には至らなかつた。早朝後立山山脈にあつた風雲は已に劍の頂上を襲ひ烈風吹き來り、雨模様となつて來た。雪の腐りは覺悟だが、この天候では、八峯後半を又の日に約して長次郎澤を降ることには決せねばならなかつた。只、懸雪の落下は最も注意すべきであつた。豫想の如く、午前十時四十七分源治郎尾根第一峯よりの雪崩を見る。十一時十二分には長次郎澤出合スキーデポに着し、晝食を取る。紅茶をわかつて、休憩しつゝ別山尾根より連続的に落下する雪崩の觀測をやつてゐたが、次第に雨模様が濃厚になつて來たので、午後一時三十分、スキーデポを發す。平藏澤出合まで劍澤を登つたとき遂に雨になつた。二時三十分劍澤小屋にビショヌレになつて着いた。翌二十三日からは雪から雨に雨から雪に、夕暮から

吹雪いて、遂に暴風雪の連日が続いた。食糧をつくして、吾々は八峯後半を來る日に残し暴風の劔澤を晴間をつかんで室堂へ、更に弘法へ、遂に芦峯へ夕方にはたどりついた。

總括

○後になつて聞いたが今年度五月の末には慶應山岳部の人々が宗作を案内として五月の八峯を完全に登攀され、又夏には七月に同志社大學山岳部及立教山岳部の二隊が、八月には會員吉澤氏が早月尾根に成功されたと、それらの報告の出ることを私は心待ちに待つてゐる。

○長らく忘れられてゐた早月尾根の今年は當り年ともいふべきであらうが、早月川側の劔岳登路として冠氏の言の如く早月尾根は立派なものである。併し本年度五月に四高旅行部津野北野兩氏がブナクラ谷炭焼小屋を出發して八時間餘で池ノ谷より劔頂上を極め、次いで三時間餘で池ノ谷をスキーで降つて無事ブナクラ

谷小屋へ引返した一日の早月川側劔岳五月の初登路は私の五月の早月尾根登路より遙かに優秀なるクライムであつたと思ふ。

特に池ノ谷は雪崩の危険はあるが雪崩に對する研究深き有能の士はこれを充分にさげうるであらう。

併し、一月の早月川側の劔岳登路としては早月尾根に寄るより他はないと思ふ。

五月に於ける私の早月尾根登攀所要時間は休憩及食事時間を加へ約十四時間である。之にスキー降下時間を加へて充分に一日のクライムに短縮し得ると思ふ。勿論ブナクラ谷炭焼小屋が根據地となるべきである。

○本年（一九二九）五月劔岳附近の天候及雪に關する私の觀察は、

一、晚雪。五月に今年は天候悪く快晴少し。

二、溫度。劔澤小屋（二四〇〇米）にて雨の日の溫度平均五度。快晴の日の平均溫度零下二度。（一日の最高最低により約一ヶ月間の平均）昨年十一月の溫度平均と比較すれば十一月より五月の方が溫度は高い。

雜 錄 ○五月の早月尾根と八峯

一六〇

三、實雪線。三月二十日 海拔 六〇〇米

四月十日 同 一二〇〇米

五月十四日 同 一三〇〇米（例年な

ら一九〇〇米まで上つてゐると思ふ。）

四、雪崩。冬期雪量の少なかつた本年度は冬の粉雪表層雪崩少く、晩雪のため四月五月に却つて表層雪崩の多かつたことは平藏谷のデブリの大なりしこと及三ノ窓谷に例年見る偉大なるデブリ及ハンゴ谷にデブリの無かつたことより推論される。

雪崩の出たとき、雪質と雪崩の關係を見るに最も根本的なる因子は雪の比重であるから、これを雪崩の程度その斜面で測定して逆に雪を見れば正確にその比重を推察し延いて雪崩を察知することは割りに簡單である。所謂ハイボスノーといはれるものの中最も比重の軽い〇.5位のものから、他の引越す因子が具備してゐるならば、五月に普通の吾々の所謂第二次的雪崩は劍澤の至る所で見出した。

劍澤の雪崩については詳細の Data 及地圖をそへて

遠からず報告したいと思ふが茲では唯だ粗雑な今年五月の概況を與へたのみ。

五、早月尾根二四〇〇米以上及八峯の雪量。

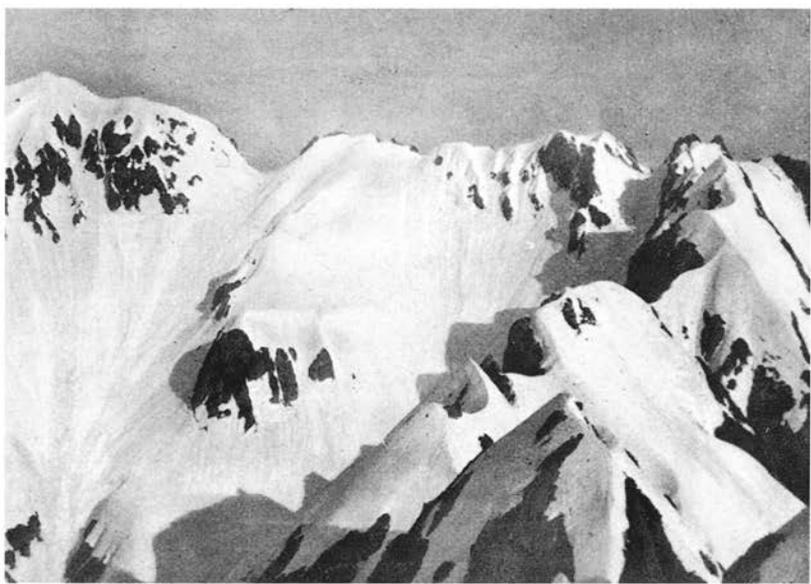
これは今年度は晩雪のため三月と變つてゐない様に見えた。併も雪の變化は五月の方が早く天候も五月の方が悪かつたから本年度五月の登攀は、例年の三月と比較してテクニクの點で同じ困難さを與へてゐたと思ふ。（終）

○黒部川の發電所

奔流と岩壁とを以つて人の近寄るを許さなかつた黒部川も、遂に物質文明の流れに押されて、その殆ど全流にわたる水利權が決定して了つた。

本流の水を使用する最下流にある柳河原發電所だけが完成して、既に昭和三年の一月以來送電して居るが順序として上流から下流へ向つて記載する事とする。

平より上は出願はあるがまだ決定はして居ない。平



(上) 大日岳より剣岳を望む
(下) 五月の剣八ツ峯

岩永信雄氏撮影
伊藤愿氏撮影

より始めて第一のものは御山谷と御前谷との中間大スバリ澤の下手、赤澤岳より西に派出して居る尾根の突端邊に高さ三百五十七尺の大堰堤を築いて、それから上流を全部貯水池として了ふ。堰堤の高さを三百五十七尺とし、堰堤の上を溢れる水の深さを假りに十三尺として水位は先づ三百七十尺高くなる勘定である。堰堤を作る場所が海拔約一三〇〇米である。これより一、二〇米水位が高まるとすれば五萬分の一地形圖の立山圖幅にある部分が靜水となつて了つて、モータボートを浮べることが出来る。

持小屋澤（五萬分一圖に據る、實は持子尾根と稱するものはあるが持小屋澤なるものはないのである）の一五〇〇米邊にも小堰堤を築き、水路を後立山側に作り、途中西澤小澤、新越澤の水を取り入れて、黒部本流の大堰堤上部に落して利用する。大堰堤から左岸に水路を作り、黒部別山の下を貫通して十字峽上手に落して發電する。水量一〇七〇箇、落差一二六九尺、九二八〇〇キロワットと云ふ本邦屈指の大發電所所謂

劔川發電所と稱するものである。

次ぎは十字峽下手に高さ六十五尺の堰堤を築き、劔澤發電所の放水と、劔澤の水とを合し、左岸に水路を作つて——所謂猿飛水路——猿飛附近へ放流し、落差一二八八尺を得、水量七三〇箇（これは當然増加して劔澤發電所と少くとも同一になる筈なり）で六三五〇〇キロワットの發電所を作る。許可になつて居るのは猿飛附近へ落す計畫であるが、樺平附近へ發電所を作るのではなからうかと思はれる。

以上二地點の水利權は東洋アルミナム會社が持つて居るが、工事は日本電力會社がやる筈である。次ぎは祖父谷、祖母谷合流點から取入れて祖母谷左岸に水路を設け、黒部本流に放水する一一〇〇〇キロワットの發電所所、この水利權は富山縣が所有して居る。次ぎは猿飛の下手で取入れ、右岸に水路を作り東嶺釣山の下を貫通して猫又谷合流點の上手に放水する鐘釣發電所である。水量七四〇箇、落差六三四尺、三三九〇〇キロワットであるが水量は當然増加するから、もつと

雜 錄 ○黒部川の發電所

一六二

大きな發電所とならう。東洋アルミニウム會社が水利權を所有して居る。

その次ぎは既に完成した柳河原發電所で、鐘釣發電所の放水を猫又谷の下手で取入れ、水路を右岸に作り、黒薙谷を水路橋で渡り、黒薙谷の水をも取入れて柳河原に放水し、五〇七〇〇キロワットを發電して東京方面及び大阪方面に送電して居る。また柳又谷では横山の下に水路を貫通し、谷の屈曲部を利用する柳又谷發電所、六〇〇〇キロワット、及び柳又谷と北又谷との合流點より取入れ、黒薙谷の日本電力の取入口上手に放水する一〇三〇〇キロワットの黒薙發電所の二つは富山縣が水利權を持つて居る。それより下流には既設のものに彌太藏發電所があるが、これは宇奈月からも見えるもので、本流の大發電所に比較すれば、一五〇〇キロワットと云ふ玩具のやうなものである。本流の水を桃原橋附近で取入れ、右岸に水路を作り、愛本橋附近へ放流する二六〇〇キロワットの愛本發電所の水利權は富山縣が持つて居り、今工事中の眞川發電所が

完成すれば直ちに着手するさうである。

また愛本橋より下流にも小さな發電所が二三出来ることになつて居るがこれは別に問題とならない。

柳河原發電所の水路工事に關聯して、人夫小屋其の他のものが美しい沿岸の風致を極度に害したばかりでなく、隧道を開穿した岩石片（所謂ズリ）を皆黒部の河原へ所々に棄て、崩れないやうに護岸工事を施したりしたから、あの美しい紺青の水が、白い河原を流れる風致は再び見られなくなつて了つた。しかし工用の電車が出來たので、その失はれた絶景の所は飛ばして了つて、手軽に上流へ行かれるやうになつたことは一部の人からは歓迎されるかも知れないが、どうしても再び昔に還す事が出來ないと思ふと悄然として了ふ。鐘釣發電所に關してはまだ直接工事には着手して居ないやうであるが、昭和二年の夏には、電車を延長する工事や、工用電力の送電線工事などで、樹木は散々に伐られ、土は掘り返されて、慘憺なる景を呈して居た。しかし小黒部から祖母谷に至る間は先づ昔のま

と云つていゝやうな状態であつた。猿飛附近の風致に關しては、營林署が非常に神經質になつて居る由であるから、恐らく祖母谷合流點から、猿飛を経て、小黑部合流點に至るまではそれ程害されることがないのではないかと思はれる。

この鐘釣發電所は比較的早く實現するものと思はれる。既に昔から林道があつた所であるし、吾々素人觀にでも小黑部まで電車を延長することはそれ程困難ではないであらう。最も大工事なのは所謂猿飛水路と劍澤發電所及び水路の工事であらう。劍澤發電所の大きな水車、發電機を如何にして運搬するかは大問題だらうと思はれる。樺平附近から一〇〇〇米の等高線に沿うて、東谷對岸に至るまで幅一尺乃至一尺五寸の歩道を第一に開くことにして、昭和二年の八月には盛に工事をして居た。そして昭和三年九月半にその歩道を劍澤まで延長した。逐次歩道の幅を擴げて、ガソリン機關車のトロを運轉する位にすると云ふ話であつたが、この方面に素人の私にはどの位の経費がかかるものか

またこれが發電所として引き合ふものか如何か見當がつかない。

劍澤及び猿飛發電所は工事としては随分面白いものかも知れない。しかしこれ等の計畫は陸測の地圖の上での計畫であるらしいから、實現するまでには幾多の變更があるものであらう。猿飛、劍澤兩發電所の工事を何時頃開始するかも局外者には見當がつかない。

黒部本流に沿うての三角測量は昭和二年の夏には盛に行つて居た。樺平と仙人谷の下流にあるヒトミ平とに基線を作つて三角を閉ぢる計畫であつたから、これが出来れば地形上の智識は著しく増加されるに違ひない。また御前谷、御山谷間の三百尺の大堰堤に關しては、新聞にも報道された如く昭和二年の夏試験的のボーリングは終つて居る。が昭和三年には第二候補地である御山谷下手でボーリングをやつて居た。

兎に角何年後に完成するかは知れないが、黒部川の發電計畫が全部出来て了つたならば、北仙人山へは索道が架り、シアヒ谷、オリヲ谷、アゾハラの谷、仙人澤

雜 錄 ○黒部川の發電所

等の支流は隧道を掘つた碎石で埋り、鞆鞆たる劍澤落口の瀑の音は轟々たる發電所の響に換り、美しい黒部川は永久に吾々から姿を消して、下廊下はテヨロ／＼の流れになり、平小屋は立派なホテルになつて夏の行樂の中心地になるのではなからうか。(S、B、生)

一六四

「山岳」第二十五年第一號の原稿メ切は昭和五年一月末日限りですから、其迄に入手するやう御送り下さい。

東京牛込區河田町十一

「山岳」編輯所

雜 報

○山小屋

乗鞍岳——東斜面、冷泉小屋と番所との中間に小屋を新設したり。該小屋及び冷泉小屋は冬季スキー登山に際して利用し得可しといふ。

間ノ岳小屋——北岳と間ノ岳との鞍部に（荒川側に二十分降る）今夏新設さる。

大樺池小屋——北岳北東斜面大樺池畔に本夏新設せらる。

甲武信岳小屋——甲武信岳頂上附近に新設さる。

大聖寺平小屋——従來の石室より北寄りに、同じく駿州側に向して新設されたり。但し大倉山林部の小屋にして純然たる登山小屋にはあらざる由なり。

惡澤岳小屋——同じく大倉山林部の小屋なり、惡澤岳頂上附近なりと言ふ。

廣河原小屋——小澁川廣河原に昨年新設されたり。

白馬スキー小屋——猿倉森林帯中に本年新設さる。尙白馬頂

上小屋も宿泊なし得る様本年は準備せられしといふ。

青梅鐵道延長——從來二俣尾を終點としたる同鐵道は十月より御岳山麓まで延長開通せり。二俣尾驛と御岳驛との中間には澤井驛あり。御岳、大岳山、氷川、日原、奥多摩方面の登山者に取りては好都合と言ふべし。

南アルプス登山路——聖澤、赤石澤の中間の尾根を攀ち聖岳より兔、大澤、百間平、赤石岳、小赤石、大聖寺平、西河内岳及惡澤岳より千枚頭を経て大井川に降る環狀路、今夏、開拓せられしと言ふ。（詳細は次號に譲る）

○各學校山岳部消息

静岡高等學校旅行部

拜復。貴會十月十六日附の御手紙拜讀仕り候早速御返事致管處學期末と部委員交代の期に當り取紛れし爲延引致し今日に至り眞に相濟ぬ次第に御座候、遅延ながら當部の動靜一報可致候。若し已に原稿其他締切済みなれば貴下の御自由なる取捨に御まかせ致す可く候。

一、當地は土地の登山熱が他都市に比して著しく少く、南アルプスを手近に控えても甲斐山岳會、信濃山岳會の如きものも無く、爲に學校一般の登山熱も一向にあがらず備に部を維持し

雜報 ○各學校山岳部消息

一六六

て居るに過ぎない恥しい状態です、しかし部としては出来るだけその勢力振興に努力致してゐます。

一、部の年中行事としては、夏山登山、冬のスキー、其他静岡附近の山を時々にははめてゐるだけの事です、富士の秋期登山もやつて居ます。

一、夏の動静は、北アルプス方面は一寸場所が遠くて取立て、申す迄ありません、只、スケヂュール以外に烏帽子、槍等も班を出しました。一般の傾向は、穂高縦走と立山方面に向つて居ます。

當部で及ばずながら力を入れてゐるのは、南アルプス、その中でも特に白峰以南、鹽見、赤石、聖中心の方面です、此の方面の事を一寸述べさせて頂きます。

静岡から此の方面に入るには二つの道があります、一は僕達の普通に加えらぶ道で静岡から安倍川を上り大日を越へて井川に出て田代を出発点として、聖中心に縦走する方法です、此のコースは可成に愉快です、田代ですべての準備が整へられます、只南の方は物資の供給が充分でなく、白峰の方は小屋が可成に完備して居ますが、赤石以南には完全な小屋は一つもなく、縦走は可成苦痛です、今年僕等は上河内澤を上つて上河内岳の肩にとりつく道をえらびました、普通は信濃俣を易老岳にとりつく

道を撰びますが今ではこちらの方が愉快です、更に田代から一日の行程で樺島に達します、此處は赤石、聖の主峰を眞近に、山の中心地を呈して居ます、但し夏季のみしか物資は得ることが出来ません、山林伐採のために出来た夏期のみ部落です、僕等は普通静岡田代樺島とコースを取りますが、富士身延鐵道を身延或ひは波高島で降りて早川を馬車トロにより西山温泉の方まで行かず、途中の大島で降りて沢の下を越へて出るのが一番便利の道の様です、赤石には大倉の小屋と石小屋とがあります、大倉の小屋は餘り頑丈でないので可成いたんで居ることは居ますが、荒川岳下のお花畑中に位置して素敵な場處です、但し大倉の所有物ですからこつそり泊るか頼んで泊めて貰ふかです、普通は石小屋に泊ります共、番人は居りません、樺島からなれば赤石、荒川、悪澤は一日行程です、物凄く立派な道がついて居る一寸恥しい位です、東岳(悪澤岳)下にも大倉の小屋があります、荒川、悪澤の尾根を大井川に下ると東岳と西岳の合流點二軒小屋に出ます、東岳の取入口として小屋といふ小屋はありませんが物資は得られるでしやう、此處へ入るには先に逃べた早川の馬トロを新倉まで來り其處から驛付越を越へます、此處もあの美しい鹽見岳を極める人々又東岳を澤上りの愉快さを味はひつゝ間の岳に出やうとする人々には恰好の中心地です、東

侯上りは本當に愉快な浮上りです、更に極めやうと思つて未だに極め得ないのは望深です、數多くの人々によつてこの望深は説かれて居る様に可成爽快な浮上りらしく思はれます、その盡きる處は聖平で喬木に圍まれたいゝキャンブサイドです。

尙山案内人を雇ふ場合には、甲州側では西山温泉で静岡側では田代で雇うより外に手段はありません、少し不便の様ですが殊に静岡側の人夫は極めて質朴で手紙さへ出せば田代から樺島位まで来て待つて呉れますし本當に愉快な人夫だと思ひます。田代では主として「ますや」に頼めばよいのです、別に人夫組合は出来て居ません。以上で御報告を終わります、勿論、信州大河原口からの登山も御座います。

一、尙別封で部報「山彦」を送りますから御覽下さい、今年から出して見ました、創刊號です色々御批評を頂ければ尙幸ひです、一年一回十月頃に出しますから此から又御厄介になりたく思ひます、又時々展覽會等も開きたく思つてゐますからその節はよろしく頼みます。

東京高等學校山岳部

當部は創立以來まだ年淺く、特に之と云つて擧げる程の物はありません。今夏は變つたコースを取り入れた譯でもなく、全く平凡なものでした。併し我々にはあの雄大な妙高山の麓を占

めてゐる池の平及び、之に對してゐる種かな、土用中でも暑さを知らない野尻湖の畔に寄宿會があるので、自然之等を中心として、華かだが繁雜な北アルプス地方とは違つた、地味だが充分得る所のあるコースが出来てゐます。又此の寄宿會は冬になるとスキー練習の爲に使はれ、朝早く出れば日歸りの雪の妙高登山も出来ます。その他燕槍の縦走、烏帽子より穂高へ出るコース、又のんびりとして天幕を持ち、ゆつくり遊びながら、時には附近の山々に登り、或は湖で泳いだりして行くと云ふ目的で、御殿場より富士五湖を廻つて身延鐵道の若葉へ出た班もありました。上高地の天幕は七月十四日頃より八月半過ぎまで張られてゐて、その間北鎌小槍空攀を初め色々多く收穫を得

ました。今年は特に各班と東京との聯絡を完全にすることに力を入れました、各班とも殆んど毎日便をして、家族の方々より全く心配を取り除く事が出来ました。尙今夏の報告の一つとして左に烏帽子より穂高へ出た班の記録を掲げて置きます。

第六班 報告

當班は烏帽子岳―槍―穂高の縦走を行つた。七月十六日東京を出發した翌日は大町の祭禮のため人夫が足りなくなつたので一日お祭を見て暮してその翌日から烏帽子岳へと出掛けました烏帽子の野營地で霧に止められたのを除くと後は割合に天氣に

雜報 ○各學校山岳部消息

一六八

めぐまれて、遠くの山がよく見へて愉快な旅を續けました。槍の西鎌で雷雨を喰ひましたが、大槍の頂上へ上つた頃にはすっかり晴れて遠く北は立山、劔岳、南は御岳まで見ええました。雲の關係から虹が圓形に燕岳の上に見えてゐました。後で聞いたことですが新聞には大あらしの様に書いてあつた相で部長が大變びつくりされたそうですが前述の通りです。

槍の肩の小屋を五時に出發して、北穂の頂上まで一息で歩きました。潤澤岳の鎖に膝を冷し白出の小屋へ來ました。奥穂へ登つてしまつてからは順調に河童橋へ着いてしまひました。

六高山岳部

拜復、お手紙拜讀しました、早速報告しやうと思ひましたが何やかやと遂取込んで延引致しました、お許し下さい。扱て今夏の我部の活動は大略次の通りであります。

(一) 燕、常念、槍縦走

出發期日 七月十三日

コース

第一日 岡山―名古屋―松本

第二日 松本―有明―中房温泉

第三日 中房―燕小屋(燕岳往復)

第四日 小屋―西岳小屋―殺生小屋

第五日 小屋(槍岳往復)―上高地(解散)

(二) 鳥帽子、槍、穂高縦走

出發期日 七月十三日

コース

第一日 岡山―名古屋

第二日 松本―大町―笹平―潤澤小屋

第三日 小屋―ブナタチ尾根―鳥帽子往復―小屋の前に

テントを張る

第四日 テント―野口五郎―蒼羽―三俣連華

第五日 連華―縦澤岳―槍ヶ岳―殺生小屋

第六日 二班に分れ、一つは中房方面へ、他は穂高を縦

走す

第七日 殺生小屋―穂高小屋

第八日 小屋―西穂岳高縦走し小鍋谷を下る

第九日 蒲田―室堂―槍ヶ岳

第十日 槍ヶ岳―上高地(解散)

(三) 穂高登山

出發期日 七月十三日

コース

第一日 岡山―名古屋

第二日 松本―鳥々―蠶止―徳本頂上―上高地

第三日 休養

第四日 前穂に遊ぶ

第五日 上高地―明神頂上―前穂をからみ奥穂に到し穂

高小屋につく

第六日 小屋を出て第五と第六の鞍部に到し第五、第四

のピークを夫々登攀し前穂の頂上に達す、再び

小屋に引返す

第七日 天候悪しきためジヤングルムを掘み、大キレツ

トに出で西穂頂上に到り小鍋谷を下り、蒲田窪

第八日 休養

第九日 蒲田―焼岳―上高地

第十日 上高地―槍ヶ岳

第十一日 槍ヶ岳―上高地―中ノ湯―奈川渡―松本〔解

散〕

(四)立山、薬師、槍縦走

出發期日 七月十二日

コース

第一日 岡山―大阪

第二日 大阪―富山―千垣―芦峯―藤橋

雑報 ○各學校山岳部消息

第三日 藤橋―弘法小屋―追分小屋

第四日 小屋―室堂―立山頂上―五色小屋

第五日 小屋―スゴ乗越小屋

第六日 小屋―薬師頂上―上ノ岳―五郎小屋

第七日 小屋―連華―双六―槍ヶ岳

(五)槍肩キャンプ及び槍平室堂生活

第一日 大槍を極め小槍に九人登る槍肩にテントを張る

第二日 半数は室堂に下る

第三日 休息

第四日 テント―大槍―北鎌獨立標高往復

第五日 新人來れるため再び小槍に登攀して後、槍平室

堂に降る

第六日 瀧澤をうかがふ

第七日 再び二班に分れ一つは穂高を縦走して穂高小屋

に到着し他の一つは槍肩より槍澤を經て上高地

(解散)

この他、劍、笠、針之木、富士五湖廻り、及び中國山脈縦走

等企てしも都合により中止せり。

大體これで我が部の今夏の動靜をお傳へした筈です、只吾人

は貴意に副はざるやを恐れるのみです。

一六九

終りに日本山岳會の益々隆盛に赴きつゝあるを喜び會員諸兄の健康をお祈り致します。

五高山岳部

位置の關係から本山岳部の活動舞臺は九州の山岳を主とします。勿論夏季休暇には四國、日本アルプス方面へも必らず出掛けはしますが地の利を得ざる不便から此の方面に就ての大した新收穫は望まれぬのも止むを得ません。今次に今夏發表せるプラン中無事決行せるものを掲げます。

第一班 屋久島

第四班 祖母、久住、由布より別府へ

第五班 祖母、傾山縦走

第八班 石槌山方面

第十班 焼、檜、燕岳

第十一班 劍、立山、針木峠へ

第十三班 朝鮮金剛山

以上七班に過ぎず他は天候、班員の故障等の爲未決行に終つたものです。此の中第一班の屋久島に就き簡單に御紹介致しますと思ひます。

從來九州の山岳として阿蘇、雲仙、霧島の三名山を始め、祖母、久住、市房、英彦、由布等のある事は大方山に心ある人の

よく知る所ですが此處に一つ、つい最近迄全くその山岳としての存在を無視せられて居たのが此の屋久島です。〔山岳第十七年第三號雜錄「屋久島行」參照〕

唯屋久島と丈では九州の人すらその位置を知らぬ位漠然たる存在ですが、それ丈に、神秘と驚異に充ちた處女山岳なので此處は鹿兒島を西南に距る四十九湮の洋上、陸南列島中の一小火山島です、此島の山岳が重視せられ出したのは此の二三年の事で同地の營林署及び二三登山者の宣傳報告に依るものです。

我部では一昨年試験的に探險的に踏破を企て實に非常な收穫を以つて歸りました、そうしてかゝる獨特の趣ある山岳の知られずしてある事を誠に遺憾として爾後、春夏の休暇には必らず特別班として此地を訪ねる事とし踏査研究を續けて居ります。

此島は周回十數里に過ぎぬ小島ですが島全體が海中に聳へ一大山塊をなし、その最高峯宮浦岳は九州本土の最高峰久住山より約一五〇米も高く此の外障子、黒味等の峻峰が聳立して居り地域の狭い割に高峰の多い事は此處の一大特色です。従て海岸から直ちに山に入り全山岳殆ど大原始林に蔽はれ、南海の一大神秘境を形造て居ります。屋久杉の名を聞かれた人もありませんが、杉の巨木の多い事は日本一と云はれます。又始ど亞熱帯に屬し神秘幽玄な境域中暖い南國的情緒の漲れるあり、日本ア

黒部川上廊下

約 $\frac{1}{21000}$

「黒部川」附圖

渡邊漸氏作成

- 26/VIII
- 平 1.20 P.M.
 - 釣橋 1.23
 - I 1.30
 - AA' 1.30-2.10 草俣ノヘツリ
 - B 2.10 ヘツリヲ終へ流キ水ヲ越ニ出ツ
 - II 2.25
 - C 3.00 中ノビキ落口稍々上手、小憩、下流ニ立山ヲ見ル
 - D 3.15-3.50 岩場踏
 - EH' 3.50-4.30 岩場ノヘツリ
 - III 4.45-5.00 水溜ニ遊シ、且ツ流ヲ察ス
 - IV 5.10
 - V 5.25
 - X' 5.30 野營地着 (東澤川合上手右岸ノ窟)

- 27/VIII
- X' 7.45 A.M. 野營地發
 - I 7.50 右岸ヨリ申淵へ
 - II 7.55 申淵ヨリ右岸へ
 - A 8.00 岩場ノヘツリ
 - B 8.05 上流ニ初メテ薬師岩ヲ見ル
 - III 8.20
 - C 8.25 冠カキヘツリ
 - IV 8.30 腹マデ遊シ流早シ
 - D 8.40 上流左岸ニ鷹ノ目ノ岩ヲ見ル
 - V 8.45 岩ニ上リテ移ル、流ヲ流レシ
 - E 9.12-9.25 小憩、赤牛岳ノ一角ヲ望ム
 - F 9.40-11.25 鷹ノ目ノ岩直下ニテ行キ留マリ、左岸ニ沿ヒテ、高マハリヲナシ通過ス
 - G 11.25-12.00 此ノ岩場ノ上ノ手ニテ遊食
 - VI 12.03 P.M. 遊シ
 - H 12.05 長キ一問バカリノ岩場踏
 - VII 12.10 瀬可成早シ
 - VIII 12.20
 - I 12.30 左岸ニ沿ヒテ、行キテ、申淵ニ出テ、マダ左岸ニ居リテ遊ム
 - J 12.45-2.05 口元ノ大ナル瀨直下ノ手ニテ左岸ニ移リ、瀨ノ上ノ手ノ岩ニ遊シ、ソノ上ニテ、野口、米谷ノ兩人方左岸ニ沿ヒ、高マハリヲナシ前邊ヲ見届ケ來レル間行ツ
 - KK' 2.05-2.45 再び左岸ニ引返シ、瀨下ヲ高マハリナシテ、草俣、瀨水中ヲヘツル
 - IX 2.50 腹ニ遊シ、且ツ水速ヲ察ス
 - X 3.10 腹マデ遊シ、且ツ水速ヲ察ス
 - L 3.20 コノ瀨ヨリ右岸ノ傾斜極ムク、瀨踏クナル
 - XI 3.35 前カニ遊前遊見ユ
 - M 3.50 東信濃ニ合シ、シバクシテコロシテ離レ出ツ
 - N 3.55-4.20 瀨下瀨落口稍々下手ニテ小憩
 - O 4.22 再び東信濃ニ合シ、シバクシテコロシテ離レ出ツ
 - XII 4.35
 - X' 4.35 野營地着 (黒部川合下瀨ノ中間ノヤ、黒部川ヨリ左岸ノ窟)



- 28/VIII
- X' 7.35 A.M. 野營地發
 - I 7.40
 - II 7.45
 - III 7.55 腹ニ遊シ、且ツ流早シ
 - A 7.57 黒部川合口對岸ヨリ黒部川ノ方向ニ圓山ヲ望ム
 - B 8.10 左岸ニ美シキ立岩ヲ見ル
 - C 8.35 岩ノ上ヲ行キ10米バカリノ Abseilen ヲナシ、尙、何ラク水面近クヘツル (東信濃ニ相當スル地盤ヲシテ、岩ニボートノ打込メアルヲ見ル) 用中ニ三角形ノ大石アリ流レテ二分セリ
 - D 8.50 右岸ヨリニ大ナル花崗岩アリ、一寸登リニテシ
 - IV 9.00
 - E 9.00 徒渉ヲ終リ、左岸ノ細狭キ岩段ヲナセル花崗岩上ヲ行ク
 - F 9.27 兩岸ノ岩壁下狀ヲナシ、左岸近ク徒渉ヲ避ビテ、徒渉ノ氣味ニテ遊ム
 - V 9.40 石トビツ、急流ヲ横ギリ、右岸稍々下手ニ移ル
 - G 9.50-12.00 赤牛岳ヨリ西北ニ遊出セル尾根ノ突端ニ相當ス、兩岸下狀ヲナシ行ツマレリ、野口、米谷ノ兩人右岸背後ノ瀨レ谷ヲ登リ、前邊ヲ見届ヒ行キ正午近ク管治ヒニ深キ徒渉ヲナシテ、上流ヨリ降り來ル、突食徒渉ノ準備
 - VI 12.00-12.20 P.M. 水深約1.1米ニ遊シ、距離20間バカリノ岩壁、最長ノ徒渉ヲ下テ流勢ハ緩慢ナリ、斜メ下手ニ左岸ヨリノ岩ニトリツク、(足ガハリ懸ルク、アガリニテシ)
 - II 12.30-1.05 上瀨下ノ核心、ロープ、ビトンヲ用イテ左岸岩壁ヲ水面近クヘツル、左岸背後ノ瀨踏スルシ、コレヨリ左岸ニ沿ヒテ水中ヲ行ク
 - VII 1.10
 - I 1.10 左岸岩壁ニ數段ノ繩トナリテ攀ツルヲ見ル
 - VIII 1.17
 - J 1.20-2.10 腹ニ上流ノ、左岸岩壁ノタキノ瀨ノ上手ヨリ岩場、20米バカリヲ Rope ヲ用イテ登リ、草地ノ小平地ニ出ツ、コレヨリ草俣、瀨水中ヲヘツル
 - K 3.00 ヘツリヲ終へ、30米バカリノ Abseilen ヲナシ、瀨近クニ降ル
 - IX 3.10 瀨ヲ、瀨早シ、コレヨリ右岸ノ水面近ク岩壁ヲヘツリ、瀨ヒ水中ヲ行ク
 - L 3.25 金作谷瀨口下手右岸ノ段丘地
 - X 3.40
 - X' 3.40 野營地着 (金作谷瀨口下手、右岸ノ窟)

- 29/VIII
- X' 7.35 A.M. 野營地發
 - I 7.35
 - A 7.40 金作谷瀨口對岸ノ瀨踏地、コノ所ニテ瀨踏ハ水速ニ相當スルヲ望メ、ソノ瀨キハ瀨口ヨリ上手ノ水速ニ向ツテ一町バカリ延ビタリ
 - B 8.00 東信濃ニ合シ瀨踏スルシ此ノ瀨ヲ行ク
 - C 8.15 赤牛岳ノ大ナル瀨ヲソノタキノ下手ニテ横ギル、水流ハコノ附近ヨリ上手側ヨリ開瀨下ヲナセリ
 - D 8.35-8.45 赤牛岳ヨリ來レル大ナル瀨、小憩、下ノ岩場ニテコロシテ離ル
 - K 9.10 高マハリヲナセル 東信濃次瀨ニ水面近ク降り來ルコトニテ瀨ヲハナレ瀨ニ出ツ
 - II 9.17 石ヲ拾ヒテ渡ル
 - III 9.30 石ヲ拾ヒテ渡ル
 - IV 9.37
 - F 9.45 薬師岩ヨリ瀨踏アル大ナルアルレ谷來ル
 - V 9.50 瀨ヲ早シ
 - G 9.50 上手、赤牛岳ヨリ大ナル瀨來ル、コノ瀨口ノ稍々上手ニテ水流ハ狭闊ヲナセリ
 - H 10.00 東信濃ニ合シ、屈曲セル溪間ニ相當セル部分ヲ高マハリス、上流ニ沿リテ「赤ノ平」ノ一角ヲ望ム
 - I 10.10-10.20 東信濃ヲ離レ、河原ニ降りテ行キテ小憩
 - J 10.37-12.00 立石、奥ノ大ナル瀨出合、突食、休憩
 - KK' 12.00-12.20 P.M. 東信濃ニ合シ、立石ノ上ノ瀨下ノ高マハリヲナシ
 - L 12.20 東信濃ヲハナレ、瀨ニ降ル、下ノ瀨ニテ赤牛岳ヲ望ム
 - M 12.30 瀨踏アル瀨口ノタキトナル瀨、薬師岩ヨリ入ル
 - N 12.40 右岸、風險ナリシ岩壁ニ近ク30米バカリ岩場立ス
 - O 12.50 瀨踏アル大ナル瀨ニテ瀨踏ヨリ入ル、ソノニツノ瀨ノ瀨口ハ僅カニ距レルニ、瀨踏ハ右岸ニテ瀨ヨリノ上手ヲ行ク
 - P 12.55 右岸ニガレアリ、此邊ヨリ兩岸瀨踏トナル
 - VI 1.10
 - VII 1.15
 - Q 1.30 瀨踏クシテ瀨踏多シ、針葉樹ソノ美ヲ加フ
 - VIII 1.55
 - R 2.00 右岸ニテキナル瀨ヲ望メテ左岸水中ヲ行ク、所謂「上瀨下ノ入口」ノ下手ニ來レルナリ
 - S 2.15 美シキ「トロ」アリ、此處ニテ「上瀨下ノ入口」ヨリ出ツ、對岸、瀨ノ平ヨリ來レル瀨ノ瀨口近ク東信濃ノ瀨セルヲ見ル
 - IX 2.30
 - T 2.30 瀨踏ニ出合ヒ、コレヨリ細狭キ、瀨山道ヲ行ク
 - U 2.37 瀨山ノ小屋、コレヨリシバクヲ離レテ
 - V 3.10 瀨山ノ小屋ト物置
 - XIV 3.30 瀨踏ヲ終リ、薬師岩右岸、瀨口ノ野營地着

ルプス其他内地諸山岳に於て味ひ得ぬ、快味を持つて居ります。従て植物、動物、或は地質の研究資料も無盡蔵な事と思はれません。

近年、九州の山岳も著るしく木州方面よりの登山者を迎へる様になりましたが惜しい事にはかくも懸絶せる特色を持つ屋久島が全く愛山家大方の知る所とならなかつた事です。今後九州の山を訪ふ人が今少し足を延ばして此の屋久島迄行かれたならば必ずや其處に異常なそして素晴らしい山の事實を見出し感激せらるゝ事と信じて疑ひません。

何れ詳細なる同地紹介の出来る折を待ち(當部としては未だ)不完全な断片的記録を以つて過ぎませんから)今回は甚だ粗雑ですが屋久島なる山岳の存在を抽象的に御紹介するに止めます。

○會員通信

兩神山、二子山 昭和四年六月 高畑 棟材

△拜呈。兩神山附近の新緑を探ねあるきたく【第二十年一號雜錄、兩神、父不見、西御荷鉾(戸澤英一)参照

雜報 ○會員通信

編者註】去る一日豫定の如く出發同夜は河原澤の森木屋(伊部サダ)に一泊仕候。河鹿の美聲に聞惚れ乍ら例によりて宿帳調べを試み候木暮氏初め松本神谷兩先輩のサインが眼に付き非常に嬉しく思ひ候。二日は終日好晴、朝六時に宿を離れ大平を経て八町峠に達しそれより岩尾根傳ひ西峰に向ひ少々素人おどしの難場を過ぎ【前記戸澤氏紀行中、瘦尾根だから八町峠へ抜ける事は六ヶ敷しくあるまい云々——編者註】十一時過に八日見様(龍頭神社)に著き淺間から奥秩父へかけての眺麗を恣にしつつ軽い中食を攝り候眼の下の金山部落の屋根ピカピカと光り居り其下の中津川上流には今頃ベスピナイトとか中ず寶石探しに血眼になり居る者共がウヨウヨ(?)してゐるかと思へば自から苦笑を禁じ得ざる次第に候願はくはアラビヤナイトの如き夢物語に終れかし。正午に同所を發して眼の前に時つ裏峰に取つ付き候が手がかり足がかり多過ぎ噂ほどの難場にては決して無之候ひき。曾遊の神流川水源地の山々殊にも信州の小倉山の豊かな山容をなつかし

一七一

みつつ岩尾根を傳はり午後一時四十五分兩神本峯の二等三角點に立ち申候。眺望洵に廣く充分その恩恵に浴し候。歸路を日向大谷に取りウグヒス、コマドリ、ミソサザイ、クロツグ、エボ等の美聲に耳傾け乍ら例の樹林中の細徑を下り清瀧(不動瀧)にて一と休みのものち日向大谷に到り同所より急な峠路を辿りて軍道に達し再び森本屋の關を跨ぎしは七時頃にて候。翌三日も亦好晴、七時に宿を發つて二子山へ向ひ候。叶山方面への道を左に見送りてよりは二子山鞍部へ登る日向みち木の鳥居をくぐりてより暫くは木立あれども忽ち草いきれのする坊主山を登るのは夏は御免のところにて候。願れば赤岩峠から三つ四つの岩峰を連ね一度低まつて八町峠となり再び岩峰を連ねて西峰東峰となる兩神山の全容は二子山より眺めたのが最も宜しきやうに存候。北裏より絶頂へのヤブを掻分けつつあるうちに急に嫌氣がさし東西御荷鉢から赤久繩稻舎を経て杖植峠に至る連亘を心ゆくばかり眺め頂上を一投石の處にして踵を返し申候。山中に方解石の夥しく露出する個

所在り見事な奴を澤山顶戴してから下山(十時頃)。宿にて荷を受取つて小鹿野迄歩き同所より長瀨行のバスを利用、長瀨にて危ふく終電車をとらへ候ひき。

大川(日原川)、大雲取谷、雲取山

昭和四年六月 長谷川長次郎

△拜啓小生去る六月十七日正午新宿を發し二俣尾よりは道路工事の爲め氷川迄の自動車を得ず新高橋より久し振りにて大汗をかき、夜八時日原に着し候、今回は孫曾谷出合より大川(日原川)を雲取山迄溯行致す豫定にて【第二十二年二號雜錄、日原川本流を降る記、吉澤一郎參照——編者註】乍早速山崎壺一郎黒澤峯吉に相談いたし準備を調へ夜おそく就寝仕候。

十八日は五月雨時の空もよひ定まらず候も出發致すことに決め黒澤に食糧其他を燒原小屋へ運ばしめ小生と山崎とは小川大川の出合より孫曾谷出合へ下り申候大川の悪場は魚止、小魚止の二瀑を除いてはこの邊より中小屋澤(三峯圖幅の日原川と書かれし日の字の右を南に流れこむ澤)附近迄に有之候。

マレーダシの大淵、ヤナノ瀑など徒渉ヘヅリを繰返し已ノ戸谷出合迄參り候頃怪しかりし空よりは遂に細雨を落し追々強きを加へ手がかり滑りて如何とも仕難く餘儀なく曲久保を上り燒原小屋道へ合し名栗澤（宛字）を少し下つて名栗小屋にて焚火を起しぐしよぬれの衣類を乾し中食をしたゝめながら露るゝを待ち居り候も益々險惡に相成り候へば明日の晴天を期しつゝ小屋を出發し午後四時燒原小屋に着し候。

小屋には先着の鰯釣二人宿泊致し居り候。

曾て大雪の日長澤谷を下りて此處迄來て一安心致せし事など回顧致し三人顔見合せて微笑禁じ得ず候【第二十二年一號一四七頁會員通信欄參照——編者註】

夕方頃より全く霽れて夕映美しく二人にて十數匹釣上し鰯、ヤマメにて賑やかな夕食を致し候月光淡く流れて御祈禱鳥夜通し鳴き居り候、十九日は美晴にて山崎は後の始末をつけ小雲取谷の出合にて落合ふことゝし小生と黒澤とは午前七時小屋を出發し昨日の道を戻り赤石尾根より大川へ下り立派な丸木の唐松橋を渡つ

て河床へ下り候唐松谷並んでマミ谷共に瀑にて大川に出合致居候、相變らず徒渉ヘヅリを續けながら小魚止の瀑の左岸をからみ再び河床に出で八時半長澤谷の出合に着し候。

それより善兵衛瀑ゴンエ谷出合の瀑カジ小屋モリクボの瀑を経て晝頃小雲取谷出合に達し候カジ小屋は燒原小屋より二間小屋尾根を横斷して雲取ゴンエ尾根へとつづく渡り場に有之中食をすませヤマメを釣り兩崖壁立の切通し並にその瀑壺には右岸に架橋をし通過仕候その頃兩翼全長六尺程の大鷲突然十間程の處より飛翔致し候は谷の幽邃と相俟つて一幅の畫に有之候、聽て大雲取の大瀧と呼ばれ居り候二丈程の瀑はその左壁を飛沫を浴びながら攀ち間もなく六間谷が數個の瀑を懸けて出合致し居り候この邊より谷筋荒涼として水少なく暫くして淺くなりて山毛榉梅等の大木を縫ひつゝ後へに天祖山梯子坂のクビレ邊りからミツドッケ西谷大剝邊を望見し得られ候。

午後六時雲取山頂の東のカヤトに出で暮れ行く迄三

角檜に上り眺望を恣にし七時山頂より三峯山道を約十五分下りし道端に建てありし新設武州雲取小屋へ一泊仕候。

今日釣り上しヤマメ約二十匹。いくらかを夕食の膳にそへ残りは東京への土産と致し候。

二十日快晴にて七ツ石鷹巢を尾根通し氷川へ出る豫定を二人共三峯へ参拜したく申居候へば三峯詣と相決め六時半小屋を出發仕候。

深き大洞谷を左に見下しながら今日もこよなき眺望に浸りゴゼンタチバナやイハカミの咲く道を正午三峯へ着し申候。

三峯へは約十年ぶりにて参詣致し候ひしが秩父宮紀念館目下工事中に有之候。

其處より二人は大日向へ出で山通し日原へ歸り小生は大輪へ下り歸京仕候。

最近營林署にて處々に指示板を設け里數山名等指示致し候は非常に結構なる事と見受け候も芋木ノトツケ下の指示板には雲取山の南に位する山名をこゝへ當嵌

めるなどは如何かと存じ候尙芋木ノトツケを日原にてはニヨングラと呼び居り候(六月三十日付)〔前註の第二十二年二號吉澤一郎氏の記録と對照せば互ひに補足する所多し。——編者註〕

霧島山

△拜啓。霧島山は其名に因みて霧の旅、搗て加へて雷鳴やら綱引のやうな雨やらで散々。尤も小生はこんな日は登山せず汽車と自動車を利用して霧島温泉に到達樓上より遙に鹿兒島灣を見下ろして休養宜しくといふ次第。温泉の種類約半打、熱湯の好きな人にもそんなのに入れぬ人にも夫々向くもの有之候。例によつてそれ等に一々浸り體を伸したり縮めたり。山の湯としては設備等良きに過ぎ候も、氣分は關西温泉の比に無之候。(七月九日霧島温泉にて武田久吉)

白馬岳祖母谷

△七月十三日午後四時廿八分大阪發。同十五日四ツ家登山口發高女生十一名、女専生十三名、女教員貳名を伴ひて白馬登山仕り、十六日は頂上小屋に滞在、杓子

岳、鎧ヶ岳方面へ散歩、十七日頂上發、清水岳より祖

昭和四年七月 角田 吉夫

母谷温泉に下り一泊。十八日黒部谿谷の一部を見せ、新鐘釣温泉泊り。十九日山中温泉泊り。廿日午後四時四十五分大阪驛着にて、女學生團體登山をいたし候。

本年女學生の團體としては白馬の第一番の山中居り候

(竹下英一、朝輝記太留)

白峯三山、鹽見岳

昭和四年七月 大熊 保夫

△拜啓。本年は梅雨明實に好く天氣も續き登山日和に中分無之候會員の中には最早や出かけられて不在の方々も有る様に見受けられ候陳者私も梅雨明前より計畫致居りしも人夫や當方の都合にて延び申し本朝やつと山入りの第一歩を踏べく當地に參り候此れより人夫野田清吉を供に廣河原峠―大禰池―北岳―間ノ岳―農鳥岳―熊ノ平―荒倉岳―北荒川岳―鹽見岳―本谷山―三伏小屋より大河原下りと云ふコースにて四五日間歩む豫定に御座候(葦崎にて七月二十八日付)

湯俣、黒部源流、奥ノタル澤

雜 報 ○會員通信

△小生去る七月二十日、都の酷暑を後にして旬日を黒部川上流に過しました。水量の多い高瀬川湯俣川に三泊の苦闘をなし、蓮華小屋より黒部上流に入り、五郎澤、藥師澤、立石等に遊び上の岳より槍、常念を経て八月二日歸京致しました。

其際奥ノタル澤(岩苔小屋)を溯つてみましたが、【本記録は奥ノタル澤溯行の第二回目なり、大正九年九月、澤本氏兄弟に依りて始めて登らる―編者註】豫期に反して明るい歩きよい谷です。立石の落口に近く岩壁と瀧はありましたがそれも僅かにて、美しい草原其處には數多くの池あり、残雪に輝く藥師の姿を浮べた所もありました。又黒岳に近く上流附近には澤山のサンショ魚の姿を氣味悪く見ました。時間の都合にてオクノタル澤に一泊しましたが、溯行所要時間は九時間程でした。

會報

○本會集會室兼圖書室に就て

本會の集會室兼圖書室設置に就ては、從來もたびたびその必要が提唱されたのであるが、何分會の資金が不充分なので今日まで延びくゝになつて來た。しかし先般「山岳」誌上にも發表したやうに本會の中心を作るといふ意味に於ても、どこかに會の本據を定めることは缺く可からざるものと考へられる。

それで先づ本年十一月から市内芝區虎ノ門附近に一室を借受け、之を本會の集會室兼圖書室として準備を整へ、今ではどうか會員諸氏の來室を待つことが出来るやうになつたのである。勿論目下の所では備付圖書なども未だ不整頓ではあるが、追々整備される筈である。

右の集會室は甚だ狭少で、決して充分とは申されないものである。それでも現在の本會の資金を以てしては、その室料を支辨してゆく丈の餘裕がないけれども、會の中心を作らうといふ氣分の具體化したのを好機として、兎も角もこの一室を維持してゆきたい。それは經常費(室料及圖書購入費)の一部を本會より支出し不足額は之を會員諸氏の後援に待つので、即ち有志の諸賢に通常の會費以外に更に幾分の維持費を負擔して頂かうといふのである。この維持費を負擔して下さる會員は假に維持會員と稱し、特典として圖書の貸出しをすることにした。そして維持會員が多ければ多い程よろしいので、韓信の所謂多々益辨ずとはこゝにもうまく當て嵌る譯である。

創立以來二十有五年といふ短くない歴史をもつ本會を厩一層鞏固なものとする爲に、茲に會員諸賢の助力を切に御願ひする次第である。

日本山岳會集會室兼圖書室要項

一、所在地 東京市芝區琴平町二（市電虎ノ門停留所前）。不二屋ビルディング。三階南側。

三〇七號室。

一、設 備 本會所藏雜誌及圖書を置く。

一、閉室日時 當分の内毎週水曜日及土曜日、午後六時より九時まで一般會員に閉室す。

一、維持會員 昭和五年度より通常會費（年額六圓）以外に維持費（一口年額五圓）を拂込むものとす。

一、圖書貸出 維持會員に限り備付圖書の貸出をなし得。

（贊助員氏名は本欄の終りに載せあり）

○會員の計報

會員篠山進氏は、本年八月十五日逝去せられたる旨遺族の方から通知があつた、本會は謹んで哀悼の誠意を表する。

○新入會員紹介

會 報 ○會員の計報 ○新入會員紹介 ○退會者 ○會務報告

本誌第二十三年第三號に發表せし以後の入會者を左の通り紹介する。

會員章番號	氏 名
一一三一	
一一三二	
一一三三	
一一三四	
一一三一	
一一三六	
一一三七	小 源
一一三八	

尙ほ高橋健治氏は會則第十五條に據りて入會された唯一の正會員である。

○退 會 者

昭和四年十一月八日附（五三八） 松江市 日置繁雄氏

○會 務 報 告

昭和四年九月二十九日午前九時より、麴町區紀尾井町皆香園に於いて幹事會を開き、尙小集會終了後も引續き幹事會を開き左記諸件につき協議せり。

一、幹事の擔當事務決定(山岳第二十二年第三號所載)

一、雜誌紙質改善の件

一、圖書保管室兼有志會合室設置に關しては、藤島、楨、松方、田中、鳥山、渡邊各幹事を小委員として、實現に努力すること。

出席幹事 別宮、藤島、岩永、冠、木暮、楨、松方

田中、鳥山。

評議員 武田。

昭和四年十月十二日午後七時より事務所に於いて、去る九月二十九日の幹事會の延長として幹事會を開き左記諸件につき協議せり。

一、雜誌の見本刷出來につき、様式を決定し、山岳第二十四年第一號より實行すること。

一、山岳第二十四年第一號及び第二號の原稿を決定す。

一、山岳第二十四年第三號の原稿取集めの件。

一、本會を法人組織とする件。

出席幹事 別宮、藤島、岩永、冠、木暮、松方、田中、鳥山。

○本會規則拔萃 (大正十三年九月改正)

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌『山岳』ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第四條 本會ハ毎年大會及ビ小集會ヲ開ク

第五條 本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セシム

第十條 本會會員ヲ別テ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラル、モノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送付スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス(入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ)

第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ

會費ヲ添へ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年金六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付ス

ベキモノトス

第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ

爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。

一、用紙は半紙半枚丈、天地左右をあけ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十字詰とし、毎紙同一行數のこと。

(原稿用紙は事務所へ申越次第直に送ります)

一、。等「」○は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をなす時はその旨を括弧内に明記されたきこと。

一、スケッチは複製の際誤記、脱漏等の虞あるを以て豫め本誌面に適せる大きに複製ありたきこと。(但し其儘直に寫眞版に附し得るものは大さ隨意)。

一、原稿は左記宛御送附のこと。

會 報 ○投稿規定

東京市牛込區河田町十一「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

○本會圖書室設置賛助員氏名

(ABC順)

藤島 敏男	古谷 孝一	橋本 靜一
早川 種三	飯塚篤之助	今西 錦司
冠松 次郎	木村 鑛吉	木暮理太郎
小島 久太	近藤 茂吉	黒田 正夫
檜 有恒	松井 幹雄	松方 三郎
松本 善二	目黒 四郎	中村清太郎
岡田 喜一	岡基徳之助	大島 永明
三枝 守博	佐々 保雄	佐藤 文二
四手井 綱彦	會原喜久蔵	高橋 健治
高野 鷹藏	高頭仁兵衛	武田 久吉
田部 重治	田中 菅雄	鳥山 梯成
辻本 滿丸	角田 吉夫	渡邊 漸
山口 成一	山川 默	山崎 和一
別宮 貞俊	岩永 信雄	

一七九

昭和四年十二月二十三日印刷
昭和四年十二月二十五日發行

第二號定價【貳圓五拾錢】

新瀉縣三島郡深才村深澤

編輯兼發行者

高頭仁兵衛

東京市芝區高輪南町三十番地

發行者

日本山岳會

振替口座東京四八二九番

東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地

印刷者

益枝寅三郎

東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地

印刷所

文雅堂印刷所

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

氷と雪

全日本スキー聯盟 林學士
會長 男爵 稻田昌植序
日本山岳會會員 藤木九三跋
日本山岳會會員 加納一郎著

深雪國日本、氷點下氣候の冬季日本に氷雪輪廻の經典出づ。憂鬱を脱した極めて平易流麗な科學的記載。北地の人々に新しき知見を獲得せしめ、南國人にとつて正に驚異と讚嘆の充滿である。スキー家、冬季登山家は科學的素養を深めるよりもまづ心の高揚を禁じえぬであらう。

因習的な暗さ、みじめさ、意氣地なさから我等の生活と産業を救うて、明るく、強く、潑刺として氷雪世界に邁進すべく、新著「氷と雪」は深雪國日本の冬に献ぜられた。

目 要

- 一 氷雪思慕 氷と雪の魅力—ウインター・アルピニズム—人類の水雪への歩み—雪に對する態度—生命の脅威—雪の功用—雪華
- 圖說二 水と氷の理學的性質 グランド・アイス—水の密度—氷と氷の膨脹關係—復氷—雪差磨の理論—アイス・スケート—氷の成長順序と種類—氷の厚さと抗壓強—氷の彈性粘性—氷のレンズ—氷の電氣的性質 三 氷の藝術 露の美—發生の要件—模様—成因と種類—氷の立體的作品—樹氷—氷花—シガモ—氷柱 四 降る雪、積る雪 降雪時の氣温—我が國の深雪地—最大積雪量推定—我が國多雪の理由—雪の成因—雪華の成立 五 雪華の研究 結晶研究史—觀察の方法—雪華の分類 六 積雪の性質とその形態 深さと比重—氷の小屋—雪中露管—熱傳導率—土地の凍結—陽光の積雪に及ぼす影響—風の影響—積雪の分類—積雪の異常形態—雪冠—吹溜—防雪柵—スノー・ブリッジ—雪庇 七 雪崩 雪崩の分類—堆積量—速度—發生時期—雪崩の豫知—雪崩の回避—脱出方法—救助方法 八 氷河と氷山 山岳地の積雪變化—氷河の成生—速度—削磨作用—氷山 四六 製氷機 豫知—海水の種類 九 氷期及び人と寒 四七 製氷機 豫知—酸瓦斯—地球水上に蓋はるる地方—高さ 四八 製氷機 豫知—氣温—人類常住の最高所—到達の最高所

四六 製氷機 豫知
四七 製氷機 豫知
定價二圓五十錢
送料十錢

電 話 神 田 七 二 七 五 番
振 替 東 京 八 七 四 六 四 番

梓 書 房

東 京 神 田 駿 河 街 四 町 甲 北
北 甲 賀 町 四 番 地

山 岳 在 庫 表

—SANGAKU—

12-5- 929

<u>Vol. No.</u>	<u>Price</u>	<u>Postage</u>	<u>Vol. No.</u>	<u>Price</u>	<u>Postage</u>
4-1	2.00	6	14-1	1.50	6
4-2	2.00	6	14-2	1.50	6
4-3	2.00	6	14-3	1.50	6
5-1	3.00	10	15-1	1.50	6
5-2	1.50	8	15-2	1.50	6
5-3	1.50	8	15-3	1.50	6
6-1	1.50	8	16-1	1.50	6
6-2	1.50	8	16-2	1.50	6
6-3	1.50	8	16-3	2.50	8
7-1	1.50	8	17-1	1.20	6
7-2	1.50	8	17-2	1.20	6
7-3	1.50	8	17-3	1.20	6
8-1	1.50	8	18-1	1.20	6
8-2	1.50	8	18-2	1.20	6
8-3	1.50	8	18-3	1.20	6
9-1	1.50	8	19-1	-	-
9-2	1.50	8	19-2	1.20	6
9-3	1.50	8	19-3	1.20	6
10-1	3.00	10	20-1	-	-
10-2	1.50	8	20-2	1.20	6
10-3	1.50	8	20-3	2.00	8
11-1	-	-	21-1	1.20	6
11-2	1.50	8	21-2	2.50	8
11-3	2.00	8	21-3	1.20	6
12-1	-	-	22-1	2.50	10
12-2-3	3.00	10	22-2	1.20	6
13-1	-	-	22-3	1.20	6
13-2	-	-	23-1	2.00	8
13-3	-	-	23-2	2.00	8
			23-3	2.50	8

健 全 社 書 店

○ 芝 區 高 輪 南 町 三
振 替 東 京 三 二 〇 五 二

Y

一七

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXIV

1929

No. 2